

西石山原遺跡ほか

—常磐自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅰ—

平成二十四年三月

宮城県教育委員会
東日本高速道路株式会社

西石山原遺跡ほか

—常磐自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅰ—

西石山原遺跡・山王B遺跡・浅生原遺跡
上宮前遺跡・北山神遺跡・南山神B遺跡

平成24年3月

宮城県教育委員会
東日本高速道路株式会社

西石山原遺跡ほか

—常磐自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅰ—

序 文

宮城県南東部を縦貫する常磐自動車道は、現在山元インターチェンジまでの区間が開通し、さらに南に向かって工事が進められています。平成23年3月11日の東日本大震災により大きな被害を受けた宮城県および山元町にとっては、復興のためにも重要な事業に位置づけられます。しかし、この建設用地内にも先人が残した貴重な文化財が埋蔵されている遺跡があり、地域の再興には、豊かな自然と歴史、風土に培われてきた郷土の文化や文化遺産の持つ魅力、歴史の継承もまた不可欠です。

宮城県教育委員会では、東日本高速道路株式会社と十分な保存協議・調整を重ねてまいりました。そのうえで調査することとなった遺跡のうち、平成22～23年度に当教育委員会が実施した山元町西石山原遺跡ほかの調査成果を本書に収録しました。こうした成果が広く県民の皆様や各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、遺跡の保存に理解を示され、発掘調査に際しては多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、さらに実際の調査にあたられた皆様に対し、厚くお礼申し上げる次第です。

平成24年3月

宮城県教育委員会

教育長 小林伸一

例　　言

1. 本書は、東日本高速道路株式会社との協議に基づき実施した、常磐自動車道建設に伴う西石山原遺跡ほかの発掘調査報告書である。
2. 調査は宮城県教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が担当した。
3. 各遺跡の保存協議や発掘調査に当たっては、東日本高速道路株式会社東北支社や山元町教育委員会から多大な協力をいただいた。
4. 本書の執筆は調査担当者の協議を経て、以下の分担で行い、全体を初鹿野博之が編集した。

西石山原遺跡：初鹿野博之、大坂拓
山王B遺跡・浅生原遺跡・上宮前遺跡・北山神遺跡・南山神B遺跡：山口淳、千葉直樹
5. 本書の図2は、国土交通省国土地理院発行の1/25,000の地形図を複製して使用した。
6. 各遺跡の測量座標値は世界測地系に基づく平面直角座標第X系による。方位Nは座標北を表す。

なお、測量座標値は平成23年3月11日の東北地方太平洋沖地震より前のものを用いている。
7. 本書で使用した遺構略号は以下の通りである。

SI：竪穴住居跡 SB：掘立柱建物跡 SD：溝跡 SK：土坑 SR：窯跡 SX：その他の遺構
8. 土色の記述にあたっては、『新版 標準土色帖 1994年版』（小山・竹原 1994）を用いている。
9. 遺構図版・遺物図版の縮尺は、それぞれスケールを付して示している。
10. 遺物図版において、土師器黒色処理はスクリーントーンによって示した。また、礫石器のスクリーントーンと矢印は磨面の範囲を示している。
11. 炉石・磨製石斧などの石材鑑定は、東北大大学東北アジア研究センターの宮本毅氏に依頼した。また、縄文時代前期の土器について東北歴史博物館の相原淳一氏よりご助言いただいた。
12. 西石山原遺跡の航空写真撮影は（株）イビソクに委託して行った。また、本書の遺物写真的撮影は、一部を除いて（株）アートプロフィールに委託して行った。
13. 調査成果は、現地説明会、平成22・23年度宮城県遺跡調査成果発表会、文化財保護課ホームページなどでその内容の一部を公表しているが、本書と内容が異なる場合には、本書がこれらに優先する。
14. 発掘調査の記録や出土遺物は、宮城県教育委員会が保管している。

目 次

序文	
例言	
目次	
はじめに	1
西石山原遺跡	5
1. 調査の概要	6
2. 発見した遺構と遺物	6
(1) 壁穴住居跡	6
(2) 掘立柱建物跡	32
(3) 土器埋設遺構	36
(4) 土坑	38
(5) 遺物包含層	57
(6) 炭窯跡	57
(7) 遺構外出土遺物	59
3. 総括	62
写真図版	69
山王B遺跡	93
1. 調査の概要	94
2. 発見した遺構と遺物	95
3. まとめ	106
写真図版	107
浅生原遺跡・上宮前遺跡・北山神遺跡・南山神B遺跡	111
引用・参考文献	123
報告書抄録	125

図面目次	
[はじめに]	
図1 山元町の位置	1
図2 山元町内の遺跡分布と常磐自動車道建設 関連遺跡	3
[西石山原遺跡]	
第1図 遺跡の範囲と調査区の位置	7
第2図 遺構配置図	8
第3図 SI52B堅穴住居跡	10
第4図 SI52B堅穴住居跡複式炉	12
第5図 SI52A堅穴住居跡	14
第6図 SI52堅穴住居跡出土遺物（1）	15
第7図 SI52堅穴住居跡出土遺物（2）	16
第8図 SI52堅穴住居跡出土遺物（3）	17
第9図 SI53堅穴住居跡	19
第10図 SI53堅穴住居跡複式炉	20
第11図 SI53堅穴住居跡出土遺物	21
第12図 SI54堅穴住居跡	22
第13図 SI54堅穴住居跡複式炉	23
第14図 SI54堅穴住居跡出土遺物	24
第15図 SI57堅穴住居跡	25
第16図 SI57堅穴住居跡複式炉	26
第17図 SI57堅穴住居跡出土遺物	27
第18図 SI78堅穴住居跡	28
第19図 SI78堅穴住居跡出土遺物	29
第20図 SI90堅穴住居跡	31
第21図 SI90堅穴住居跡出土遺物	31
第22図 SI58堅穴住居跡、SB71掘立柱建物跡	33
第23図 SB71掘立柱建物跡ほか出土遺物	34
第24図 SB72・SB74掘立柱建物跡	34
第25図 SB73掘立柱建物跡	35
第26図 SB113掘立柱建物跡	36
第27図 SX1・SX55土器埋設遺構	37
第28図 SX1・SX55土器埋設遺構出土遺物	37
第29図 各遺構図の位置	38
第30図 SK20・SK33土坑ほか	39
第31図 SK16・SK20土坑出土遺物	40
第32図 SK33・SK61土坑出土遺物	41
第33図 SK23・SK24・SK34・SK42・SK45 土坑ほか	43
第34図 SK21・SK23・SK24土坑出土遺物	44
第35図 SK34・SK42・SK45土坑出土遺物	45
第36図 SK25・SK43・SK47・SK114土坑ほか	46
第37図 SK25・SK39土坑出土遺物	46
第38図 SK43・SK47土坑出土遺物	47
第39図 SK11・SK26土坑ほか	48
第40図 SK3・SK4・SK6・SK9・SK10・SK11 土坑、Pit48出土遺物	49
第41図 SK27・SK28・SK29土坑ほか	50
第42図 SK37・SK38土坑出土遺物	50
第43図 SK41土坑ほか	51
第44図 SK88土坑ほか	51
第45図 SK75・SK96・SK103～109土坑ほか 平面図	52
第46図 SK75・SK96・SK103～108土坑断面 図	53
第47図 SK75土坑出土土器	53
第48図 SK75・SK96土坑、Pit110出土石器	54
第49図 SK103～109土坑出土土器	55
第50図 SK103～109土坑出土石器	56
第51図 SX60遺物包含層出土土器	57
第52図 SR66炭窯跡	58
第53図 Ⅲ層出土遺物	59
第54図 Ⅱ層、遺構確認時（Ⅱ～Ⅲ層）出土 遺物	60
第55図 南斜面、搅乱出土および表面採集 遺物	61
第56図 時期別遺構分布1	63
第57図 時期別遺構分布2	66
[山王B遺跡]	
第1図 遺跡の範囲と調査区の位置	94
第2図 遺構配置図	95
第3図 SB8・SB9掘立柱建物跡、SD17溝跡	96
第4図 出土遺物	97

第5図	SB10・SB13掘立柱建物跡	99	写真図版10	土坑(1)	78
第6図	SB10・SB13掘立柱建物跡	101	写真図版11	土坑(2)	79
第7図	SB14・SB16掘立柱建物跡	102	写真図版12	SX1・SX55土器埋設遺構、SR66 炭窯跡	80
第8図	SK2・SK6・SK7・SK19土坑、SX18 性格不明遺構	105 [浅生原遺跡ほか]	写真図版13	SI52竪穴住居跡出土遺物(1)	81
第1図	浅生原遺跡の範囲と調査区の位置	113	写真図版14	SI52竪穴住居跡出土遺物(2)	82
第2図	浅生原遺跡 SD3・SD4溝跡	114	写真図版15	SI53・SI54竪穴住居跡出土遺物	83
第3図	浅生原遺跡 SD3・SD4溝跡出土遺 物	116	写真図版16	SI54・SI57・SI90竪穴住居跡、 Pit出土遺物	84
第4図	浅生原遺跡 SK1・SK2土坑および 出土遺物	116	写真図版17	SK3・SK4・SK6・SK9・SK10・ SK16・SK20出土遺物	85
第5図	浅生原遺跡 遺構外出土遺物	116	写真図版18	SK21・SK23・SK24・SK25・ SK34出土遺物	86
第6図	上宮前遺跡の範囲と調査区の位置	118	写真図版19	SK33・SK37・SK38・SK39・ SK41・SK42出土遺物	87
第7図	北山神遺跡の範囲と調査区の位置	119	写真図版20	SK43・SK45・SK47・SX55・ SK61出土遺物	88
第8図	南山神B遺跡の範囲と調査区の位置	120	写真図版21	SK75・SK103~109出土遺物	89
表目次					
[はじめに]					
表1	常磐自動車道建設設計画に伴う発掘調査	1	写真図版22	SK96・Ⅲ層・遺構確認時出土 遺物	90
表2	遺跡内容表	4	写真図版23	遺構確認時、南斜面・擾乱出土 および表面採集遺物	91
[西石山原遺跡]					
第1表	土坑一覧表	38	写真図版24	古代の出土遺物	92
第2表	複式炉を伴う住居一覧表	64	[山王B遺跡]		
写真図版目次			写真図版1	山王B遺跡全景	107
[西石山原遺跡]					
写真図版1	西石山原遺跡全景	69	写真図版2	SB8・SB9掘立柱建物跡	108
写真図版2	SI52竪穴住居跡(1)	70	写真図版3	SB10・SB11・SB12・SB13掘立 柱建物跡	109
写真図版3	SI52竪穴住居跡(2)	71	写真図版4	土坑および出土遺物	110
写真図版4	SI52竪穴住居跡(3)	72	[浅生原遺跡ほか]		
写真図版5	SI53竪穴住居跡	73	写真図版1	浅生原遺跡・上宮前遺跡・ 北山神遺跡・南山神B遺跡	121
写真図版6	SI54竪穴住居跡	74	写真図版2	浅生原遺跡 遺構と出土遺物	122
写真図版7	SI57・SI90竪穴住居跡	75			
写真図版8	SI78竪穴住居跡、掘立柱建物跡の 配置	76			
写真図版9	掘立柱建物跡 柱穴断面	77			

はじめに

1. 常磐自動車道建設計画に伴う発掘調査

宮城県亘理郡山元町では、東日本高速道路株式会社による山元IC以南の常磐自動車道建設工事が進められている。

道路建設予定地周辺では、これまで周知の遺跡が少なく、本格的な発掘調査も行われていなかったが、畠や山林などで土器や石器などが採集されていた。このため、工事に先立ち平成19年度と20年度に宮城県教育委員会と山元町教育委員会が遺跡の分布調査を実施した。その結果、平成21年3月の段階で道路建設予定地内の遺跡は周知のものと新発見のものを合わせて21遺跡確認された。

また、遺跡隣接地で確認調査が必要な地点および立木伐

採後に分布・確認調査が必要な地点を含め全37地点（図2-1～37）となった。これを受けて、宮城県教育委員会、山元町教育委員会、東日本高速道路株式会社が協議した結果、工事の影響を受ける遺跡について宮城県教育庁文化財保護課と山元町教育委員会が分担して発掘調査を行い、記録保存することになった。また、遺跡隣接地および立木伐採後に分布・確認調査が必要とされる地点について、遺跡が発見された場合には同様に事前調査を行って記録保存することになった。

発掘調査は平成22年度から開始し、宮城県教育庁文化財保護課では平成24年2月までに表1のようない日程で調査を実施した。このうち、本書では山元町浅生原地区と高瀬地区にある6遺跡（表1太字）の調査成果を報告する。

表1 常磐自動車道建設計画に伴う発掘調査（宮城県教育庁文化財保護課担当分、平成24年2月20日時点）

地点番号	遺跡名（登録番号）	調査年度	調査期間	調査対象面積（m ² ）	調査面積（m ² ）	主な成果	備考
9	山王B遺跡（14082）	H22	22.5.10～6.21、11.25	4,000	2,000	近世以降の掘立柱建物跡	調査終了
		H23	24.2.8～2.9	500	100	など	
10	内手遺跡（14083）	H22	23.2.21～2.24	6,000	4,000	古代の廐窯跡7基	調査終了
		H23	23.9.12～12.14				
11	内手遺跡南隣接地	H22	23.11.4～11.15、24.2.9～	6,000	500	古代の廐窯跡1基、内手遺跡の範囲を南に拡大	調査終了
		H23	2.16				
12	瀧生原遺跡（14013）	H22	22.5.27～7.13	14,000	2,200		調査終了
13	—	—	—	—	—		現地確認、調査不要
14	上宮前遺跡（14071）	H22	22.7.9～7.23	2,900	700	—	調査終了
		H23	23.8.13	700	100		
15	西石山原遺跡北隣接地	H22	22.8.3～8.6	900	100		調査終了
16	西石山原遺跡（14084）	H22	22.7.28～12.9	3,600	3,400	縄文時代前・中期および古代の墳墓跡	調査終了
		H23	23.6.13～9.27				
17	西石山原遺跡南隣接地	H22	23.4.4～3.11	4,500	1,700	時期不明の廐窯跡1基（西石山原遺跡に含む）	調査終了
18	北山神遺跡（14072）	H22	22.7.28～8.18、11.22～11.24	2,200	1,100		調査終了
		H23	23.9.5～9.7	2,000	900		
19	南山神B遺跡（14089）	H22	23.2.28～3.3	2,400	700		調査終了
20	荷駄馬B遺跡（14086）	H23	24.2.16	3,600	—		試掘のみ、残りなし
34	—	H23	24.2.16	4,800	—		試掘のみ、残りなし
35	—	—	—	6,000	—		現地確認、調査不要
36	—	H23	23.11.16、24.1.24	20,000	—		試掘のみ、残りなし
37	—	H23	23.11.16	400	—		試掘のみ、残りなし



図1 山元町の位置

2. 遺跡の位置と概要

山元町は西部が阿武隈山地に属する山麓地帯で、東部は沖積平野や浜堤が広がっている。今回調査した遺跡群が所在する浅生原地区・高瀬地区は、山麓地帯裾部に位置し、東に樹枝状に延びる緩やかな丘陵上にある。この丘陵の多くは現在果樹園や畑地に利用されており、南北に通る町道・東街道線（通称：アップルライン）が主要な生活道路として利用されている。常磐自動車道はこの町道とほぼ並行する形で建設が予定されている（図2）。

〔山王B遺跡（9）〕山元町浅生原字山王に所在し、山元町役場から南西に約0.9km、町道・東街道線沿いに位置する。標高約50mの小丘陵上に立地し、現況は宅地や畑地、荒地である。遺跡のある山元町浅生原地区山王は、「かつて貝塚があり、土器や石器、石鎚なども出土した。」（山元町教育委員会1994）とされ、遺跡からは土師器と鉄滓を採集している。

〔浅生原遺跡（12）〕山元町浅生原字内平に所在し、山元町役場から南西約1.3km、町道・東街道線と浅生原地区を横断する町道・浅生原線の交差点付近に位置する。標高45～55mほどの丘陵緩斜面に立地しており、遺跡中央付近を大沢川が南西から北東に流れ、遺跡を南北に分断している。現況は宅地や畑地、荒地である。遺跡は縄文中・後期の散布地（志間1956）として知られている。

〔上宮前遺跡（14）〕山元町浅生原字上宮前に所在し、山元町役場から南西約2km、町道・東街道線から西に約200mの地点にある。標高70～80mの丘陵斜面に立地し、現況は雑壇状に造成された水田や畑地である。古代の土師器や中世陶器を数点採集している。

〔西石山原遺跡（16）〕山元町高瀬字西石山原に所在する。山元町役場から南西約2.1km、町道・東街道線からは西に約200mの地点にある。東西約100m、南北約50m、標高80～90mの丘陵頂部とその下の斜面に立地し、現況は果樹園・山林である。縄文時代早期～中期の土器や土師器、鉄滓を採集している。

〔北山神遺跡（18）〕山元町高瀬字北山神に所在し、山元町役場から南西約2.6kmに位置する。標高約70mの緩やかな平坦地に立地し、現況は宅地、畑地、果樹園等である。畑地から縄文時代のものと思われる石器を数点採集している。

〔南山神B遺跡（19）〕山元町高瀬字南山神に所在し、山元町役場から南西に約3kmに位置する。標高約75mの緩斜面に立地し、現況は畑地、山林である。周辺の畑地から縄文土器、石器、土師器、中世陶器を数点採集している。町道・東街道線を挟んで東側には、縄文早・前期の散布地である南山神遺跡（図2-39）がある。

3. 周辺の遺跡

山元町内には現在までに100余りの遺跡が登録されており、その多くは今回調査した遺跡と同様に、阿武隈山地から延びる丘陵縁辺部に分布する（図2）。以下、これまでに調査された代表的な遺跡を時代ごとに記述する。

〔縄文時代〕北経塚遺跡（49）で早期末葉～前期初頭の堅穴住居跡や遺物包含層などが見つかっている（山元町教委2004・2010）。中島貝塚（46）では、縄文中期～晩期の土器・石器とともに貝殻・魚骨・獸骨が数多く出土した（山元町史編纂委員会1986）。谷原遺跡（4）では、縄文時代後期の土坑や



図2 山元町内の遺跡分布と常磐自動車道建設関連遺跡

表2 遺跡内容表（1~33が常磐自動車道建設に関連遺跡）

No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	中筋遺跡	散布地	奈良・平安・中世	28	影倉C遺跡	散在地	奈良・平安	48	船の内遺跡	散布地	古代
3	日向港跡	散布地	古代	29	影倉D遺跡	生産遺跡	時期不明	49	北野塚遺跡	飛鳥・奈良期	古文書・飛・奈・平安～中世
4	谷原遺跡	集落	彌文後・古代・中世	30	河原町B遺跡	散在地	奈良・平安	50	日向港跡	港跡	古代
5	浦原遺跡	集落	古代・中世	31	河原町C遺跡	散在地	彌文	51	船下苦跡	苦跡	古代
6	石垣遺跡	散布地	古代	32	小山遺跡	散在地	奈良・平安	52	中島相跡	城跡	中世
7	の場遺跡	散布地	古墳・古代	33	法爾繩跡	散在地	彌文	53	合戰原B遺跡	製鉄	時期不明
9	山王B遺跡	散布地	古代	38	影倉跡	川原・散在地	彌文後・晚	54	合戰原C遺跡	散布地	古代
10	内手遺跡	貝冢・墓跡	古代	39	南山神B遺跡	散在地	彌文早・前	55	戸花山窯跡	窯跡	平安
12	浅生原遺跡	散布地	彌文・後	40	右山A遺跡	散在地	彌文	56	合戰原D遺跡	跡・理・難	古文書・飛・奈良・平安
14	上宮前遺跡	散布地	平安・中世	41	下平A遺跡	散在地	彌文前	57	北名古東B窯跡	窯跡	古代
16	西石山原遺跡	集落	彌文・平安	42	山王遺跡	斜坡	古代?	58	北名古東窯跡	窯跡	古代
18	北山神遺跡	散布地	彌文	43	人山遺跡	散布地	彌文後・古代	59	北極現遺跡	生産遺跡	平安
19	南山神B遺跡	散布地	彌文・奈良・平安・中世	44	山寺遺跡	城跡	中世	60	井戸附櫛穴窯跡	櫛穴窯	古墳後
24	新田B遺跡	散布地	奈良・平安	45	石室塚跡	散布地	古代	61	風塚古墳群	円墳	古墳後
26	影倉E遺跡	散布地	飛・奈良・平安・近世	46	中馬1塚	貝塚	國文中～晚	62	風塚遺跡	飛・奈・古墳・平安	
27	影倉F遺跡	散布地	彌文	47	小平館跡	城跡	中世	63	川内遺跡	製鉄	平安?

遺物包含層などが調査された。

〔弥生時代〕館の内遺跡（48）で中期後半の十三塚式の土器が出土している（宮城県教委2002）。

〔古墳時代〕合戦原遺跡（56）では、前方後円墳や円墳、横穴墓、窯跡の存在が知られているほか、南小泉式期の集落跡が調査された（宮城県教委1991）。狐塚遺跡（62）では、古墳群のはかに後期～奈良時代の集落跡の存在が明らかとなった（宮城県教委1993、山元町教委1995）。井戸沢横穴墓群（60）では福島県浜通り地方に点在する横穴墓群との関連が指摘されている（佐々・志間・氏家1971）。北経塚遺跡（49）では古墳時代前期の方形周溝跡と中期の古墳周溝跡が調査されている（山元町教委2010）。

〔古代〕館の内遺跡（48）では、規格的に配置された掘立柱建物跡が検出され、墨書き土器や製塙土器なども出土している（宮城県教委2002）。谷原遺跡（4）では、幅2mを越える大溝と掘立柱建物跡が調査されている。

〔中世〕北経塚遺跡（49）や谷原遺跡（4）で中世の屋敷跡が調査されている。その他に多くの館跡が所在するが、館主や築造年代の不明なものが多い。小平館跡（47）は、天文年間（1532～1555）に亘理要害14世亘理宗隆が居館したとされている（紫桃1974）。

4. 調査と記録の方法

各遺跡の調査は、遺跡の内容と広がりを確認し、記録保存することを目的に行った。対象地内にトレンチまたは調査区を設定し、重機または人力で遺構・遺物の有無を確認しながら掘り下げ、さらに人力による遺構検出作業を行った。調査区は遺構の検出状況に応じて計画路線範囲内で適宜拡張し、検出された遺構はすべて精査し完掘した。

調査記録について、平面図は主に電子平板で作成し、状況に応じて縮尺20分の1または10分の1の手書き実測図を作成した。平面図の基準となる世界測地系に基づく座標点は路線敷予定地の測量杭を利用した。断面図については縮尺20分の1の手書き実測図を作成した。また、遺跡内の土層について柱状図を適宜作成し、堆積層や地山の特徴を記録した。

写真記録については、6×7cm判フィルム（モノクロ・カラーリバーサル）およびデジタルカメラ（1230万画素）を使用した。

にし いし やま はら い せき
西 石 山 原 遺 跡

調 査 要 項

遺 蹤 名：西石山原遺跡（宮城県遺跡地名表記載番号：14084、遺跡記号：WA）

所 在 地：宮城県亘理郡山元町高瀬字西石山原

調査原因：常磐自動車道建設事業

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

平成22年度 = 千葉直樹、山口 淳、大沼真人、菊地逸夫、村上裕次

平成23年度 = 初鹿野博之、大沼真人、三浦秋司、大坂 拓

山中信宏、濱中一道、鈴木啓司

調査期間：平成22年 7月28日から12月9日

平成23年 3月4日から3月11日

平成23年 6月13日から9月27日

調査対象面積：約9,000m²（隣接地を含む）

調査面積：約5,200m²（隣接地を含む）

調査協力：東日本高速道路株式会社東北支社、山元町教育委員会

1. 調査の概要

遺跡は東西に伸びる比較的平坦な小丘陵上に立地しており、南側と北側は急斜面となっている。平成22年度に丘陵上の計画路線内に調査区を設定し、隣接地の斜面についてもトレンチ調査を実施した(第1図)。その結果、丘陵上で縄文時代の竪穴住居跡など多数の遺構が検出され、南側斜面でも窓跡1基を確認した。北側斜面では遺構・遺物は確認されなかった。そのため、丘陵上および南斜面の遺構を対象として、平成22年度と23年度に分けて調査を実施した。平成23年8月12日に調査区全体の航空写真を撮影し、8月27日に現地説明会を開催した(約90名参加)。平成23年9月27日に現地での調査を終了した。

検出された遺構は、竪穴住居跡7軒、掘立柱建物跡4棟、土坑74基、土器埋設遺構2基、炭窯跡1基、ピット多数である。出土遺物は縄文土器、石器、土師器、須恵器、鉄製品など整理用平箱約35箱である。

大部分の遺構は丘陵上に分布し、特に尾根筋に沿うように遺構密度が高い。丘陵上は全体的に後世の削平を受けているほか、風倒木や木の根による擾乱と見られる穴が多数認められた。

基本層序は地点によって若干異なるが、丘陵尾根部ではおよそ以下のような層が認められる。遺構確認面は基本的にⅢ層だが、削平を受けている部分などではⅣ層上面である。

I層：表土。暗褐色シルト。厚さ約15cm。

II層：灰黄褐色シルト。しまりなし。縄文時代と古代の遺物を含む。厚さ20~30cm

III層：暗褐色シルト。下層は褐色で粘土質。縄文時代の遺物を含む。厚さ10~20cm

IV層：黄褐色粘土。地山。下層ほど大型の礫を多く含む。

遺構番号は、遺構の種類に関係なく1から通し番号を付け、竪穴住居跡や掘立柱建物跡に属するピットは、その遺構内でP1から番号を付けている(例、SI52-P1)。それ以外のピットは遺構番号とは別に1から通し番号を付けているが、本報告では遺物が出土している一部のピット(第22図Pit1など)を除きピット番号は記述しない。

2. 発見した遺構と遺物

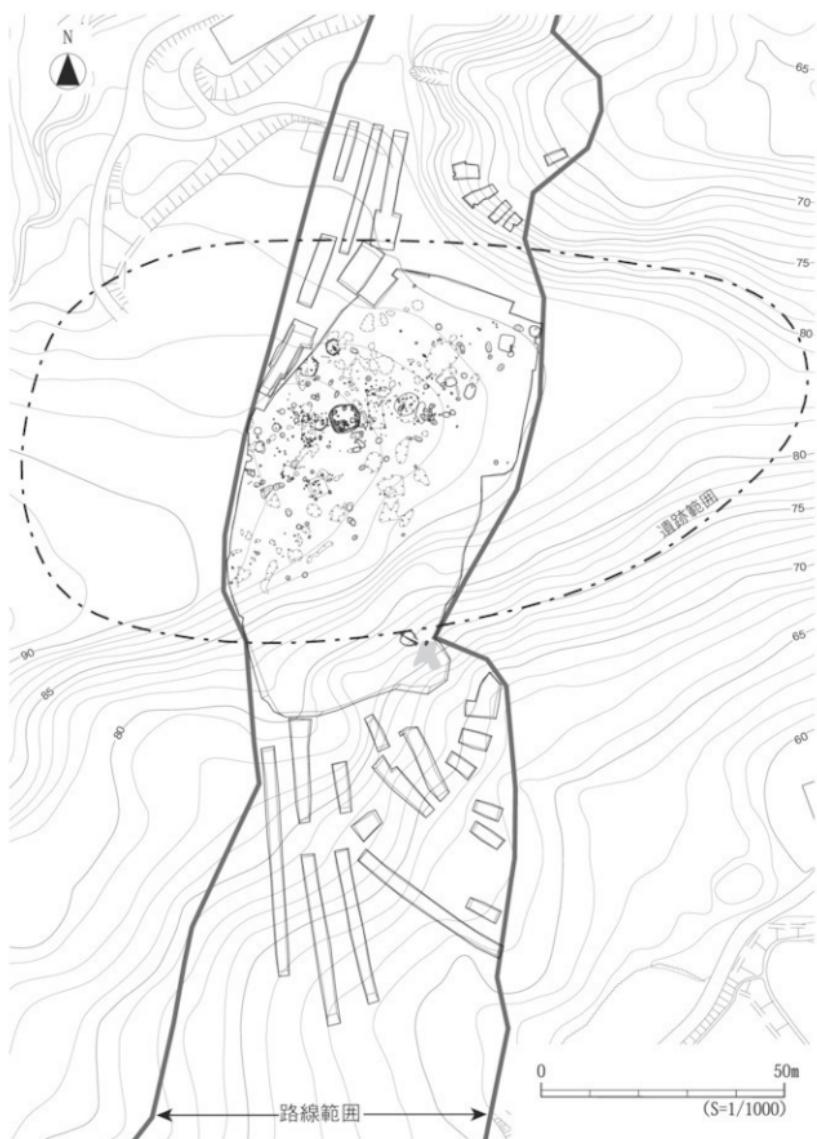
(1) 竪穴住居跡

7軒確認したが、SI52やSI90以外は削平により壁がほとんど残存していない。また、その他に住居跡と認定しなかったが、焼土址や土器埋設遺構が見られるため、実際にはさらに数軒の竪穴住居跡があった可能性がある。

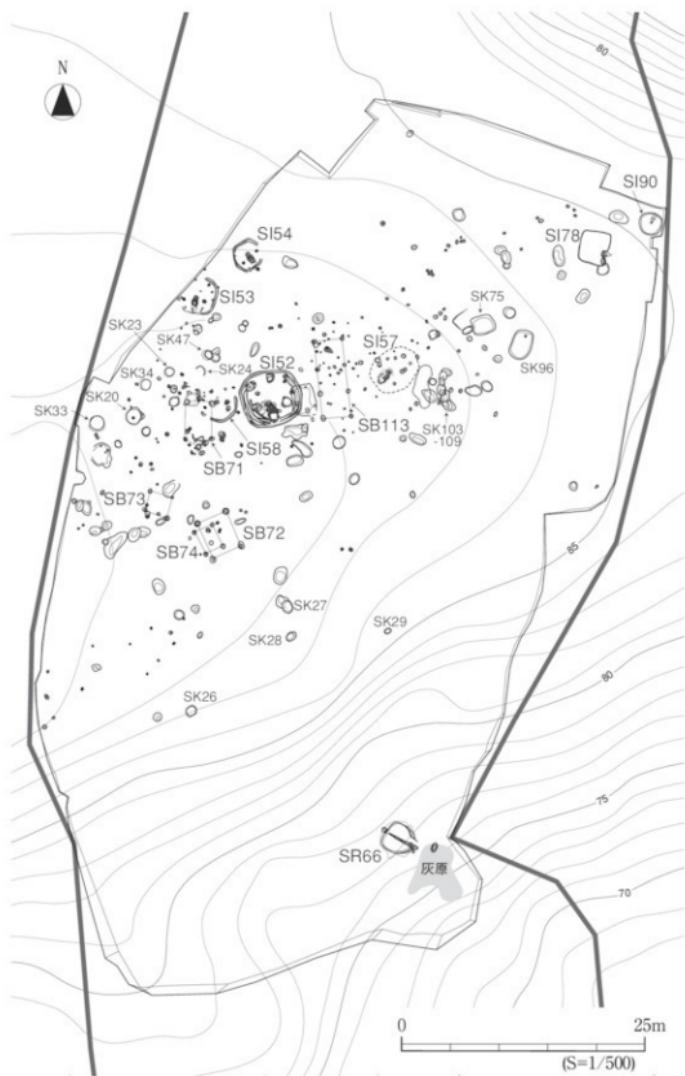
【SI52竪穴住居跡】

〔位置〕 調査区中央付近。

〔重複〕 SK38土坑と重複し、これより古い。また、本住居跡は合計4回の建て替えが確認された。炉の方向が異なるA住居跡とB住居跡に大きく分けられ、B住居跡のほうが新しい。さらにB住居跡に3期(B1~B3)の変遷が認められる。



第1図 遺跡の範囲と調査区の位置



第2図 遺構配置図（竪穴住居跡・掘立柱建物跡・窯跡・主な土坑）

〈SI52B〉（第3・4図）

〔規模・平面形〕最も新しいB3期で、東西約6.2m、南北約5.7mの楕円形だが、南辺や西辺が直線的なためやや方形に近い。内側に古い段階の周溝があり、南隅で2条に分かれれる。内側からB1、B2期とする。B2期の規模は東西約5.5m、南北5.0m以上と推定される。B1期の規模は不明である。以下、B3期の住居跡を中心に記述し、B1、B2期の住居跡は残存している部分について補足的に記述する。

〔堆積土〕3層に分かれ、自然堆積している。

〔壁〕最も残りのよい西壁で約30cm残存しており、北東側に向けて浅くなっている。

〔床面〕基本的に地山を床面とするが、壁際など部分的に埋土を床面としている。

〔周溝〕最も外側のB3期の周溝は、上幅が20~50cmある。深さは場所によって異なり、北辺~西辺では床面から20~30cm、南辺~東辺では10~20cmある。断面形はU字形を呈し、多くの部分で幅約10cmの壁材の痕跡が認められた。B1、B2期の周溝も規模はほぼ同じだが、北辺では確認されない。3条の周溝が残る住居南辺の断面で観察したところ、B1、B2期の周溝にも壁材の痕跡が残っていることが確認された。また、B1期の住居廃絶後、周溝の底みに自然堆積の黒色土（第3図B-B'の14層）が溜まり、そこを埋めて床を貼りながら（同図12層）、B2期の周溝が構築されていることも確認された。

〔柱穴〕新旧関係や位置から、52B住居跡に伴うと考えられる柱穴が5個（P1、2、3、5、7）検出されている。このうち規模の類似や柱の位置からP1~P3が主柱穴と考えられる。

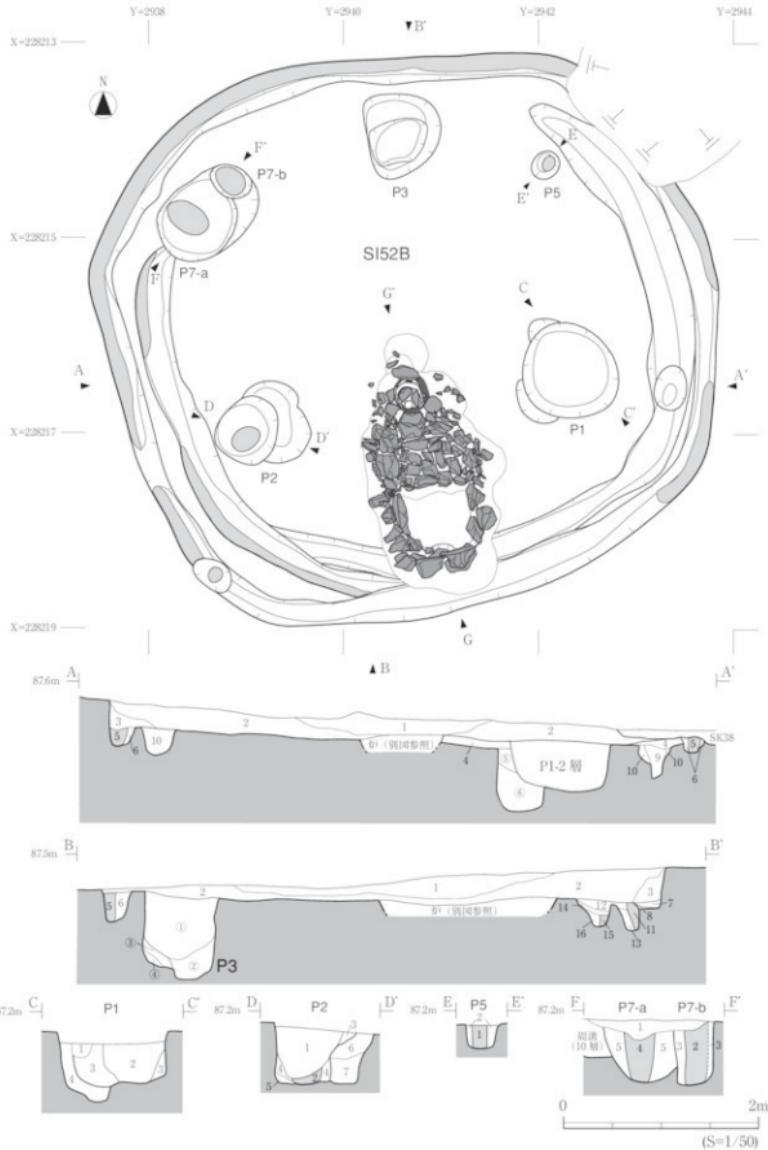
〈P1〉住居南東部に位置する。3時期の変遷が認められる。最も新しい段階のピットは直径約100cmの円形で深さは床面から50~60cmある。柱は抜き取られて残っていないが、地山を多く含む掘方埋土が残存する。また、最も新しいピットの北側と西側に、古いピットの掘方が残存する。規模・平面形は不明だが、深さはいずれも床面から約70cmある。

〈P2〉住居南西部に位置する。2時期以上の変遷が認められる。最も新しい段階のピットは直径60~70cmの不整な円形で、深さは床面から約60cmある。柱は抜き取られているが、下部に直径20~30cmの柱痕跡と、地山を多く含む掘方埋土が残存する。最も新しいピットの東側に、古いピットの掘方が残存する。切り合いが確認できなかつたが、掘方の形態からみて古いピットの中でさらに新旧2段階の変遷があった可能性が高い。

〈P3〉住居北部に位置する。直径70~90cmの不整な円形で、深さは床面から70~80cmある。柱は抜き取られており、底面付近に地山を多く含む掘方埋土がわずかに残る。底面に不整な平面形の段差があるため、ほぼ同じ場所で柱が建て替えられた可能性がある。

〈P7〉住居北西部に位置する。B2期の周溝と重複しており、これより新しい。2本の柱穴に分かれれる。西側の柱穴（P7-a）は直径70~90cmの楕円形で、深さは床面から約60cmある。中央に直径30~50cmの柱痕跡が残存する。東側の柱穴（P7-b）は直径30~50cmの楕円形で、深さは床面から約60cmある。中央に直径20~30cmの柱痕跡が残存する。掘方埋土の切り合い関係より、P7-bが新しいと考えられる。ただし、両方の柱穴を覆うように炭化物や焼土を多く含む層（第3図F-F'の1層）が堆積しており、P7-a柱痕跡上部にまで入り込んでいる。

〔炉〕住居中央南寄りにあり、前庭部・石組部・土器埋設部からなる複式炉である。長軸約210m、短



第3図 SI52B竪穴住居跡

第3図土層観察表

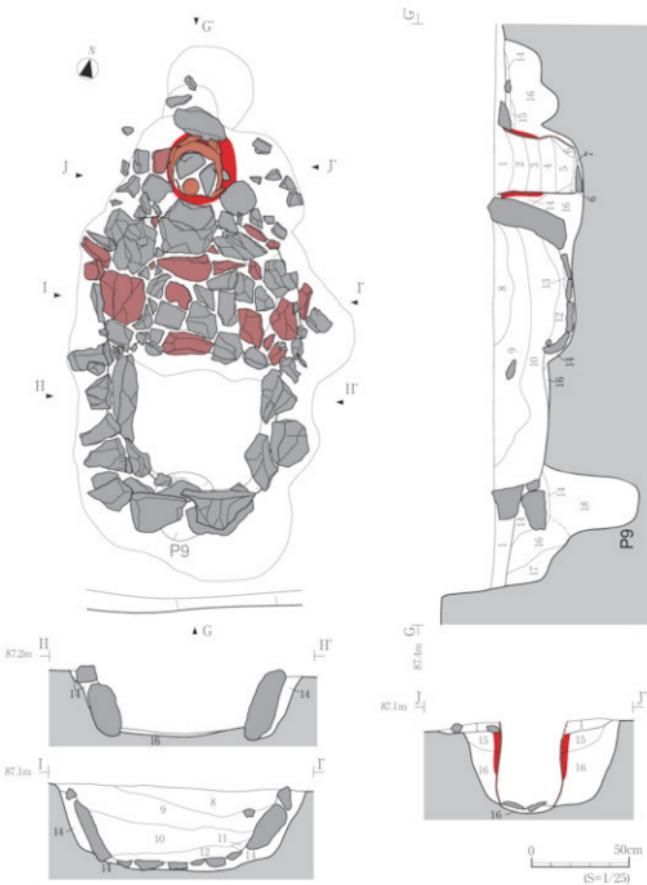
遺構名	序号	土色	土性	特徴	性格
	1	黒褐色 (HOYR2/3)	シルト	地山粒・炭化物粒をわずかに含む	自然堆積
	2	暗褐色 (HOYR3/4)	シルト	炭化物小ブロックを少し含む。地山粒をわずかに含む	自然堆積
	3	暗褐色 (HOYR3/4)	シルト	地山粒小ブロックを含む。炭化物粒・礫土粒をわずかに含む	自然崩落土
B3周溝	4	暗褐色 (HOYR3/4)	シルト	地山粒小ブロックを含む。炭化物粒・礫土粒をわずかに含む	貼床
	5	暗褐色 (HOYR3/4)	粘土	地山小ブロックを少し含む	壁材直貼
	6	褐色 (HOYR4/4)	粘土	地山小ブロックを多く含む	糊方
	7	暗褐色 (HOYR3/4)	シルト	炭化物物を少し含む	埋材直貼?
	8	にぶい黄褐色 (HOYR4/3)	シルト質粘土		
B2周溝	9	黒褐色 (HOYR2/3)	シルト	地山ブロックへ大ブロックを多く含む	糊方
	10	黒褐色 (HOYR2/3)	シルト	地山粒へ小ブロックを含む	糊方
	11	灰褐色 (HOYR3/4)	シルト		壁材直貼
	12	黄褐色 (HOYR5/6)	粘土	地山ブロック主体	貼床
	13	褐色 (HOYR4/4)	粘土	地山粒主体	糊方
B1周溝	14	暗褐色 (HOYR3/3)	シルト		自然崩落
	15	暗褐色 (HOYR3/4)	シルト質粘土		壁材直貼
	16	褐色 (HOYR4/4)	粘土	地山粒主体	糊方
	1	暗褐色 (HOYR3/3)	粘土	地山小ブロックをわずかに含む	擾乱か 糊方
	2	暗褐色 (HOYR3/3)	粘土	地山小ブロック・炭化物・礫土粒を少し含む	糊方
P1	3	黄褐色 (HOYR5/6)	粘土	地山ブロック主体。炭化物を含む	糊方
	4	褐色 (HOYR4/4)	粘土	地山ブロックを多く含む	糊方
	5	黄褐色 (HOYR5/6)	粘土質シルト		糊方
	6	褐色 (HOYR4/4)	粘土質シルト	地山粒多く含む。炭化物・地山ブロックを少し含む	糊方
	7	暗褐色 (HOYR3/3)	粘土質シルト	炭化物・礫土粒を含む	糊方
P2	1	暗褐色 (HOYR3/3)	粘土質シルト	炭化物・礫土粒を含む	柱頭跡
	2	暗褐色 (HOYR3/4)	シルト質粘土	地山ブロックを多く含む	柱頭跡
	3	暗褐色 (HOYR3/4)	粘土質シルト	地山ブロックを多く含む。小礫を含む	糊方
	4	黄褐色 (HOYR5/6)	粘土	地山主体	人為堆積
	5	暗褐色 (HOYR3/4)	シルト質粘土	地山ブロックを多く含む	人為堆積
P3	6	にぶい黄褐色 (HOYR5/4)	粘土質シルト	地山ブロック主体	人為堆積
	7	褐色 (HOYR4/4)	粘土	地山主体	人為堆積
	1	暗褐色 (HOYR3/4)	シルト質粘土	炭化物・礫土粒を多く含む。地山小ブロックを少し含む	糊方
	2	褐色 (HOYR4/4)	粘土	地山ブロックを多く含む	糊方
	3	黄褐色 (HOYR5/6)	粘土	地山主体	糊方
P5	4	暗褐色 (HOYR3/4)	粘土	地山ブロックを少し含む	糊方
	1	暗褐色 (HOYR3/3)	粘土	炭化物・礫土粒を少し含む	柱頭跡
	2	褐色 (HOYR4/4)	粘土	地山ブロックを多く含む	糊方
	1	黒褐色 (HOYR2/3)	シルト	地山粒へ大ブロックを含む。地山粒を少し含む	人為堆積
	2	暗褐色 (HOYR3/3)	シルト		柱頭跡
P7	3	褐色 (HOYR4/4)	粘土質シルト	地山ブロックを多く含む	糊方
	4	暗褐色 (HOYR3/4)	シルト	炭化物物を多く含む	柱頭跡
	5	黄褐色 (HOYR5/6)	粘土	地山ブロック主体	糊方

軸約120cmで、長軸方向は北で西に14°傾している。

〈前部〉 平面形は、炉の長軸方向が約90cm、短軸方向が約120cmの隅丸長方形を呈する。深さは床面から約30cmあり、短軸方向の断面形は箱形で、底面はほぼ平坦である。壁面が礎で囲まれており、大型の角礎を、扁平な面を内側にして、ほぼ垂直に1段ないし2段に組んでいる。礎を据えるための掘方は南側で周溝と重なっており、周溝を切るように構築されているのが確認された。埋土は地山ブロック主体の層（第4回16層）と地山ブロックを多く含む層（14層）に分けられる。なお、南壁の礎の下からピット（P9）が検出され、埋土は16層に似るが、炉との直接的関係は明確でない。

〈石組部〉 平面形は、炉の長軸方向が約70cm、短軸方向が約120cmの隅丸長方形を呈する。深さは床面から約40cmで、短軸方向の断面形は逆台形状である。底面は前部に比べ約10cm低く、扁平な角礎を敷き、小礫を充填している。底面に礎を敷いた後、壁面に石組を施している。石組は1段ないし2段で、大型の角礎の扁平な面を内側にして、50°～60°傾けて設置し、隙間に小礫を埋ませている。石材はほとんどが花崗岩または砂岩で、砂岩は被熱面が著しく赤変している。花崗岩も被熱面がわずかに変色しているほか、全体が脆くなっている。底面付近には、炭化物を非常に多く含む層（第4回13層）が薄く堆積しており、機能時のものと考えられる。

〈土器埋設部〉 炉の中軸線上で、石組部奥壁の礎には接する位置に埋設土器がある。直径約30cm、



遺構名	層序	土色	土性	特徴	性格
SI52B 規式炉	1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	炭化物粒・小ブロックを少し含む	自然堆积
	2	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒を少し含む、炭化物粒をわずかに含む	自然堆积
	3	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物粒・燒土粒を少し含む	自然堆积
	4	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物粒・小ブロックを含む	自然堆积
	5	暗赤褐色 (5YR3/6)	シルト	炭化物粒・小ブロック・燒土小ブロック・ブロックを多く含む	人為堆积
	6	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	炭化物粒・小ブロックを含む	人為堆积
	7	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	炭化物粒・小ブロックを含む	機能堆堆积
	8	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	炭化物粒を少し含む	自然堆积
	9	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒・燒土粒を少し含む、炭化物粒をわずかに含む	自然堆积
	10	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒・小ブロックを含む、炭化物粒を少し含む	自然堆积
II3副溝	11	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒・ブロック・ブロックを多く含む	崩落土
	12	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物粒・ブロックを多く含む	自然堆积
	13	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物粒・ブロックを非常に多く含む	機能堆堆积
	14	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	炭化物・地山小ブロック・燒土粒を多く含む	掘方
	15	赤褐色 (2.5YR4/6)	粘土	燒土主体	掘方
	16	褐色 (10YR4/6)	シルト質粘土	地山主体・炭化物・燒土粒を少し含む	掘方
	17	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	炭化物を少し含む	掘方
	P9	褐色 (10YR4/6)	粘土	地山ブロックを多く含む、炭化物を少し含む	人為堆积

第4図 SI52B堅穴住居跡複式炉

残存高約40cmで、口縁部と底部を欠いた深鉢形土器を正位に据えている。土器の上端は床面よりわずかに上に出ていたとみられ、周辺には土器を囲むように縄を配している。土器上半部は被熱により周囲の層まで赤変している。土器内の床面には扁平な縄2点と土器底部破片を敷いている。土器の据方埋土は、焼土を多く含む層（15層）が見られる点で前庭部・石組部と異なる。埋設土器の北側には、埋め戻されたピット状の窪みが2つ確認された。古い段階（B1・B2期もしくは52A住居跡）の埋設土器を抜いた跡の可能性がある。

〔遺物〕 炉の埋設土器（第6図2）は口縁部と底部を欠く深鉢で、器面全体に縄文（ほぼ半分でRLとLRに分かれる）を施したのち、隆帯で区画した内部の縄文を磨り消し、無文帯で主文様を描く。モチーフは大きなS字状文3単位を基本として、間を補うように渦巻き文を施している。上半部は被熱により赤変している。6-3は上器埋設部の床に置かれていた土器底部で、埋設土器と同一個体の可能性がある。6-4～10と7-1～22は、炉・ピットおよび住居の堆積土中から出土した土器・土製品で、器形が復元できる土器はP7から出土した注口付土器（6-4）のみである。6-4～10および7-1～5は主に縄文と隆帯によって文様を描く土器で、6-6、8のように口縁部が肥厚するものが見られる。6-7は丸みをおびた断面形から鉢形土器と推定される。7-6～20は胎土に纖維を含む土器で、羽状縄文（6～8）、末端環付縄文（9～11）、組紐回転文（13、14）、沈線文（15、16）、連続刺突文（16～20）、内外面に縄文を施すもの（12）が見られる。第8図は石器である。1～7は石鏃で、基部は四基か平基である。5は大型で厚く尖頭器の可能性がある。8は石鏃または楔形石器と考えられ、住居床面付近から出土した。その他に石匙（9、10）、スクレイバー（11）、箆状石器（12、13）、不定形石器（14）、門石（15、16）がある。16は炉埋設土器内の堆積土より出土した。全体的に磨滅しているが、平坦面の隅に凹みがあり、側面には磨面が見られる。

〈SI52A〉（第5図）

〔規模・平面形〕 炉、柱穴および周溝の一部が残存するのみで、正確な規模・平面形は不明だが、およそ直径5～6mの円形と推定される。

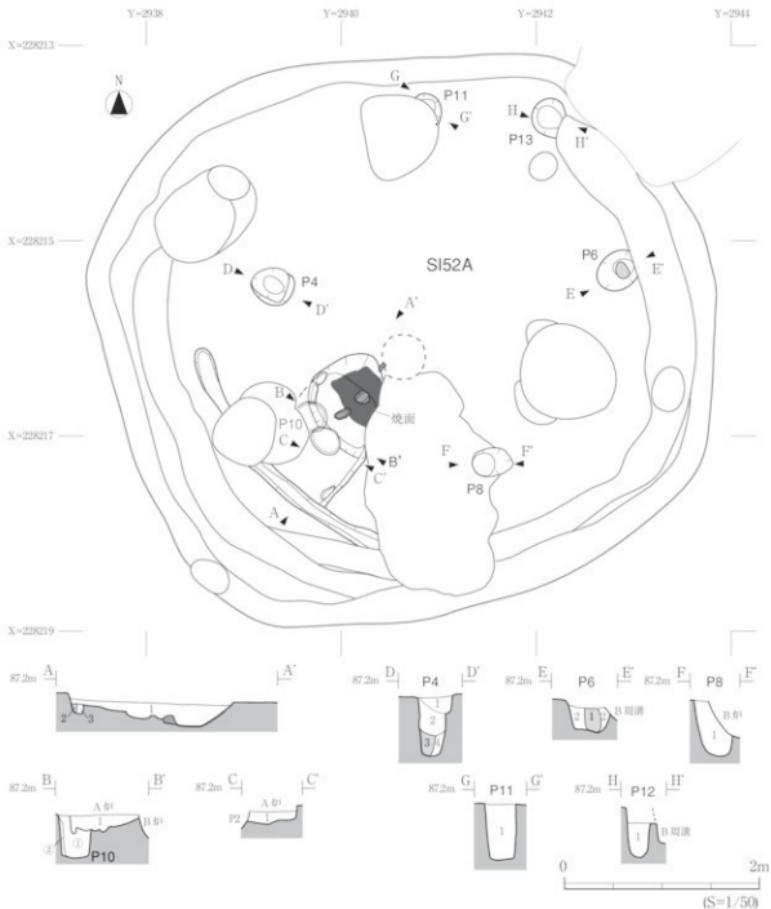
〔壁・床面〕 残存していない。

〔周溝〕 住居南西部に一部残存する。上幅は10～20cm、深さは52B住居跡床面から約20cmで、断面形はU字形を呈する。断面で幅10cm未溝の壁材の痕跡が認められた。

〔柱穴〕 いずれも52B住居跡の床面で検出したピットだが、新旧関係や位置から52A住居跡に伴うと考えられる柱穴が5個（P4、6、8、11、13）ある。直径30～50cmの円形もしくは梢円形で、深さは確認面から30～60cmある。P4とP6で直径10～20cmの柱痕跡が確認された。

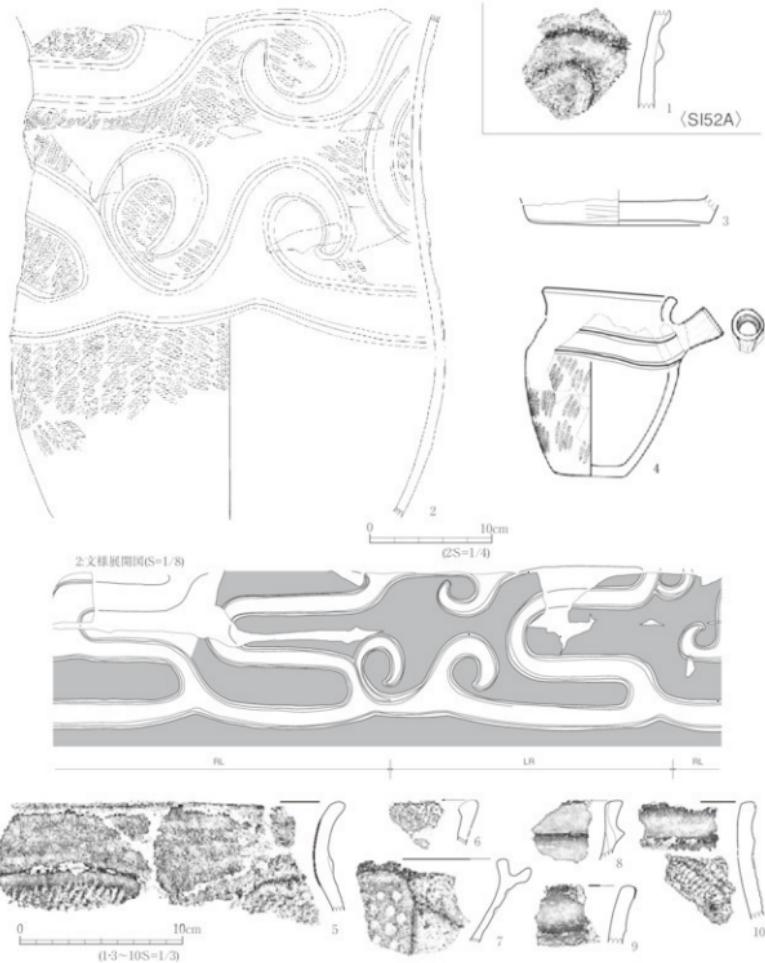
〔炉〕 住居の南西部にあり、土器埋設や石組は見られないが、掘り込みの形状は複式炉に類似する。52B住居跡炉の埋設土器の北側にある掘りこみが、A住居跡に伴う埋設土器の可能性がある。ここでは前庭部と燃焼部について記述する。炉の規模は、長軸約150cm、短軸は90～100cmと推定される。長軸方向は北で東に約40°偏している。前庭部・燃焼部とも自然堆積で埋まっている。

〔前庭部〕 平面形は、炉の長軸方向が約60cm、短軸方向が推定約100cmの長方形を呈する。深さは確



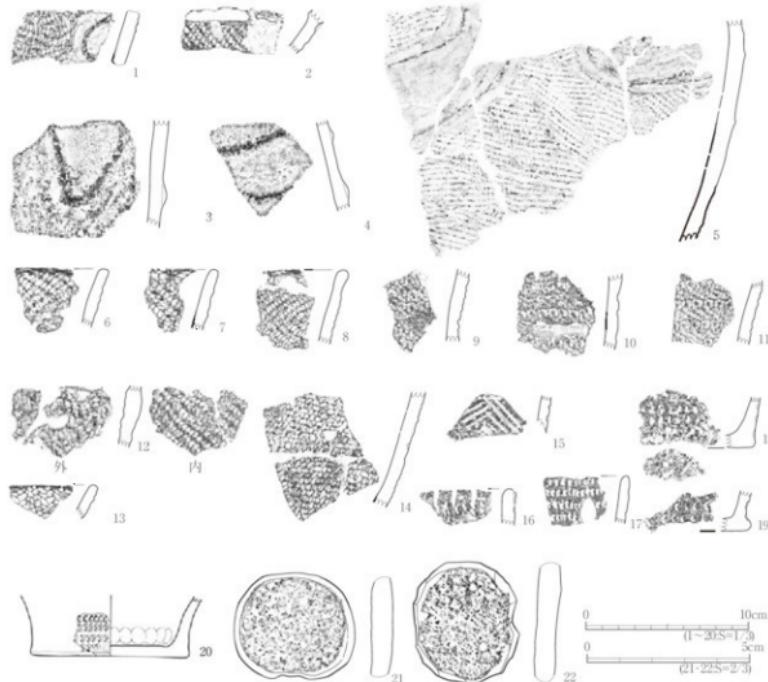
遺構名	解序	土色	土性	特徴	性格
P4	1	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	炭化物小ブロック・幾々小礫を含む、地山粒と小礫を少し含む	自然堆积
	2	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト		聖痕痕
	3	褐色 (7.5YR4/4)	粘土	地山小ブロック主体	削方
P10	1	暗褐色 (10YR3/4)	粘土	地山小ブロック・炭化物を少し含む	抜き
	2	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	地山小ブロック・炭化物・燒土粒をわずかに含む	抜き
	3	暗褐色 (10YR3/4)	粘土	地山小ブロックを少し含む	柱痕跡
	4	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	粘土	地山小体	削方
P11	1	暗褐色 (10YR3/3)	粘土	地山小ブロックを少し含む、炭化物・燒土粒をわずかに含む	柱痕跡
	2	褐色 (10YR4/4)	粘土	地山小ブロックを多く含む	削方
	3	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト	地山小ブロックを多く含む	人為堆积
P13	1	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	炭化物・燒土粒を少し含む	人為堆积
	2	暗褐色 (10YR3/4)	粘土質シルト	地山粒を多く含む、炭化物を少し含む	人為堆积

第5図 SI52A竪穴住居跡



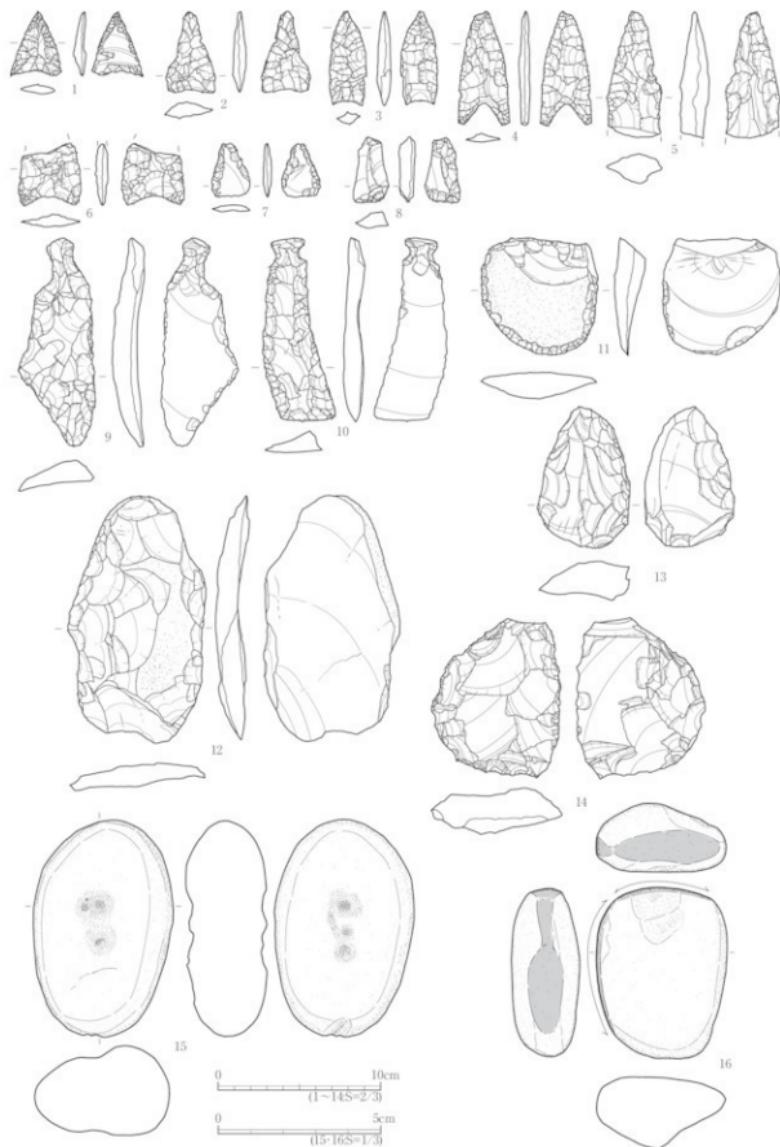
図番号	遺構・層	形種	特徴	写真	登録番号
6-1	S152A-0/1層	深鉢	隆帯、縄文(不明)		13-3 Po321
6-2	S152B-0/理設	深鉢	体部径35.6cm、残存高41.5cm、縄文(RL, LR)→隆帯→ミガキ、無文帯は3単位のS字状文を基本として間に溝引き充填。口縁部と底部欠く、上半部は被熱による赤変が顕著		13-4 Po315
6-3	S152B-0/理設床	深鉢	底径11.0cm、理設土器と同一側体か		13-2 Po315b
6-4	S152B-P1/1層	注口付土器	復元口径(8~9)cm、底径4.8cm、復元高(11~12)cm、縄文(LR)、隆帯、ミガキ		13-4 Po194
6-5	S152B-P1-2層	深鉢	平縁、隆帯、縄文(LR)		13-5 Po160
6-6	S152B-0/8層	深鉢	口縁部肥厚		13-6 Po155
6-7	S152B-堆	鉢?	平縁、隆帯(突起状に高くなる部分あり)、円形刺突		13-7 Po175
6-8	S152B-堆	深鉢	平縁、口縁部肥厚、隆帯		13-8 Po183
6-9	S152B-堆	深鉢	平縁、隆帯		13-9 Po180
6-10	S152B-堆	深鉢	平縁、隆帯、縄文(LR)		13-10 Po185

第4図 S152竪穴住居跡出土遺物 (1)



図番号	遺構/層	器種	特徴	写真	登録番号
7-1	SI52B 層	深鉢	隆帯、綺文 (LR)、ミガキ	14-1	Po166
7-2	SI52B 層	深鉢	沈綺、綺文 (RL)	14-2	Po170
7-3	SI52B 層	深鉢	隆帯、綺文?	14-4	Po178
7-4	SI52B 層	深鉢	隆帯	14-3	Po165
7-5	SI52B-3層	深鉢	隆帯、綺文 (LR) → ミガキ	14-5	Po192
7-6	SI52B 層	深鉢	平縁、羽状綺文、胎土に纖維を含む	14-6	Po179
7-7	SI52B 層	深鉢	平縁、綺文 (RL)	14-7	Po181
7-8	SI52B 層	深鉢	羽状綺文、胎土に纖維を含む	14-8	Po184
7-9	SI52B 層	深鉢	末端環付綺文 (RL)	14-9	Po182
7-10	SI52B 層	深鉢	末端環付綺文 (RL)、胎土に纖維を含む	14-10	Po186
7-11	SI52B 層	深鉢	末端環付綺文 (RL) 0段多角、胎土に纖維を含む	14-11	Po187
7-12	SI52B-2層	深鉢	内外面に綺文 (RL)、胎土に纖維を含む	14-12	Po191
7-13	SI52B 層	深鉢	粗縦回転文、胎土に纖維を含む	14-13	Po169
7-14	SI52B 層	深鉢	粗縦回転文、胎土に纖維を含む	14-15	Po164
7-15	SI52B 層	深鉢	沈綺、胎土に纖維を含む	14-14	Po172
7-16	SI52D 層	深鉢	平縁、口縁部に複位沈綺、逆鉈刃突文、胎土に纖維を含む	14-16	Po174
7-17	SI52D-2層	深鉢	平縁、手執行旨による逆鉈刃突文、胎土に纖維を含む	14-17	Po190
7-18	SI52B-2層	深鉢	体下部に逆鉈刃突文、胎土に纖維を含む	14-18	Po189
7-19	SI52B 層	深鉢	半抜竹管による逆鉈刃突文、底面は磨滅、胎土に纖維を含む	14-19	Po171
7-20	SI52B-P2-1層	深鉢	底φ9.6cm、手執行旨による逆鉈刃突文、胎土に纖維を含む	14-20	Po320
7-21	SI52B 層	円盤状土質品	最大径3.6cm、厚約0.6cm、文様不明、周縁は削いで整形	14-21	±1
7-22	SI52B 層	円盤状土質品	最大径3.7cm、厚約0.6cm、綺文?、周縁は打ち欠きのみ	14-22	±3

第7図 SI52堅穴住居跡出土遺物（2）



第8図 S152竪穴住居跡出土遺物 (3)

第8図 遺物觀察表

国番号	遺構・層	器種	特徴	写真	登録番号
S-1	SI52B 住	石礫	頁岩、長さ180mm、幅15.3mm、厚さ3.5mm、重量0.7g	14-23	S70
S-2	SI52B-P2/1層	石礫	頁岩、長さ240mm、幅150mm、厚さ3.1mm、重量1.1g	14-24	S80
S-3	SI52B 住	石礫	頁岩、長さ271mm、幅112mm、厚さ4.1mm、重量1.4g		S1
S-4	SI52B 住	石礫	頁岩、長さ277mm、幅15.6mm、厚さ3.0mm、重量1.4g、先端破損	14-26	S71
S-5	SI52B 住	石礫?	頁岩、長さ38.7mm、幅16.8mm、厚さ8.8mm、重量1.2g、基部欠損、尖頭器か	14-27	S5
S-6	SI52B-2層	石礫	頁岩、長さ18.5mm、幅19.0mm、厚さ4.2mm、重量1.4g、上半部欠損	14-28	S7
S-7	SI52B-2層	石礫	頁岩、長さ16.0mm、幅11.4mm、厚さ2.2mm、重量0.5g、先端破損	14-29	S6
S-8	SI52B-2床	石礫?	玉飾、長さ19.6mm、幅11.2mm、厚さ5.4mm、重量0.9g、石頭もしくは楔形石器か	14-30	S14
S-9	SI52B-P7	石焼	頁岩、長さ6.39mm、幅23.4mm、厚さ6.0mm、重量10.0g	14-31	S81
S-10	SI52B 住	石焼	頁岩、長さ5.64mm、幅17.0mm、厚さ5.7mm、重量6.0g	14-32	S2
S-11	SI52B 住	スクレイバー	頁岩、長さ35.0mm、幅35.8mm、厚さ9.8mm、重量11.2g	14-33	S4
S-12	SI52B 住	塊状石器	泥岩、長さ75.7mm、幅49.0mm、厚さ10.3mm、重量38.9g	14-35	S74
S-13	SI52B 住	塊状石器	珪質凝灰岩、長さ43.2mm、幅27.5mm、厚さ9.9mm、重量15.3g	14-34	S72
S-14	SI52B 住	不定形石器	頁岩、長さ34.1mm、幅39.2mm、厚さ11.3mm、重量23.1g、上部に自然面残す	14-36	S73
S-15	SI52B 住	円石	砂岩、長さ133mm、幅84mm、厚さ56mm、重量768.2g	14-37	S16
S-16	SI52B-B1埋設地	磨石	砂岩、長さ106mm、幅106mm、厚さ44mm、重量472.0g	14-38	S17

認面から10~20cm、短軸方向の断面形は箱形で、底面は燃焼部に向かってやや傾斜する。また、壁沿いに礫を据えていたと見られる浅い小穴が部分的に見られる。

〈燃焼部〉 平面形は、炉の長軸方向が約90cm、短軸方向が約90cmの隅丸三角形状と推定される。深さは確認面から約30cmあり、前庭部より約10cm低くなっている。断面形は逆台形状で、底面および北東側の壁面が被熱により赤変している。また、壁沿いに礫を据えていたと見られる浅い小穴が部分的に見られる。

〔遺物〕 炉の堆積土から隆帯を施した深鉢の体部破片（6-1）が出土している。52B住居跡出土土器に比べ、隆帯が太高いのが特徴的である。

【SI53堅穴住居跡】（第9・10図）

〔位置〕 調査区北西部。

〔重複関係〕 北西側は削平により失われ、南側の一部は攪乱を受けている。残存部分も床面付近まで削平を受けている。

〔規模・平面形〕 残存している周溝から推定すると径約4.0mの不整円形とみられる。

〔堆積土〕 なし。

〔壁〕 残存していない。

〔床面〕 据方埋土を床面としており、ほぼ平坦である。

〔周溝〕 住居跡東側から南側にかけて検出した。上幅は約20cm、深さは床面から約10cmあり、断面形はU字形で、壁材痕は確認されなかった。

〔柱穴〕 3個検出した（P1～P3）。直径20~40cmの円形もしくは楕円形で、深さは床面から50~60cmある。いずれも直径約20cmの柱痕跡が確認され、主柱穴と考えられる。ただし、住居跡北西側の削平は深さ60cm以上あるため、本来は主柱穴が4本以上の可能性がある。

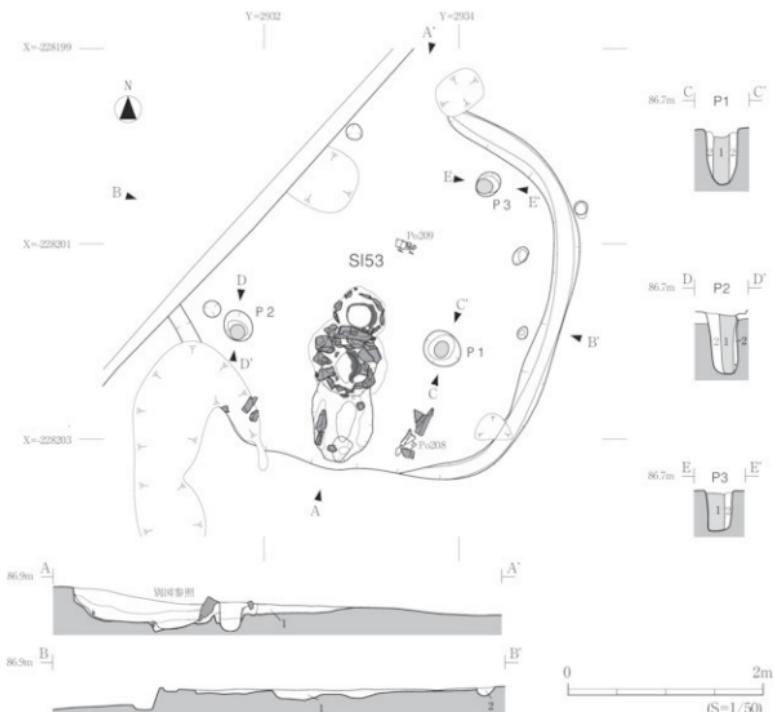
〔炉〕 住居の中央南寄りに位置する。前庭部、石組部、土器埋設部からなる複式炉である。長軸約180cm、短軸約70cmで、長軸を基準として北で東に10°偏する。

〔前庭部〕 平面形は、炉の長軸方向に約70cm、短軸方向に約60cmのややいびつな楕円形である。深さは住居床面から約20cmで、短軸方向の断面形は皿形である。底面に接している礫が西壁に1点の

みある。また、両側壁に礫を据えていたと見られる掘り込みがあり、堆積土中には礫が点在していた。前部南端の底面からは直径20~30cm、深さ約40cmのピットが検出された。

〈石組部〉平面形は、炉の長軸・短軸とともに約70cmの隅丸方形である。深さは床面から約30cmで、前部の底面より約10cm低い。炉短軸方向の断面形はU字形である。壁面に石組をめぐらせている。

石組は1段ないし2段で、大型の角礫の扁平な面を内側にして、50°~60°傾けて設置している。



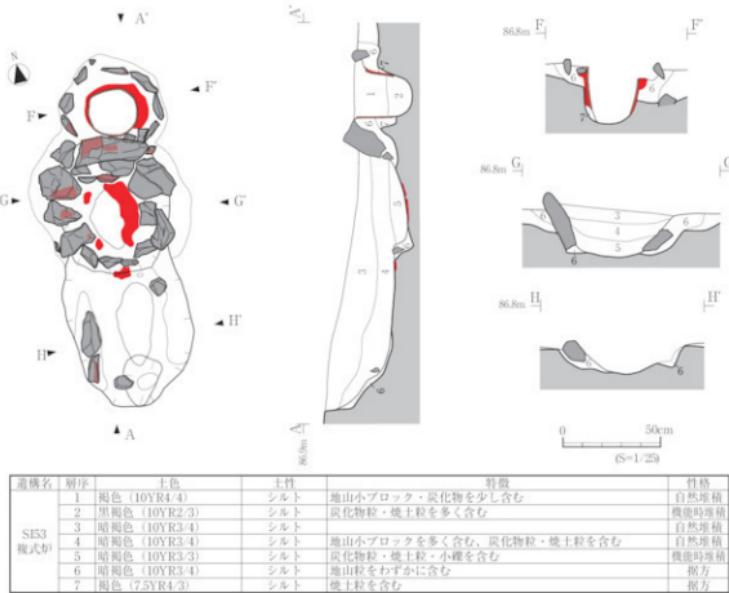
遺構名	層序	土色	土性	特徴	性格
SI53	1	暗褐色 (10YR3/4)	粘土質シルト	地山小ブロック・炭化物粒を少し含む	貼床
	2	暗褐色 (10YR3/4)	シルト質粘土	地山小ブロックを少し含む	自然堆积
	1	暗褐色 (10YR3/4)	粘土質シルト	炭化物粒をわずかに含む	柱軌跡
	2	褐色 (10YR4/6)	シルト質粘土	地山小ブロック	無方
	1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト質粘土	炭化物粒をわずかに含む	柱軌跡
	2	褐色 (10YR4/6)	シルト質粘土	地山小ブロック	無方
P1	1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト質粘土	炭化物粒をわずかに含む	柱軌跡
P2	1	暗褐色 (10YR4/6)	シルト質粘土	炭化物粒をわずかに含む	無方
P3	1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト質粘土	炭化物粒をわずかに含む	柱軌跡
	2	褐色 (10YR4/6)	シルト質粘土	地山小ブロック	無方

第9図 SI53堅穴住居跡

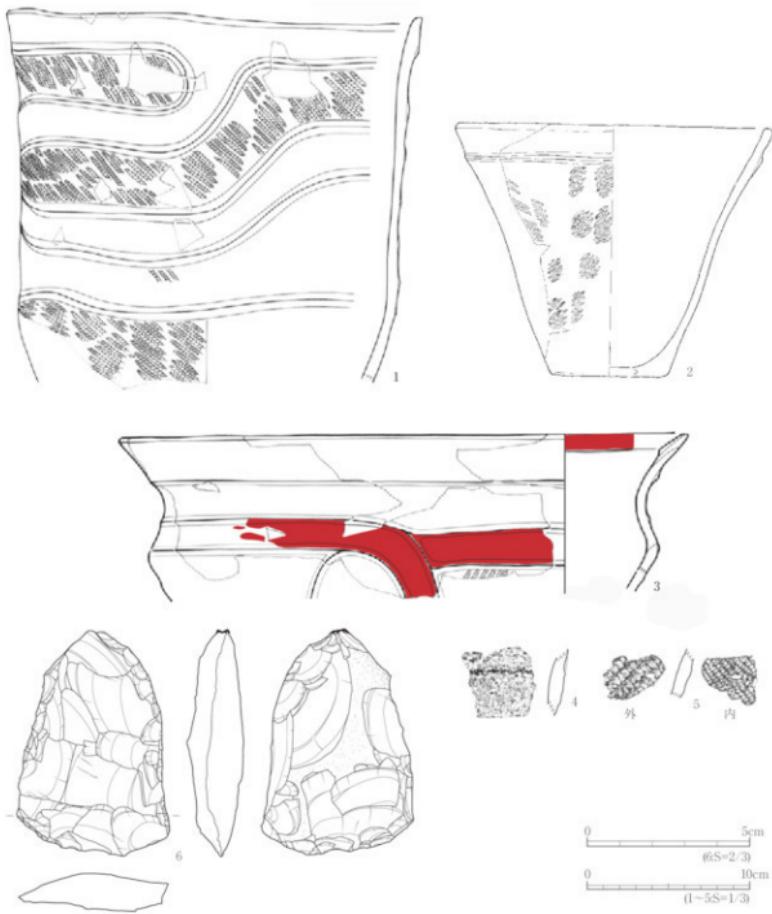
北壁および西壁の礫の一部が被熱により赤変している。底面は主に東半部が被熱により赤変している。また、底面付近の堆積土（第10図5層）は炭化物・焼土を含み、機能時の堆積と考えられる。

〈土器埋設部〉 炉の中軸線上で、石組部奥壁の礫には接する位置に埋設土器がある。土器は直径25cm、残存高約20cmで、底部を欠いた深鉢形土器を正位に据えている。掘り込みの底面は床面から約30cmあり、下部には焼土を多く含む層（第10図2層）が堆積している。土器の周囲の層は被熱により赤変している。また、土器上部を開むように角礫を配しており、炉の長軸方向に約40cm、短軸方向に約50cmの楕円形を呈する。埋設土器の掘方は、礫を配する上半部を大きく掘り込み、下半部は土器よりわずかに広く掘り込んでいる。

〔遺物〕 炉の埋設土器（11-1）は深鉢で、体下部～底部を欠く。土器内面の中位にバンド状に赤化帯がめぐり、上部は著しい被熱がみられる。残存する部分の下部外縁にはススの付着が見られることから、通常の煮沸に使用した個体の底部を取り去り炉体土器に転用したものとみられる。その他に、床面から土器2個体が出土している。11-2は小型の深鉢で、口縁部に隆帯をめぐらし、体部には繩文を施す。11-3は体部がS字状に屈曲する鉢形土器で、隆帯で区画された無文帯および口縁部内面の肥厚部分に赤彩を施す。その他に確認面から鏡状石器（11-6）などが出土している。



第10図 SI53竪穴住居跡複式炉



図番号	遺構/層	器種	特徴	写真	登録番号
11-1	SI539/埋設	深鉢	口径25.5cm、高さ22.8cm、縹文(LR)→隆帯→ミガキ、器面の磨滅が激しい	15-1	Pb316
11-2	SI53-床	深鉢	復元口径(21)cm、底径7.7cm、高さ16.5cm、縹文(RL)	15-2	Pb209
11-3	SI53-床	鉢	口径37.9cm、平縁、口縁部内側肥厚、隆帯、縹文(LR)、無文部および口縁内側に墨彩	15-5	Pb208
11-4	SI53則溝/堆	深鉢	隆帯	15-3	Pb206
11-5	SI539/堆	深鉢	内外面に縹文(LR)、粘土に礫雜を含む	15-4	Pb207
11-6	SI53-縹記面	鏡状石器	泥岩、長さ67.8cm、幅46.0mm、厚さ17.2mm、重量620g	15-6	S19

第11図 SI53竪穴住居跡出土遺物

【SI54竪穴住居跡】(第12・13図)

〔位置〕 調査区北西部。

〔重複関係〕 東部が搅乱によって失われる。

〔規模・平面形〕 直径約3.0mのやや不整な円形を呈する。

〔堆積土〕 壁際に1層のみ確認され、自然堆積である。

〔壁〕 最も残りの良い南西部で床面から約10cm残存する。

〔床面〕 全面が掘方埋土を床面としており、ほぼ平坦である。

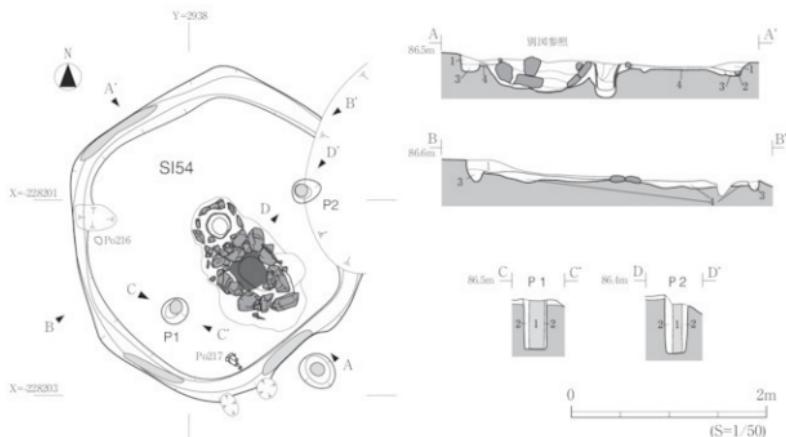
〔周溝〕 搅乱を受けている東部以外で検出した。上幅は20~30cm、深さが床面から約10cmである。

部分的に幅約10cmの壁材痕が認められる。

〔柱穴〕 2個検出した(P1-P2)。直径20~30cmの円形もしくは楕円形で、深さは床面から50~60cmある。いずれも直径10cmあまりの柱痕跡が確認され、主柱穴と考えられる。また、住居外南東側から柱痕跡の残る柱穴1個を検出したが、住居との関係は不明である。

〔炉〕 住居の中央南東寄りに位置する。石組部と土器埋設部からなる複式炉である。炉の規模は、長軸約130cm、短軸約70cmで、長軸を基準として北で西に42°偏する。

〔石組部〕 平面形は隅丸方形で、規模は炉の長軸方向に約90cm、短軸方向に約70cmである。深さは床面から約30cmで、短軸方向の断面形は上部が開くU字形である。壁面に石組をめぐらせているが、



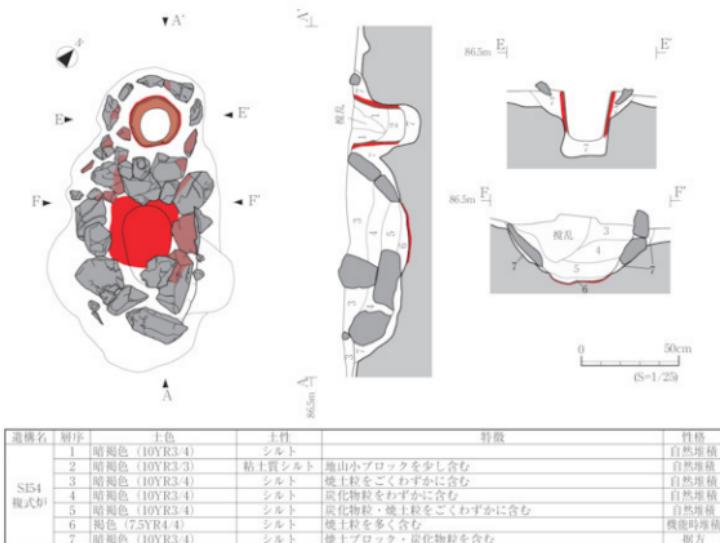
遺構名	層序	土色	土性	特徴	性格
SI54	1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒・小ブロックを少し含む	自然堆積
	2	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒を少し含む	壁材痕
	3	褐色 (10YR4/6)	シルト	地山主体	掘方
	4	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山小ブロック・炭化物鉢を少し含む	貼床
P1	1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト質粘土	炭化物鉢を少し含む。焼土粒をごくわずかに含む	柱痕跡
	2	暗褐色 (7.5YR3/4)	粘土質シルト	地山小ブロックを含む。炭化物鉢・焼土粒を少し含む	掘方
P2	1	褐色 (7.5YR4/4)	粘土質シルト	地山小ブロックを少し含む。炭化物鉢をごくわずかに含む	柱痕跡
	2	褐色 (7.5YR4/4)	シルト	地山小ブロックを含む。炭化物鉢・焼土粒をごくわずかに含む	掘方

第12図 SI54竪穴住居跡

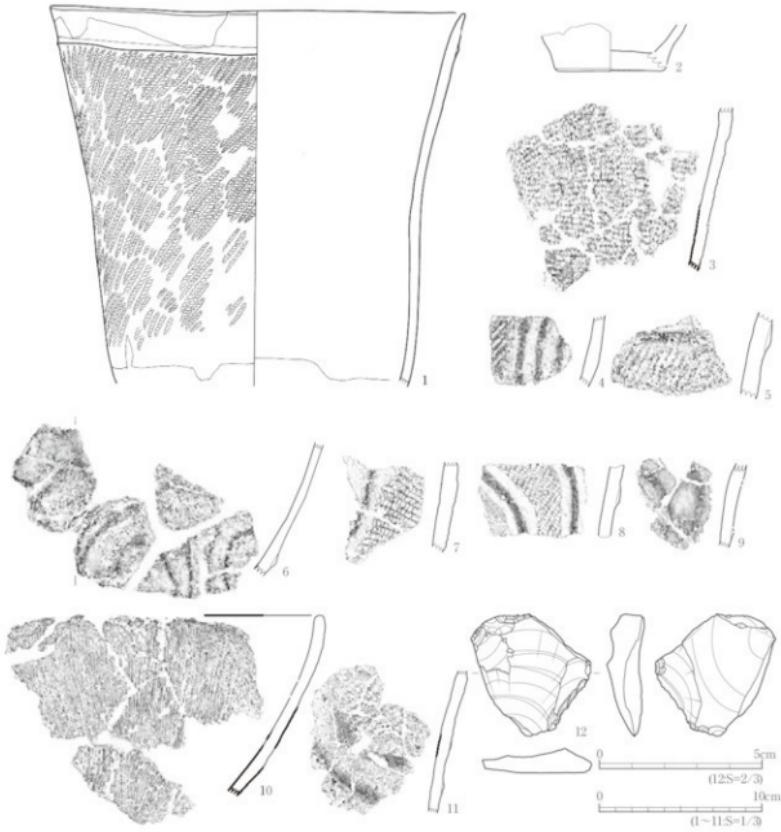
右側壁の礫は元位置より内側に動いている。石組は1段もしくは2段で、大型の角礫を用い、平坦面を内側に50°～60°傾斜させて立てている。奥壁および右側壁の礫の一部が被熱により赤変している。底面は奥壁寄りが被熱により赤変しており、直上の堆積土（6層）には焼土を多く含むため、機能時の堆積と考えられる。手前側の底面はわずかに高くなり被熱が見られないが、明確に前庭部として捉えられる空間はない。

〈土器埋設部〉 炉の中軸線上で、石組部奥壁の礫には接する位置に埋設土器がある。土器は直径22cm、残存高約20cmで、底部を欠いた深鉢形土器を正位に据えている。掘り込みの底面は床面から約30cmあり、土器の下端より10～20cm低いが、土器の下端付近まで埋め戻して使用している。土器の周囲の層は強い被熱による明瞭な赤変が認められる。また、土器上部を囲むように角礫を配しており、炉の長軸方向に約40cm、短軸方向に約50cmの楕円形を呈する。埋設土器の掘方は、礫を配する上半部を大きく掘り込み、下半部は土器よりわずかに広く掘り込んでいる。

〔遺物〕 炉の埋設土器（14-1）は深鉢で、底部を欠損しているほか、口縁部の約半分を欠く。口縁部に横位の隆帯をめぐらせ、体部全体に繩文を施している。14-2、3は床面直上から出土した土器、14-4～12は炉または住居の堆積土から出土した土器・石器である。土器は隆帯による文様をもつものがほとんどだが、10は櫛状工具による継位の条線文を施している。また、8は隆帯の脇に幅広で浅い沈線を伴う。6と10は鉢形土器とみられる。



第13図 SI54竪穴住居跡複式炉



図番号	遺構/層	器種	特徴	写真	登録番号
14-1	SI54B1/埋設	深鉢	口径25.6cm、高さ228cm、横底隆帯→繩文(RL)、内外面とも体下部はやや黒く、上部は赤い	15-7	Pv317
14-2	SI54/床直	深鉢	底径6.6cm、残存高29cm	15-8	Pv216
14-3	SI55/床直	深鉢	繩文(LR)	15-15	Pv217
14-4	SI54B1/3層	深鉢	隆帯、繩文(不明)	15-11	Pv218
14-5	SI54B1/堆	深鉢	隆帯、繩文(LR?)	15-12	Pv219
14-6	SI54B1/4層	鉢	隆帯による丁字文、繩文(不明)	15-9	Pv220
14-7	SI54/1層	深鉢	隆帯、繩文(LR)	15-10	Pv211
14-8	SI54/確認面	深鉢	繩文(LR)、隆帯、沈縞、ミガキ	15-13	Pv212
14-9	SI54/確認面	深鉢	隆帯、ミガキ	15-14	Pv214
14-10	SI54/1層	鉢	平縞、梅角抜工具による縦溝条繩文	16-1	Pv215
14-11	SI54/確認面	深鉢	隆帯、繩文(不明)	16-2	Pv213
14-12	SI54/1層	楕円石器	珪質灰岩?、長さ37.2cm、幅35cm、厚さ8.4cm、重量11.7g	16-3	S20

第14図 SI54堅穴住居跡出土遺物

【SI57堅穴住居跡】(第15・16図)

〔位置〕 調査区中央付近。

〔重複関係〕 全体が削平されており、炉・柱穴を残すのみである。南東部は風倒木痕によって炉の一部と柱穴の上部が消失している。

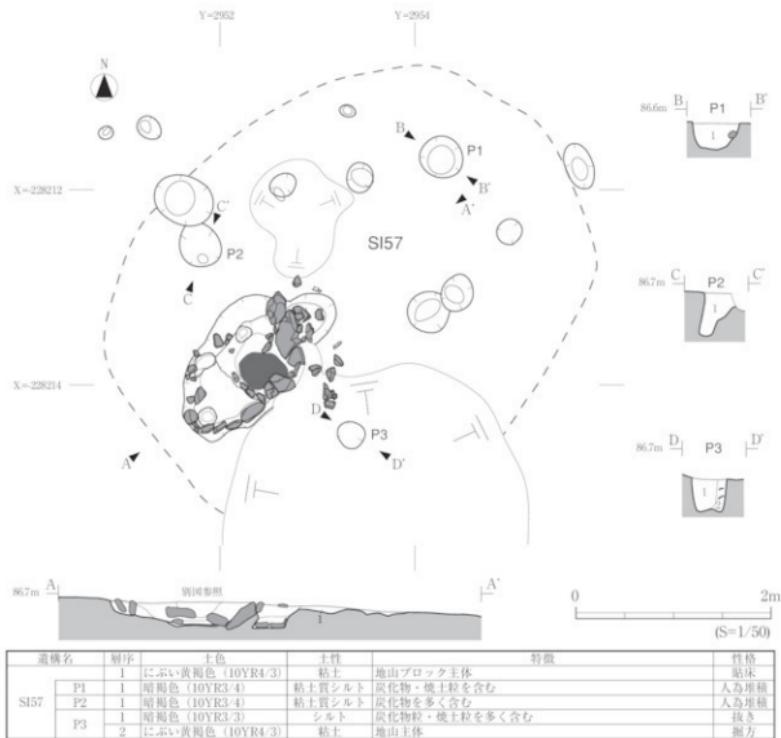
〔平面形・規模〕 平面形の基準となる壁・周溝は確認できなかったが、柱穴の位置および掘方埋土と考えられる層の分布から、推定される住居範囲を第15図に破線で示した。

〔壁・床面〕 いずれも残存しない。

〔周溝〕 検出されていない。

〔柱穴〕 周辺から検出されたピットのうち、規模や位置関係からP1～P3が主柱穴とみられる。いずれも円形で直径は30～50cm、深さは確認面から30～50cmである。柱痕跡は認められない。

〔炉〕 前庭部と石組部と土器埋設部からなる複式炉である。長軸約190cm、短軸約100cmの楕円形を呈し、長軸を基準として北で東に50°偏する。全体的に残存状況が悪く、被熱によって赤変した石が

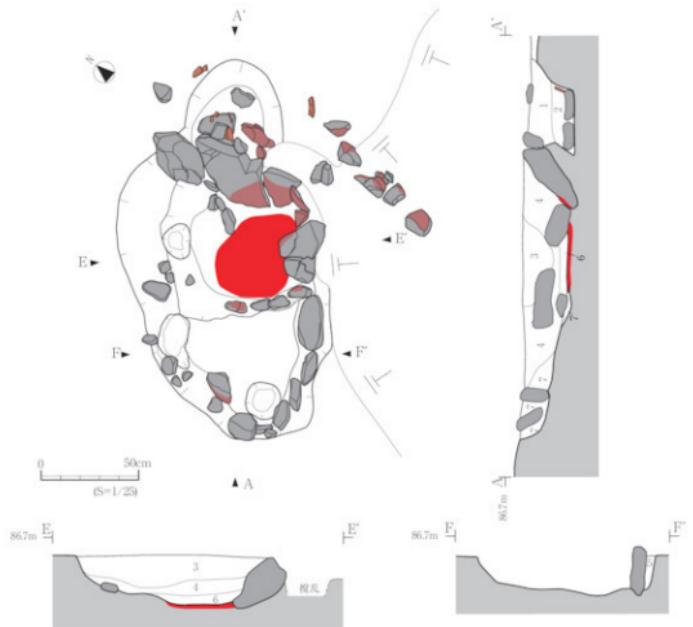


第15図 SI57堅穴住居跡

周辺に散乱していた。

〈前部〉 平面形は、炉の長軸方向に約60cm、短軸方向に約90cmの不整方形である。深さは確認面から約20cmあり、炉短軸方向の断面形は逆台形状である。また、南西隅に浅い掘り込みが認められた。周囲を礫で囲んでいたと考えられるが、西側の石組みは大部分が失われている。

〈石組部〉 平面形は、炉の長軸方向に約80cm、短軸方向に約100cmの方形と推定される。深さは確認面から20~30cmで、前部よりわずかに低くなっている。炉短軸方向の断面形は逆台形状である。壁面を礫で囲んでいたと考えられるが、左側壁には礫が残存していない。右側壁および奥壁は風倒木痕に接しており、礫が地山とともに土器埋設部側へ倒れこんでいる状況が認められた。底面および周囲の礫は被熱によって赤化している。底面付近の堆積土（第16図6層）は焼土ブロックを含み、機能時の堆積と考えられる。

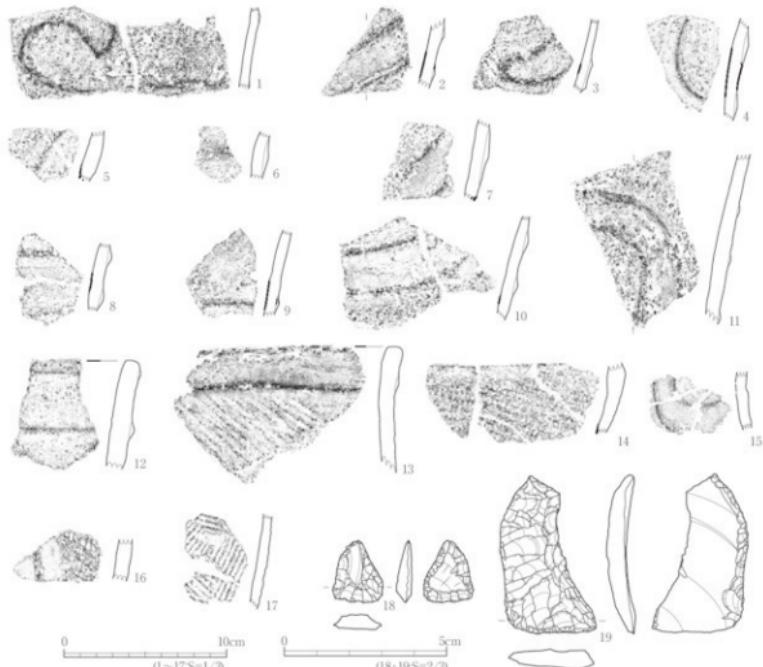


第16図 SI57竪穴住居跡複式炉

遺構名	層序	土色	土性	特徴	性格
SI57 複式炉	1	褐色(10YR4/4)	粘土質シルト	地山ブロック主体	自然堆積
	2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	燒土・炭化物を多く含む	自然堆積
	3	褐色(10YR4/4)	シルト		自然堆積
	4	暗褐色(10YR3/4)	シルト	炭化物・燒土粒を少し含む	自然堆積
	5	褐色(10YR4/4)	シルト	炭化物・燒土粒・地山小ブロックを多く含む	自然堆積
	6	暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	炭化物・燒土ブロック・地山小ブロックを含む	機能時堆積
	7	暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	地山小ブロックを含む	掘方

〈土器埋設部〉炉の中軸線上で、石組部奥壁の縁には接する位置に埋設土器の掘り込みが残存する。掘り込みは直径約50cmの円形で、石組部の縁の圧力によって断面形が歪んでいるが、その内部からまとまって出土した土器片が埋設土器であったと考えられる。底面には扁平な縁が2点並んで配置されており、機能時の埋設土器設置面とみられる。

〔遺物〕土器埋設部堆積土内および周辺から、熱を受け赤化した縄文土器深鉢（17-1~11）が出土している。これらは同一個体で、本来は埋設土器であったと考えられる。その他に炉の堆積土から土器（17-12~17）、石鎌（17-18）、確認面から石匙（17-19）が出土した。



図面番号	遺構・層	器種	特徴	写真	登録番号
17-1~11	SI54①/埋設	深鉢	溝巻き状の隆帯、縄文（不明）、全体に崩滅が激しい	16-4~14	Po200, 201, 318, 322
17-12	SI54①/前庭堆	深鉢	平縁、稍位隆帯	16-15	Po202
17-13	SI54①/掘方	深鉢	平縁、隆帯、縄文（R）	16-16	Po322
17-14	SI54①/石組堆	鉢?	縄文（LR）、上部ミガキ	16-17	Po204
17-15	SI54①/石組堆	深鉢	隆帯→ミガキ	16-18	Po199
17-16	SI54①/石組堆	深鉢	隆帯、縄文（BL）	16-19	Po198
17-17	SI54①/前庭堆	深鉢	菱形羽状縄文（L×R）、胎土に纖維を含む	16-20	Po203
17-18	SI54①/前庭堆	石縁	貝岩、長さ188mm、幅15.3mm、厚さ4.7mm、重量1.3g	16-21	S21
17-19	SI54確認	石匙	貝岩、長さ48.5mm、幅25.0mm、厚さ5.4mm、重量8.2g	16-22	S22

第17図 SI57堅穴住居跡出土遺物

【SI58竪穴住居跡】(第22図)

〔位置〕調査区西部。

〔重複関係〕SB71掘立柱建物跡と重複しており、これより古い。また、住居全体が削平されており、焼面と周溝を残すのみである。北半分は完全に失われている。

〔平面形・規模〕残存部分から直径4～5mの円形と推定される。

〔壁・床面〕いずれも残存しない。

〔周溝〕南半分で検出した。上幅20～30cm、深さは確認面から約20cmある。

〔柱穴〕住居内部から複数のピットが検出されたが、住居に伴うものは不明である。

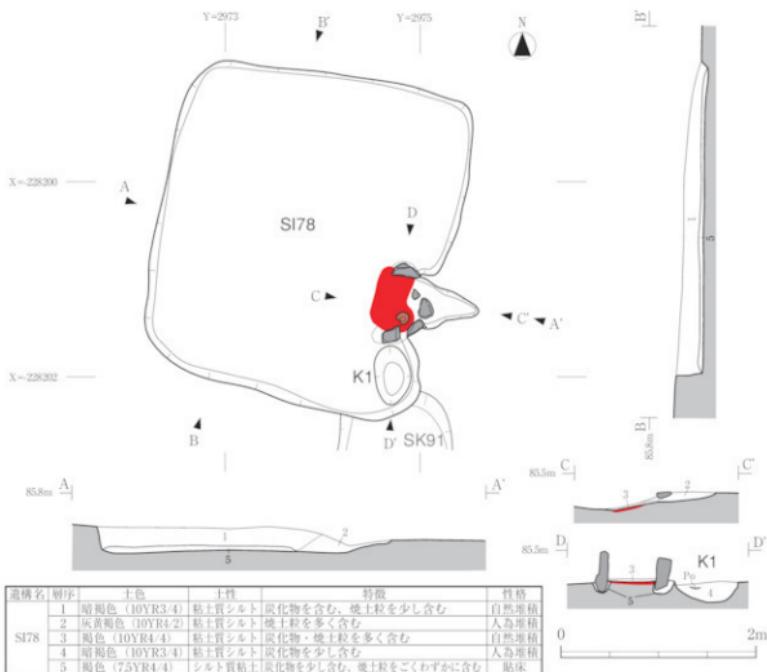
〔炉〕住居中央部付近で焼け面が2箇所検出された。

〔遺物〕出土していない。

【SI78竪穴住居跡】(第18図)

〔位置〕調査区北東部。

〔重複関係〕SK91土坑と重複し、これより新しい。



第18図 SI78竪穴住居跡

〔平面形・規模〕 平面形は隅丸方形で、規模は北辺2.7m、東辺3.2mである。

〔方向〕 西辺でみると北東で東へ約10° 傾する。

〔堆積土〕 1層認められ、自然堆積である。

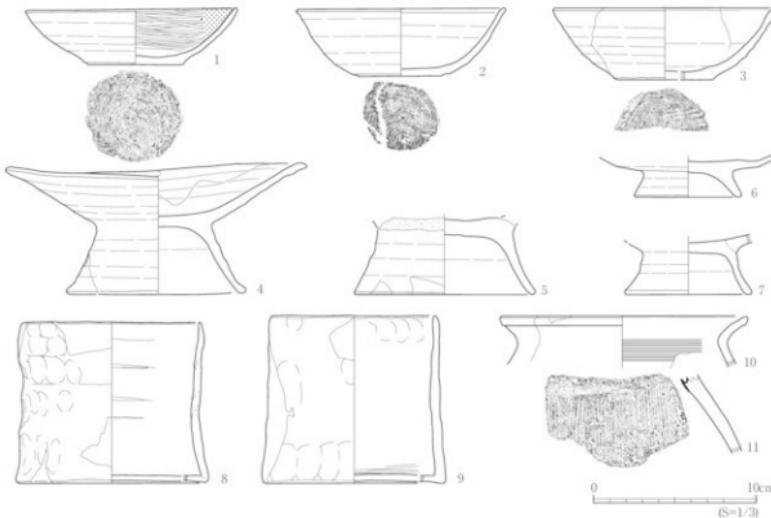
〔壁〕 住居からやや外側に開いて立ち上がっている。壁高はもっとも残存状況の良い南辺で床面から約30cmある。

〔床面〕 挖方埋土を床面とし、壁に近い部分でわずかに低くなる部分がある他はほぼ平坦である。

〔周溝〕 確認されなかった。

〔柱穴〕 主柱穴・壁柱穴などは確認されなかった。

〔カマド〕 東辺の中央部に付設されており、燃焼部と煙道が残存している。袖は地山を削り出してT字状の突出部とし、両側を掘り込んで芯材の大型礫を立てている。カマド前面の堆積土には炭化物・焼土粒を多く含む。



図番号	遺構・構	器種	特徴	写真	登録番号
19-1	Si78・カマド1層	ロクロナシ器・杯	口径: 13.6cm、底径: 5.9cm、高さ: 3.4cm。外: ロクロナデ、底: 扇形底部、内: ロクロナデ→ミゼキ	24-1	Pb301
19-2	Si78・カマド1層	赤燒土器・杯	口径: 12.8cm、底径: 5.1cm、高さ: 3.2cm。外: ロクロナデ、底: 扇形底部切端直轄、内: ロクロナデ	24-2	Pb305
19-3	Si78・1層	赤燒土器・杯	口径: 13.8cm、底径: 5.9cm、高さ: 4.4cm。外: ロクロナデ、底: 扇形底部切端直轄、内: ロクロナデ	24-3	Pb306
19-4	Si78・カマド1層	赤燒土器・台付皿	口径: 18.7cm、底径: 10.9cm、高さ: 7.8cm。外: ロクロナデ、内: ロクロナデ	24-5	Pb300
19-5	Si78・1・1層	赤燒土器・台付皿	底径: 10.9cm、外: ロクロナデ、内: ロクロナデ	24-6	Pb307
19-6	Si78・1層	赤燒土器・台付皿	底径: 6.4cm、外: ロクロナデ、内: ロクロナデ	24-7	Pb308
19-7	Si78・1層+上層	赤燒土器・台付皿	底径: 7.6cm、高さ: 2.6cm、外: ロクロナデ	24-8	Pb211
19-8	Si78・カマド1層	製塙土器・小	口径: 11.2cm、底径: 11.6cm、高さ: 9.9cm。外: ナデ、底: ナデ、内: ナデ、粘土層の混合痕跡が残る	24-10	Pb302a
19-9	Si78・カマド1層	製塙土器・小	口径: 10.2cm、底径: 11.2cm、高さ: 10.2cm。外: ナデ、底: ナデ、内: ナデ、粘土層の混合痕跡が残る	24-11	Pb302b
19-10	Si78・1層	須恵器・羹匙	口径: 15.4cm、外: ロクロナデ、内: ヨコハケ	24-8	Pb303
19-11	Si78・2層	土師器・羹匙	外: タテハケ、内: 磨滅	24-9	Pb304

第19図 Si78堅穴住居跡出土遺物

〔貯蔵穴〕住居南東隅のカマド右脇で検出した。長軸約60cm、短軸約40cmの歪んだ楕円形を呈しており、床面からの深さは約20cmである。炭化物を少し含む土で埋め戻されている。堆積土中から赤焼土器の台部（19-5）が出土した。

〔遺物〕機能時および廃絶時の遺物として、カマド煙道堆積土から、ロクロ調整の土師器坏（19-1）および赤焼土器台付皿（19-4）がほぼ完全な形で出土したほか、赤焼土器坏（19-2）、薄手で輪積み痕跡を残す円筒形の土器（19-8、9）が出土している。廃絶後の遺物として、南壁付近の堆積土2層から土師器壺体部（19-11）がまとめて出土したほか、1層から赤焼土器坏（19-3）、赤焼土器台付皿の台部（19-6、7）、須恵器壺口縁部（19-10）が出土している。

【SI90堅穴住居跡】（第20図）

〔位置〕調査区北東端。

〔重複関係〕なし。

〔平面形・規模〕平面形は円形で、長軸約23m、短軸約22mである。

〔堆積土〕2層認められ、いずれも自然堆積である。

〔壁〕住居からわずかに外側に開いて立ち上がる。壁高は南壁で約30cm、北壁で約20cmである。

〔床面〕地山を床面としており、ほぼ平坦である。

〔周溝・柱穴〕検出されなかった。

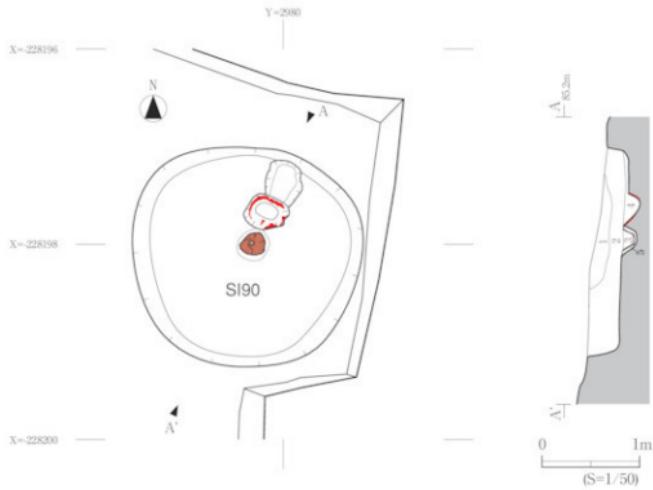
〔炉〕住居の北部にある。石組は見られないが、埋設土器と掘り込みの形態から複式炉と考えられる。炉の規模は、長軸約110cm、短軸は約40cmである。長軸方向は南で西に26°偏している。ここでは前庭部・燃焼部・土器埋設部として記述する。

〈前庭部〉平面形は、炉の長軸方向が約40cm、短軸方向が約40cmの不整な方形を呈する。深さは床面から10cm未溝の浅い掘り込みである。

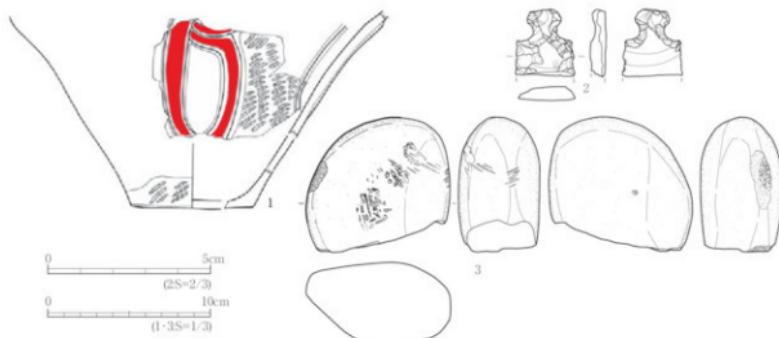
〈燃焼部〉平面形は、炉の長軸方向が約40cm、短軸方向が約30cmの不整な方形を呈する。深さは床面から約20cmあり、前庭部より10cm余り低くなっている。壁面が被熱により赤変している。石を据えていた痕跡は見られない。

〈土器埋設部〉炉の中軸線上で、燃焼部には接する位置に埋設土器がある。土器は直径20~30cm、残存高14cmで、体～底部を正位に据え、底部に内側から穿孔を施している。土器は被熱による脆弱化が顕著である。

〔遺物〕炉の埋設土器（21-1）は口縁部をすべて欠くが、上部がわずかに内湾していることから、内湾口縁をもつ鉢形土器とみられる。底部は焼成後に穿孔されている。全体に被熱によって器面が磨滅・脆弱化しており、文様が判別できるのは一部の破片のみであったが、懸垂する隆帯に囲まれた無文部に赤彩が施されている。その他に堆積土中から石匙（21-2）、敲石（21-3）などが出土している。



第20図 SI90堅穴住居跡



図番号	遺構/剖面	器種	特徴	万葉	登録番号
21-1	SI90堅/埋設	鉢	底径7.6cm、残存高12cm、構文RL→隆帯→ミガキ→無文部赤彩、全体磨滅、底部に径約4cmの穿孔	16-23	Pb319
21-2	SI90-堆	石甃	頁岩、長さ20.4mm、幅17.8mm、厚さ3.5mm、重量1.8g、基部のみ	16-24	S85
21-3	SI90-堆	礫石	泥岩、長さ57mm、幅87mm、厚さ5.47mm、重量46.2g	16-25	S86

第21図 SI90堅穴住居跡出土遺物

(2) 挖立柱建物跡

調査区内からは多数のピットが検出されたが、そのうち柱穴の規模、配置、堆積土の特徴を検討して5棟の掘立柱建物跡を抽出した。

【SB71掘立柱建物跡】(第22図)

〔位置〕調査区西部。

〔重複関係〕SI58堅穴住居跡と重複しており、これより新しい。SK45土坑と重複しており、これより古い。

〔規模・構造〕南北が対称的に張り出す六角形である。主軸長（P2-P5間）約4.8m、西側柱列（P3-P4間）および東側柱列（P1-P6間）はともに約3.6mである。

〔方向〕主軸でみるとほぼ南北方向に一致する。

〔柱穴〕6個確認した。直径30~70cmの梢円形もしくは不整な円形で、深さは確認面から40~70cmある。P1とP3で直径10~20cmの柱痕跡を確認した。

〔遺物〕P2出土石器（23-1）は、縦長剥片の縁辺の一部に加工が施された不定形石器である。また、P5出土土器（23-2）は、胎土に纖維を含み、末端環付縄文が施されている。

【SB72掘立柱建物跡】(第24図)

〔位置〕調査区西部。

〔重複関係〕位置的にSB74掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。

〔規模・構造〕1間×1間で平面形は長方形である。柱間寸法はP1-P2間約3.0m、P2-P3間約3.9m、P3-P4間約3.2m、P4-P1間約3.9mである。

〔方向〕西側柱列で測ると、北で西に25°偏している。

〔柱穴〕4個検出した。搅乱を受けているP3以外は、直径60~80cmの円形もしくは梢円形で、深さは確認面から60~70cmある。すべての柱穴で直径30~40cmの柱痕跡を確認した。

〔遺物〕縄文土器小破片のみである。

【SB74掘立柱建物跡】(第24図)

〔位置〕調査区西部。

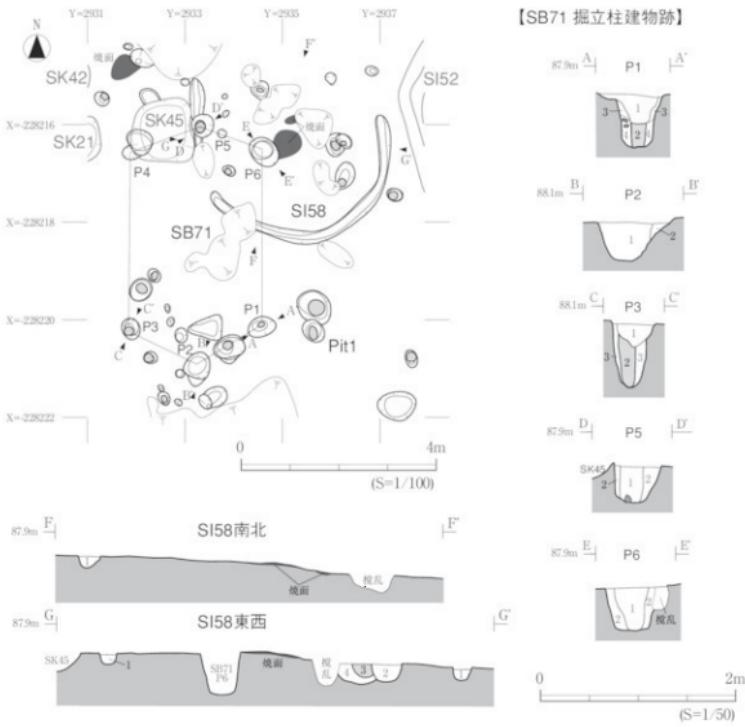
〔重複関係〕位置的にSB72掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。

〔規模・構造〕1間×1間で平面形は長方形である。柱間寸法はP1-P2間およびP3-P4間が約1.9m、P2-P3間およびP4-P1間が約2.4mである。

〔方向〕西側柱列で測ると、北で西に25°偏している。

〔柱穴〕4個検出した。直径40~50cmの円形もしくは梢円形で、深さは確認面から30~40cmある。P2とP3で直径約20cmの柱痕跡を確認した。

〔遺物〕縄文土器小破片のみである。

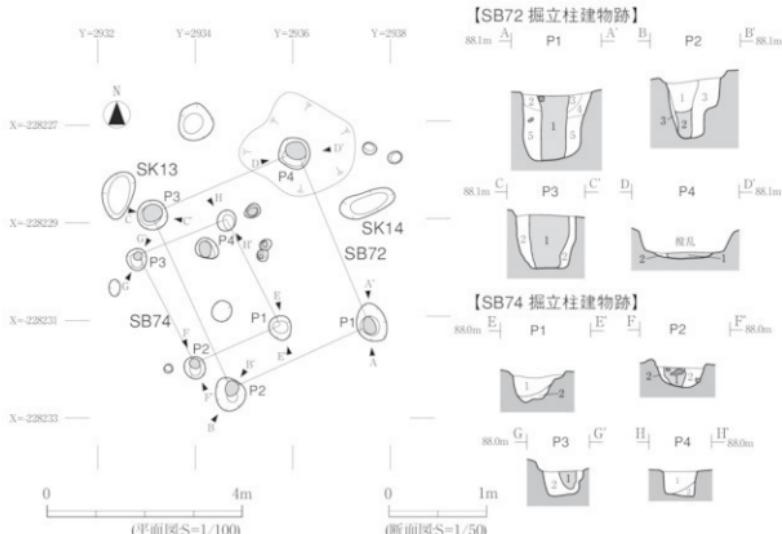


遺構名	層序	土色	土性	特徴	性格
SB71	1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	焼土小ブロックを含む	抜き
	2	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	焼土小ブロックをごくわずかに含む	柱痕跡
	3	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	焼土小ブロック・地山粒をごくわずかに含む	掘方
	4	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒をごくわずかに含む	掘方
P1	1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒へ一大ブロックを多く含む、後土粒へ小ブロックを少し含む	抜き
	2	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒を少し含む	掘方
P2	1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	焼土ブロック・炭化物粒を少し含む	抜き
	2	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒を少し含む	掘方
	3	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	焼土ブロックを部分的に含む	柱痕跡
P3	1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒を少し含む	掘方
	2	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	焼土ブロック・炭化物・地山小ブロックを含む	人为堆積
P4	1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	焼土ブロック・炭化物・地山粒を含む	抜き痕跡
	2	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	地山小ブロックを含む	掘方
P5	1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	焼土ブロック・炭化物を含む	抜き痕跡
	2	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	地山小ブロックを含む	掘方
SI58	1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山小ブロックを含む	人为堆積
	2	暗褐色 (10YR3/4)	粘土質シルト	土器片・焼土ブロック・炭化物・地山小ブロックを含む	掘方
	3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト		柱痕跡
	4	暗褐色 (10YR3/4)	粘土質シルト	地山小ブロックを多く含む	掘方

第22図 SI58堅穴住居跡・SB71掘立柱建物跡



第23図 SB71掘立柱建物跡ほか出土遺物



遺構名	層序	土色	土性	特徴	性格
SB72	1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	炭化物小ブロックを部分的に含む、地山粒を少し含む	柱根跡
	2	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒をわずかに含む	掘方
	3	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	炭化物粒、地山粒をわずかに含む	掘方
	4	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山粒・小ブロックをわずかに含む	掘方
P1	5	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	炭化物粒、地山粒を少し含む	掘方
	1	褐色 (7.5YR4/4)	シルト	炭化物粒・小ブロックをわずかに含む	拔き
	2	明褐色 (7.5YR5/6)	粘土質シルト	炭化物粒をわずかに含む	柱根跡
P2	3	明褐色 (7.5YR5/6)	シルト	小礫を少し含む	掘方
	1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	炭化物粒、燒土粒・地山粒を多く含む	拔き
	2	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	炭化物粒・燒土粒・地山粒をわずかに含む	柱根跡
P3	3	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒ブロックを含む、炭化物粒をわずかに含む	柱根跡
	1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	炭化物粒を含む	拔き
	2	褐色 (7.5YR4/6)	粘土質シルト	地山小ブロックを含む	掘方
P4	1	褐色 (7.5YR4/4)	シルト	地山ブロックを少し含む、炭化物粒をわずかに含む	拔き
	2	暗褐色 (10YR5/6)	粘土質シルト	地山ブロックを多く含む	掘方
	1	褐色 (10YR4/6)	粘土質シルト	地山小ブロックを少し含む	柱根跡
	2	暗褐色 (10YR4/4)	シルト	地上ブロックを削り下ろし、燒土ブロック・炭化物粒を含む	柱根跡
SB74	3	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山小ブロックを削り下ろし、燒土ブロック・炭化物粒を少し含む	柱根跡
	1	褐色 (10YR4/4)	シルト	炭化物粒をわずかに含む	拔き
	2	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山ブロックを多く含む	掘方
	1	褐色 (10YR4/6)	粘土質シルト	地山小ブロックを削り下ろし	柱根跡

第24図 SB72・SB74掘立柱建物跡

【SB73掘立柱建物跡】（第25図）

〔位置〕 調査区西部。

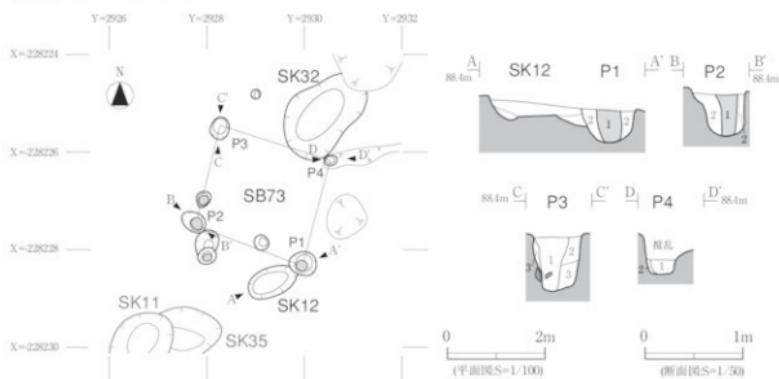
〔重複関係〕 SK12土坑と重複し、これより新しい。また、位置的にSK32土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

〔規模・構造〕 1間×1間で平面形は方形である。柱間寸法は2.1m～2.4mである。

〔方向〕 西側柱列で測ると、北で東に14°偏している。

〔柱穴〕 4個検出した。上部が攪乱で失われているP3以外は、直径40～60cmの梢円形で、深さは確認面から40～60cmある。P1とP2で直径20～30cmの柱痕跡を確認した。

〔遺物〕 縄文土器小破片のみである。



遺構名	層序	土色	土性	特徴	性格
SB73	P1	1 暗褐色 (10YR3/4) 2 暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山ブロックを含む	柱痕跡 掘方
	P2	1 暗褐色 (10YR3/4) 2 暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山ブロックを少し含む	柱痕跡 掘方
P3	1 暗褐色 (10YR3/4) 2 暗褐色 (10YR3/4)	粘土質シルト			
	P4	1 暗褐色 (10YR3/4) 2 暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山ブロックを含む、炭化物をわずかに含む 地山を含む	抜き丸跡 掘方
		3 暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山ブロックを多く含む	掘方
		1 暗褐色 (10YR3/4) 2 暗褐色 (10YR3/4)	粘土質シルト	炭化物を少し含む 地山ブロックを含む	抜き丸跡 掘方

第25図 SB73掘立柱建物跡

【SB113掘立柱建物跡】（第26図）

〔位置〕 調査区ほぼ中央。

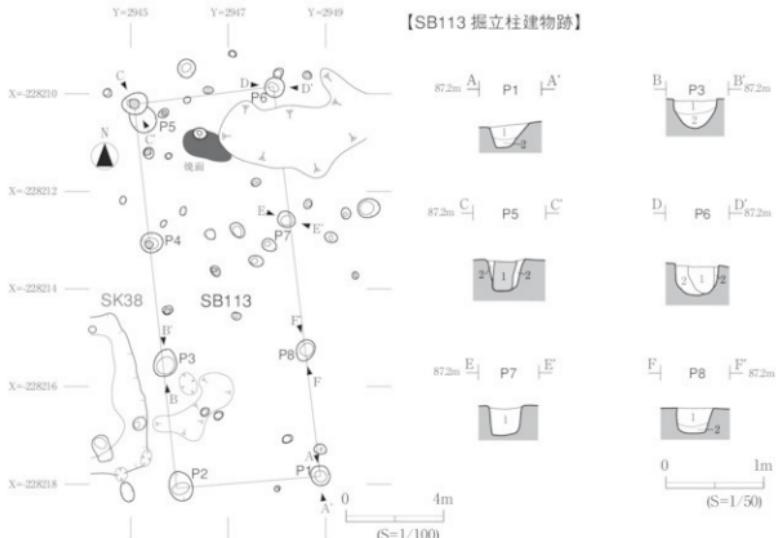
〔重複関係〕 建物内北部に焼け面があるが、建物跡との関係は不明である。

〔規模・構造〕 桁行3間×梁行1間の南北棟である。平面規模は桁行が西側柱列で総長約7.9m、柱間寸法は北から2.9m-2.5m-2.5m、桁行は両妻とも2.9mである。

〔方向〕 西側柱列で測ると、北で西に6°偏している。

〔柱穴〕 8個検出した。直径30～60cmの円形もしくは梢円形で、深さは確認面から20～30cmある。P4とP5で直径約20cmの柱痕跡を確認した。

〔遺物〕 P4とP6からロクロ土師器環の小破片、P8から箆状石器が出土している（写真図版16・24）。



遺構名	列序	土色	土性	特徴	性格
SB113	1	褐色 (7.5YR4/4)	シルト	炭化物粒・地山小ブロックを少し含む。地土粒をごくわずかに含む	人為堆積
	2	褐色 (7.5YR4/3)	粘土質シルト	炭化物粒を少し含む。地山小ブロックをごくわずかに含む	人為堆積
P3	1	褐色 (10YR4/4)	シルト	燒土粒・炭化物粒・地山小ブロックを多く含む	人為堆積
	2	褐色 (10YR4/6)	シルト	燒土粒・炭化物粒・地山小ブロックを多く含む	人為堆積
P5	1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒を少し含む	柱道路
	2	暗褐色 (10YR3/4)	粘土質シルト	地山小ブロックを含む	掘方
P6	1	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	炭化物・燒土粒・地山粒を含む	抜方
	2	暗褐色 (10YR3/4)	粘土質シルト	地山小ブロックを含む	掘方
P7	1	暗褐色 (10YR3/4)	粘土質シルト	地山小ブロックを含む。炭化物粒を少し含む	人為堆積
	2	暗褐色 (10YR3/4)	粘土質シルト	地山小ブロックを含む。炭化物粒・小礫を少し含む	人為堆積
P8	1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト質粘土	地山小ブロックを少し含む	人為堆積
	2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト質粘土	地山小ブロックを少し含む	人為堆積

第26図 SB113 挖立柱建物跡

(3) 土器埋設遺構

丘陵上で2基検出した。古代 (SX1) と縄文時代 (SX55) が1基ずつある。個別の遺構図を第27図に示し、周辺図はそれぞれ第30図、第43図に示した。

【SX1土器埋設遺構】 (第27・30図)

〔位置〕 調査区西部。

〔重複関係〕 上部は削平を受けている。

〔規模・形態〕 掘方は直径30cmあまりの円形で、深さは確認面から約20cm、断面形は逆台形を呈する。

中央に土器の体下部～底部を正位に埋設しており、底部は掘方の底面に接している。

〔堆積土〕 土器内の堆積土は2層確認され、いずれも自然堆積である。

〔遺物〕埋設土器はロクロ土師器の壺の体下部～底部である(28-1)。外面体下部は手持ちヘラケズり、内面はヘラナデで黒色処理が施されている。

【SX55土器埋設遺構】(第27・43図)

〔位置〕調査区北西部。

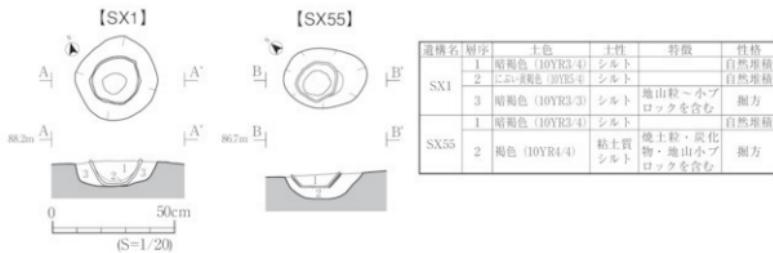
〔複重関係〕上部は削平を受けている。

〔規模・形態〕掘方は直径20～30cmの楕円形で、深さは確認面から約10cm、断面形は逆台形を呈する。やや北東寄りに土器の底部を正位に埋設しており、底部は掘方の底面より5cm上にある。土器周辺の層には若干の被熱が見られた。

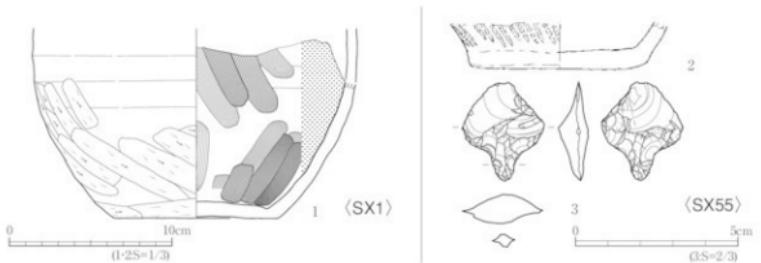
〔堆積土〕土器内の堆積土は1層確認され、自然堆積である。

〔遺物〕埋設土器は繩文土器の底部破片である(28-2)。底径は約11cmで、外側は底部付近まで繩文が施されている。また、確認面から石錐(28-3)が出土している。

〔備考〕埋設土器を伴うかの一部だった可能性があるが、残存状況が悪く明らかでない。



第27図 SX1・SX55土器埋設構



図番号	遺構・層	器種	特徴	万葉	登録番号
28-1	SX1・埋設	土師器壺	外:ロクロナデ、体部～底部ケズリ、内面ナデ→内黒	24-15	Pv225
28-2	SX55・埋設	深鉢	底径10cm、繩文(RL)	20-17	Pv221
28-3	SX55・確認面	石錐	頁岩、長5.301mm、幅24.8mm、厚さ8.9mm、重量40g、先端部磨滅	20-18	S68

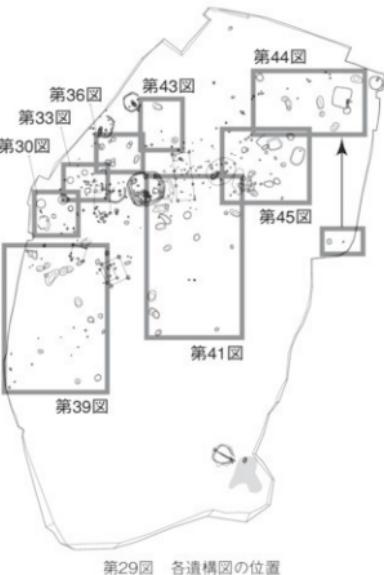
第28図 SX1・SX55出土遺物

(4) 土坑

丘陵上で土坑74基を検出した。各土坑の平面図は第29図のとおり調査区を分割して示しており、断面図は代表的なもののみ図示している。また、規模・断面形などについては第1表にまとめた。ここでは、形態・出土遺物などに特徴の見られるものについてまとめて記述する。

土坑 番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	断面形	特記事項	造構団	遺物団
SK2	87	84	21	圓形		3900	
SK3	87	84	21	圓形		3900	4000
SK4	87	84	21	箱形		3900	4000
SK5	165	122	87	湯斗形		3900	
SK6	117	78	20	圓形		3900	4000
SK7	169	107	13	圓形		3900	
SK8	119	90	26	圓形		3900	
SK9	103	91	37	圓形(有段)		3900	4000
SK10	322	151	50	圓形		3900	4000
SK11	156	119	28	圓形	古代の土器およ (有段)び鉄鋤出土。	3900	4000
SK12	106	59	25	圓形		2500	
SK13	99	63	28	箱形		2400	
SK14	117	45	12	圓形		2400	
SK15	184	134	27	圓形		4100	
SK16	95	85	16	圓形		3000	3100
SK18	175	111	35	箱形		4100	
SK19	78	66	54	「ラ」字形		3000	
SK20	176	153	45	箱形	前面中央でピット横出。	3000	3100
SK21	120	100	22	圓形		3300	3400
SK23	98	94	40	ラス	1列から圓文土器が多 コ段、とまって出土。	3300	3400
SK24	105	53	37	「フ」字形		3300	3400
SK25	94	73	23	圓形	6件製陶品出土。	3600	3700
SK26	119	100	24	圓形	前面の一部に焼面。	3900	
SK27	139	113	30	圓形	東側壁面と底面 の一部に焼面。	4100	
SK28	120	87	29	圓形	南側壁面に焼面。	4100	
SK29	62	58	10	圓形	北側と西側壁面 の一部に焼面。	4100	
SK30	137	91	35	箱形		4100	
SK31	122	99	28	箱形		4100	
SK32	192	128	57	圓形		2500	
SK33	150	129	92	ラス	3~5列および層から 圓文土器が多く出土。 ノ形	3000	3200
SK34	115	106	50	ラス	3列から圓文土器が多 くとまって出土。	3300	3500
SK35	116	107	32	圓形		3900	
SK36	73	14	35	圓形		3900	
SK37	137	122	35	箱形		4100	4200
SK38	328	226	26	圓形	SII52より新しい。	4100	4200
SK39	152	75	34	圓形		3600	3700
SK40	92	60	30	圓形		4100	
SK41	170	104	53	圓形		4300	4300
SK42	80	71	6	圓形	画面付近から圓文土器 がまとまって出土。	3300	3500
SK43	96	91	53	ラス	1列から圓文土器が多 くとまって出土。	3600	3800
SK44	76	34	17	圓形		3000	
SK45	125	114	37	圓形		3300	3500
SK46	127	117	36	圓形		4100	
SK47	101	89	40	ラス	1列から圓文土器が多 くとまって出土。	3600	3800
SK48	115	63	45	堆積状		3600	
SK50	147	102	45	堆積状		4300	
SK61	261	199	19	圓形		3000	3200
SK62	242	110	32	圓形		4100	
SK63	283	158	34	圓形		4100	
SK75	268	222	23	圓形	扇丸形。圓文土器・ 石器が多く出土。	4500	47,4800
SK81	93	84	25	圓形		4400	
SK82	111	101	8	圓形	画面の一部に焼け面。	4500	
SK84	184	93	30	圓形(有段)		4100	
SK85	140	99	31	圓形		4400	

第1表 土坑一覧表



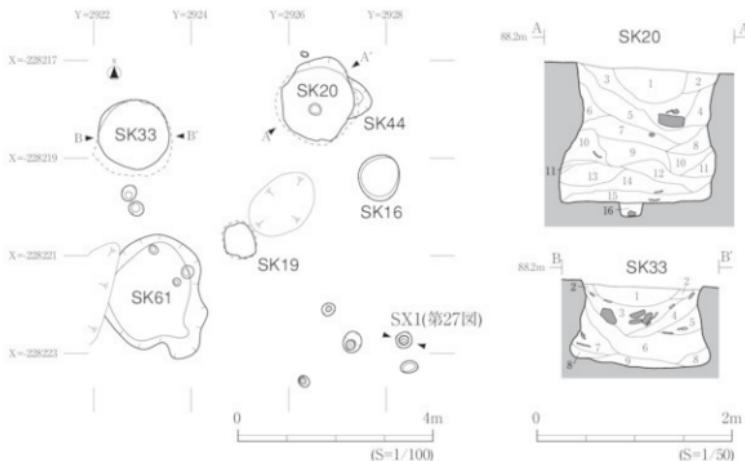
第29図 各遺構図の位置

土坑 番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	断面形	特記事項	造構団	遺物団
SK86	160	105	33	圓形		4400	
SK88	140	125	24	圓形	底面の一部に焼け面。	4400	
SK91	129	124	36	圓形	SII78より古い。	4400	
SK92	216	114	43	盤状(直形)		4400	
SK93	200	124	29	圓形		4400	
SK95	159	119	121	圓形	通路はSK75上層と一致。 構丸形。	4500	
SK96	315	239	17	圓形	構丸形。3列は 焼け土主体の理上。	4500	4800
SK97	122	91	26	圓形(有段)		4400	
SK98	122	63	18	圓形	SK75より新しい。道 物はSK75上層と一致。	4500	
SK99	93	73	11	圓形		4500	
SK100	132	114	17	圓形		4500	
SK101	177	117	33	圓形		4500	
SK103	110	74	21	圓形	SK103~106で圓文土 器・石器が多く出土。	4500	49,5000
SK104	98	84	70	堆積状		4500	49,5000
SK105	80	60	38	圓形		4500	49,5000
SK106	115	103	50	堆積状		4500	49,5000
SK107	114	98	34	圓形		4500	49,5000
SK108	126	83	30	堆積状		4500	49,5000
SK109	86	69	42	U字形		4500	49,5000
SK114	78	66	32	「ラ」字形		3600	

【SK20・SK33土坑】（第30図）

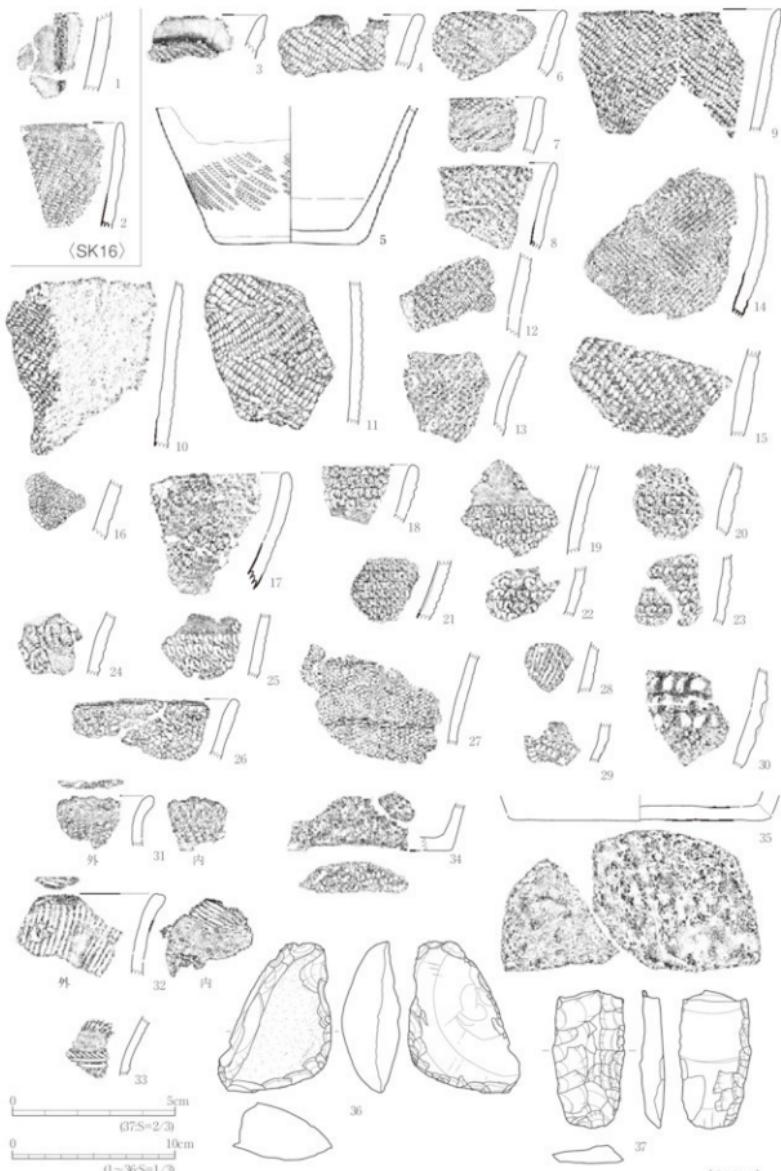
調査区の西部に位置する大型の土坑である。SK20は直径150~180cm、深さ約150cmで、断面形は箱形だが、壁がややオーバーハングする。底面中央にピット1個を検出した。SK33は直径140~180cm、深さ約90cmで、断面はフ拉斯コ形を呈し、壁は上端より最大で約20cm外側に広がる。SK20、SK33ともに炭化物、焼土、地山ブロックなどを含む土で埋め戻されており、遺物を多く含む。

胎土に纖維を含む繩文土器が多く出土している。文様には、斜縄文（31-6~10、32-4~6）、羽状縄文（31-11~16、32-6~10）、末端環付縄文（31-17~25、32-11）、組紐回転文（31-26、27）、連続刺突文（31-29、30、32-12~14、16）などがある。また、胎土に纖維を含まない土器（31-3~5、32-1~3）も少量だが出土しており、口縁部破片には隆帯による文様が施される。



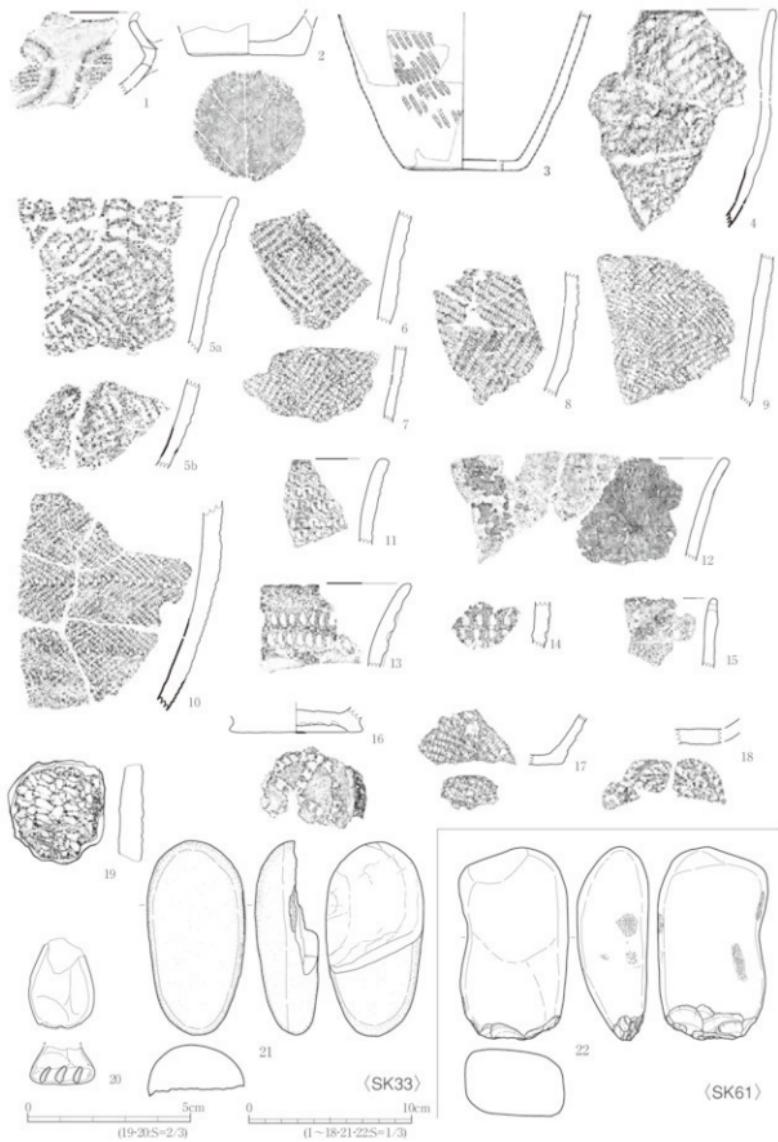
遺構名	層序	土色	土性	特徴	性格
SK20	1	黒褐色（10YR2/3）	シルト	燒土小ブロックを少し含む。炭化物・地山粒をわずかに含む	人為堆積
	2	黒褐色（10YR2/3）	シルト	燒土粒、炭化物粒をこくわすかに含む	人為堆積
	3	褐色（10YR4/4）	シルト	地山粒・小ブロックを多く含む	人為堆積
	4	黒褐色（10YR2/3）	シルト	燒土粒、炭化物粒、地山粒をわずかに含む	人為堆積
	5	褐褐色（10YR4/4）	シルト	地山粒～ワックスを多く含む	人為堆積
	6	黒褐色（10YR2/3）	シルト	燒土粒、炭化物粒、地山粒を少し含む	人為堆積
	7	褐色（10YR4/6）	シルト	地山主体、燒土粒、炭化物粒を含む	人為堆積
	8	黒褐色（10YR2/3）	シルト	燒土粒、炭化物粒、地山粒を少し含む	人為堆積
	9	褐色（10YR4/6）	シルト	地山主体、炭化物小ブロックを少し含む。燒土粒、炭化物粒をわずかに含む	人為堆積
	10	褐褐色（10YR3/4）	シルト	燒土小ブロック、地山小ブロックを少し含む	人為堆積
	11	褐色（10YR4/4）	シルト	地山粒をわずかに含む	人為堆積
	12	褐褐色（10YR3/4）	シルト	地山粒を含む。燒土小ブロックを少し含む	人為堆積
	13	褐褐色（10YR3/4）	シルト	地山大ブロック～ブロックを形状に含む	人為堆積
	14	褐色（10YR4/6）	シルト	地山主体、褐褐色小ブロックをこくわすかに含む	人為堆積
	15	黒褐色（10YR2/3）	シルト	地山大ブロックを含む	人為堆積
	16	黒褐色（10YR2/3）	シルト	炭化物粒、地山粒～小ブロックを少し含む	人為堆積
SK33	1	黄褐色（10YR5/6）	粘土	地山粘土	人為堆積
	2	褐褐色（10YR3/4）	粘土質シルト		人為堆積
	3	黒褐色（10YR3/2）	シルト	土器片・焼土ブロック・炭化物を多く含む	人為堆積
	4	褐褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	土器片・小ブロックを多く含む	人為堆積
	5	褐褐色（10YR3/3）	シルト	土器片・焼土ブロック・炭化物を含む	人為堆積
	6	黒褐色（10YR3/2）	シルト	土器片・焼土ブロック・炭化物を含む	人為堆積
	7	褐褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	土器片・焼土ブロック・炭化物・地山ブロックを含む	人為堆積
	8	黄褐色（10YR5/6）	シルト質粘土	地山ブロックを非常に多く含む	崩落土
	9	黒褐色（10YR3/2）	シルト	地山ブロック・炭化物粒を多く含む	機械堆積

第30図 SK20・SK33土坑ほか



第31図 SK16・SK20土坑出土遺物

〈SK20〉



第32図 SK33・SK61土坑出土遺物

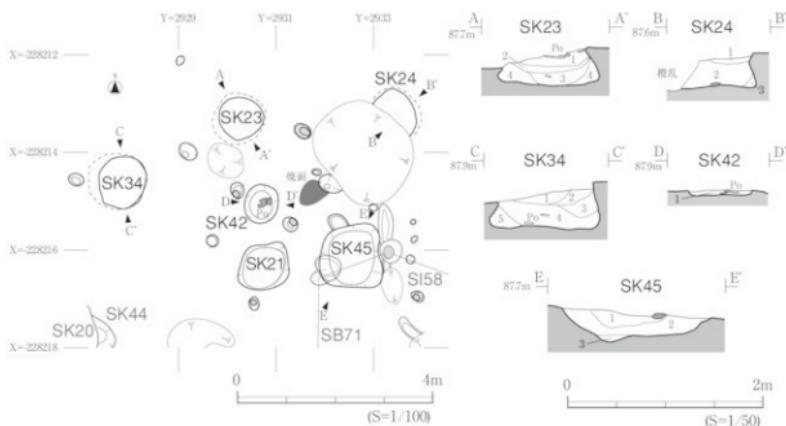
第31・32図 遺物觀察表

図番号	遺構/層	器種	特徴	写真	登録番号
31-1	SK16/確認面	深鉢	隆帯	17-8	Po11
31-2	SK16/確認面	深鉢	平縁、繩文 (LR-Q2多条)	17-9	Po12
31-3	SK20/1層	深鉢	平縁、隆帯、繩文 (R)	17-11	Po30
31-4	SK20/13層	深鉢	平縁、繩文 (RL)	17-12	Po45
31-5	SK20/理下層	深鉢	底径: 9.6cm、繩文 (LR)	17-10	Po27
31-6	SK20/理	深鉢	平縁、繩文 (RL)、胎土に織維を含む	17-13	Po19
31-7	SK20/理	深鉢	平縁、繩文 (LR)、胎土に織維を含む	17-14	Po23
31-8	SK20/8層	深鉢	平縁、繩文?、内外面磨滅、胎土に織維を含む	17-15	Po39
31-9	SK20/9層	深鉢	平縁、繩文 (RL-Q2多条)、胎土に織維を含む	17-16	Po40
31-10	SK20/15層	深鉢	繩文 (LR?)、胎土に織維を含む	17-17	Po47
31-11	SK20/15層	深鉢	羽状繩文 (LR×RL)、胎土に織維を含む	17-18	Po42
31-12	SK20/理	深鉢	菱形羽状繩文 (LR-Q2多条×RL-Q2多条)	17-19	Po21
31-13	SK20/15層	深鉢	羽状繩文 (LR-Q2多条×RL-Q2多条結束第1種)、胎土に織維を含む	17-20	Po48
31-14	SK20/13層	深鉢	羽状繩文 (LR-Q2多条×RL-Q2多条結束第1種)	17-22	Po50
31-15	SK20/理	深鉢	羽状繩文 (RL×RL)、胎土に織維を含む	17-21	Po29
31-16	SK20/12層	深鉢	羽状繩文 (RL×RL)、胎土に織維を含む	17-23	Po43
31-17	SK20/4層	深鉢	平縁、末端環付繩文 (RL-Q2多条)、胎土に織維を含む	17-25	Po34
31-18	SK20/理	深鉢	平縁、末端環付繩文 (RL-Q2多条) → ナデ、胎土に織維を含む	17-24	Po18
31-19	SK20/5層	深鉢	末端環付繩文 (RL-Q2多条)、胎土に織維を含む	17-26	Po37
31-20	SK20/5層	深鉢	末端環付繩文 (RL)、胎土に織維を含む、胎土に砂釋を多く含む	17-27	Po17
31-21	SK20/理	深鉢	末端環付繩文 (RL-Q2多条)、胎土に織維を含む	17-30	Po32
31-22・23	SK20/5層	深鉢	末端環付繩文 (RL-Q2多条)、胎土に織維を含む	17-31	Po38
31-24	SK20/3層	深鉢	末端環付繩文 (RL-Q2多条)、胎土に織維を含む	17-32	Po33
31-25	SK20/4層	深鉢	末端環付繩文 (RL?)、胎土に織維を含む	17-33	Po33
31-26	SK20/14層	深鉢	平縁、網目回転文?、胎土に織維を含む	17-34	Po46
31-27	SK20/理	深鉢	網目回転文、胎土に織維を含む	17-35	Po25
31-28	SK20/10層	深鉢	撫系文、胎土に織維を含む	17-28	Po41
31-29	SK20/理	深鉢	半載竹管による連続刺突文、胎土に織維を含む	17-29	Po20
31-30	SK20/理	深鉢	大形の工具による連続刺突文、胎土に織維を含む	17-36	Po22
31-31	SK20/理	深鉢	平縁、内外面に繩文 (RL?)、胎土に織維を含む	17-38	Po24
31-32	SK20/4層	深鉢	平縁、内外面に条痕文、胎土に織維を含む	17-37	Po35
31-33	SK20/5層	深鉢	沈繩文、連続刺突文	17-39	Po36
31-34	SK20/3層	深鉢	底部繩文 (LR)、体部磨滅、胎土に織維を含む	17-41	Po28
31-35	SK20/13層	深鉢	底径16.2cm、胎土に織維を含む	17-40	Po44
31-36	SK20/13層	不定形石器	泥岩、長さ83.5mm、幅70.1mm、厚さ36.3mm、重量229.2g	17-43	S28
31-37	SK20/3層	石臼	貝殻、長さ21.5mm、幅42.5mm、厚さ27.4mm、重量85.5g、基部欠損	17-42	S29
32-1	SK33/3層	鉢	波状口縁、降雪、繩文 (LR)、往日基部残存	19-2	Po133
32-2	SK33/3層	深鉢	底径7.2cm、底部木要痕、外側研磨	19-3	Po129
32-3	SK33/3層	深鉢	底径7.8cm、繩文 (RL)	19-4	Po130
32-4	SK33/理	深鉢	平縁、繩文 (不明)、磨滅、胎土に織維を含む	19-6	Po112
32-5	SK33/4層+4-6層	深鉢	平縁、菱形羽状繩文、胎土に織維を含む	19-7	Po108
32-6	SK33/3層	深鉢	菱形羽状繩文 (LR-Q2多条×RL-Q2多条)、胎土に織維を含む	19-8	Po128
32-7	SK33/理	深鉢	菱形羽状繩文 (LR×RL)、胎土に織維を含む	19-5	Po118
32-8	SK33/2層	深鉢	羽状繩文 (LR-Q2多条×RL-Q2多条)、胎土に織維を含む	19-8	Po126
32-9	SK33/理	深鉢	羽状繩文 (LR-Q2多条×RL-Q2多条)、胎土に織維を含む	19-9	Po115
32-10	SK33/理	深鉢	羽状繩文 (LR-Q2多条×RL、結束第1種)、胎土に織維を含む	19-15	Po127
32-11	SK33/理	深鉢	平縁、末端環付繩文 (RL-Q2多条)、胎土に織維を含む	19-10	Po106
32-12	SK33/理	深鉢	平縁、弧形連続突文、胎土に織維を含む	19-11	Po116
32-13	SK33/理	深鉢	平縁、連続刺突文	19-12	Po117
32-14	SK33/2層	深鉢	半載竹管による連続刺突文、胎土に織維を含む	19-13	Po121
32-15	SK33/理	深鉢	平縁、補修孔あり、胎土に織維を含む	19-14	Po113
32-16	SK33/2層	深鉢	上円底、底径8.2cm、連続刺突文、胎土に織維を含む	19-16	Po120
32-17	SK33/理	深鉢	繩文 (RL、底面にも)、胎土に織維を含む	19-17	Po114
32-18	SK33/理	深鉢	底部外側に末端環付繩文 (RL)、胎土に織維を含む	19-18	Po111
32-19	SK33/3層	円盤状土製品	最大径32mm、厚さ7mm、粗目回転文、打ち欠きのみ	19-20	ト4
32-20	SK33/4層	土偶脚部	円盤状粘土板の一端に3箇所のキザミ	19-21	ト5
32-21	SK33/理	嵌石	花崗岩、長さ118.5mm、幅58mm、厚さ29mm、重量324.9g	19-19	S32
32-22	SK61/理	嵌石	泥岩、長さ117.4mm、幅66mm、厚さ42.3mm、重量562g	20-19	S56

【SK23・SK24・SK34・SK43・SK47土坑】(第33・36図)

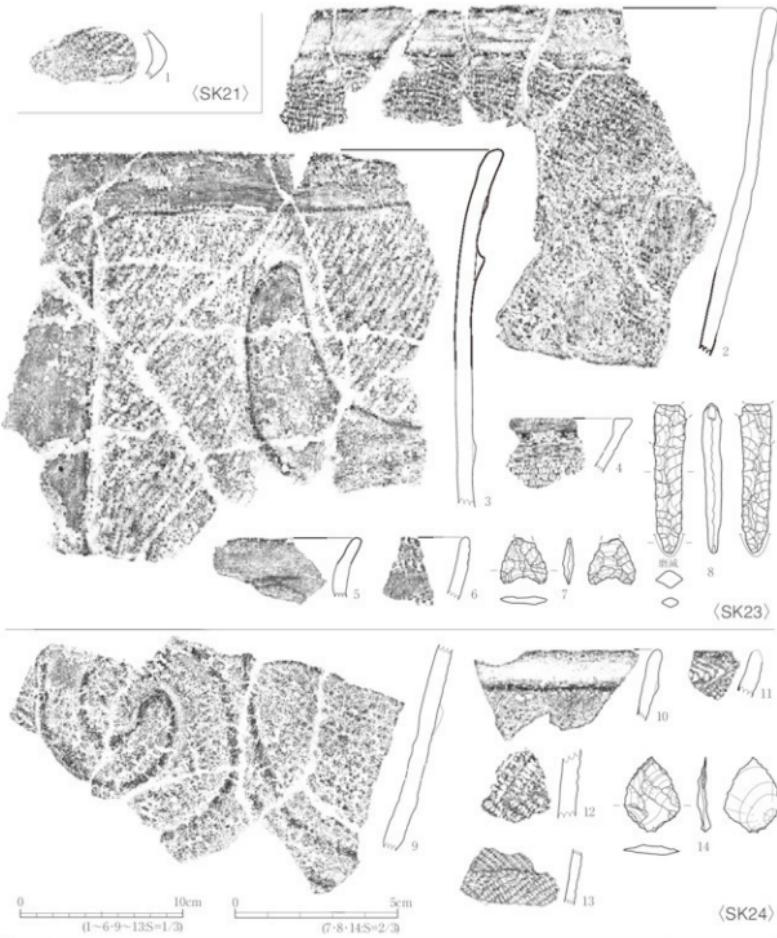
調査区の北西部に位置する。上端は直径90~120cmの円形で、深さは確認面より40~50cmある。壁はオーバーハンプグしており、上端より最大約20cm外側に広がる。SK43は底面が丸く、他は平坦である。いずれの土坑も炭化物、焼土、地山ブロックなどを含む土で埋め戻されており、埋土からは多くの遺物が出土した。大形の土器片には、縁部に区画された無文帶で丁字文(34-3, 38-8)や渦巻き文(34-9, 35-1)を描くものがみられる。また、SK43からは口縁部が内側に肥厚し、縄文のみを施す深鉢(38-1, 2)が出土している。

なお、SK19(第30図)、SK114(第36図)も断面がフラスコ状を呈するが、自然堆積で埋まっている、遺物量は少ない。



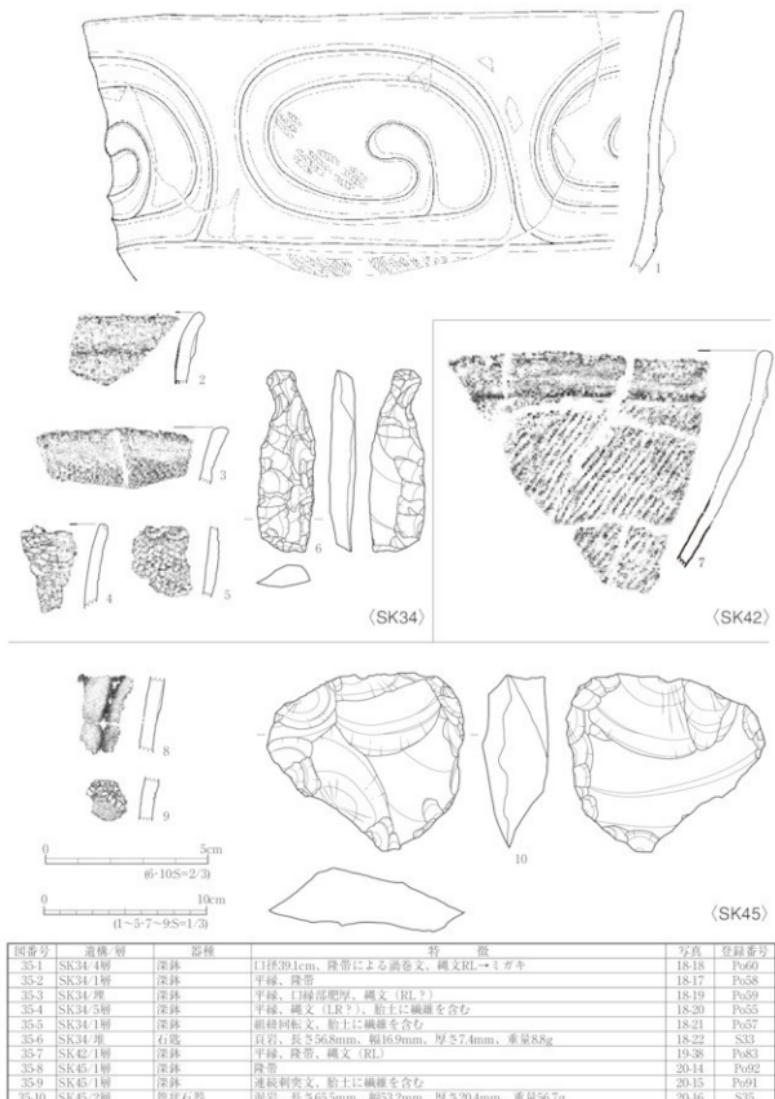
通構名	層序	土色	土性	特徴	性格
SK23	1	暗褐色(10YR3-4)	シルト	土器片を多く含む、焼土粒・炭化物粒を少し含む	人為堆積
	2	暗褐色(10YR3-4)	シルト	地山小ブロックを含む	人為堆積
	3	暗褐色(10YR3-3)	粘土質シルト	土器片を含む、焼土粒・炭化物粒をわずかに含む	人為堆積
	4	暗褐色(10YR3-4)	シルト	焼土粒・炭化物粒をわずかに含む	崩落土
SK24	1	灰・黄褐色(10YR4-3)	粘土質シルト	焼土・ブロック・炭化物を含む	人為堆積
	2	黒褐色(10YR2-3)	粘土質シルト	焼土・ブロック・炭化物を多く含む	人為堆積
	3	暗褐色(10YR3-4)	シルト質粘土	地山小ブロックを多く含む、炭化物を含む	崩落土
SK34	1	褐色(10YR4-4)	シルト	焼土・炭化物粒を少し含む	人為堆積
	2	暗褐色(10YR3-3)	シルト	焼土・炭化物粒・小礫を少し含む	人為堆積
	3	暗褐色(10YR3-3)	シルト	焼土・炭化物粒を少し含むやや多く含む	人為堆積
	4	黒褐色(10YR3-2)	粘土質シルト	土器片・焼土・炭化物粒を多く含む	人為堆積
SK42	1	暗褐色(10YR3-4)	粘土質シルト	地山小ブロックを多く含む、炭化物粒を少し含む	崩落土
	1	暗褐色(10YR3-3)	シルト	土器片を含む、炭化物粒をごくわずかに含む	自然堆積
	2	暗褐色(10YR3-4)	シルト	焼土粒・炭化物粒・小礫を少し含む	自然堆積
SK45	2	褐色(10YR4-6)	粘土質シルト	小礫をわずかに含む	自然堆積
	3	褐色(10YR4-6)	粘土質シルト	地山土体	自然堆積

第33図 SK23・SK24・SK34・SK42・SK45土坑ほか

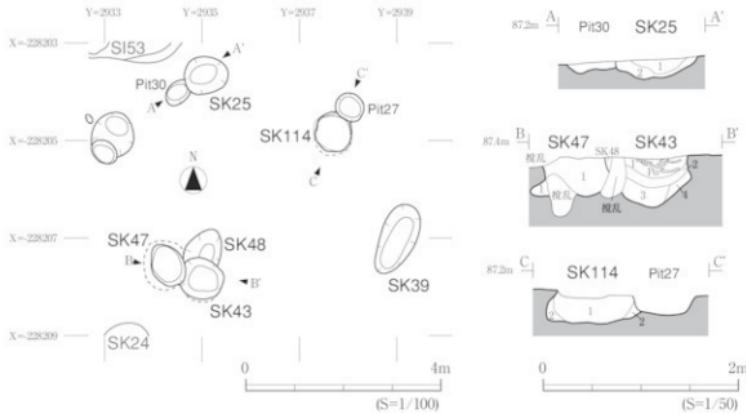


第34図 SK21・SK23・SK24土坑出土遺物

番号	遺物/層	器種	特徴	写真	登録番号
34-1	SK21/壁面	鉢	沈縁、縞文 (LR)	18-8	Po49
34-2	SK23/3層	深鉢	平縁、縞帶、縞文 (LR?)	18-2	Po150
34-3	SK23/1層	深鉢	平縁、縞帶による丁字文、縞文 (RL)	18-1	Po143
34-4	SK23/4層	鉢	平縁、口縁部肥厚、縞文 (RL)	18-4	Po151
34-5	SK23/理	深鉢	平縁、内外面研磨	18-3	Po146
34-6	SK23/理	深鉢	平縁、連続軋突文、胎土に纖維を含む	18-5	Po147
34-7	SK23/1層	石瓶	貝岩、長さ119mm、幅14.3mm、厚さ3.2mm、重量0.5g。先端部欠損	18-6	S69
34-8	SK23/3層	石瓶	貝岩、長さ454mm、幅10mm、厚さ5.59mm、重量27g	18-7	S23
34-9	SK24/理	深鉢	縦帶による波文、縞文 (LR)	18-10	Po103
34-10	SK24/理	深鉢	平縁、縞帶、縞文 (不明)	18-11	Po102
34-11	SK24/2層	深鉢	羽状縞文 (LR×RL、結束第1種)、胎土に纖維を含む	18-12	Po104
34-12	SK24/2層	深鉢	羽状縞文 (LR×RL、胎土に纖維を含む)	18-13	Po52
34-13	SK24/理	深鉢	菱形羽状縞文 (LR-段多条×RL-0或多条)、胎土に纖維を含む	18-9	Po101
34-14	SK24/理	石瓶	貝岩、長さ24.4mm、幅16.7mm、厚さ2.8mm、重量0.9g	18-14	S30

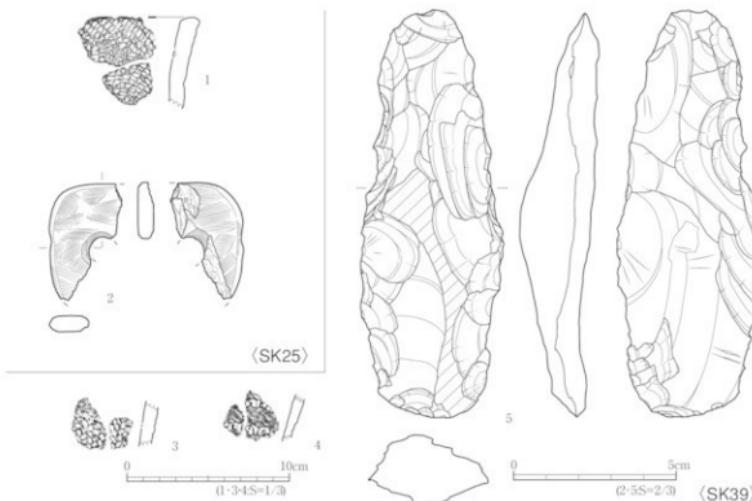


第35図 SK34・SK42・SK45土坑出土遺物

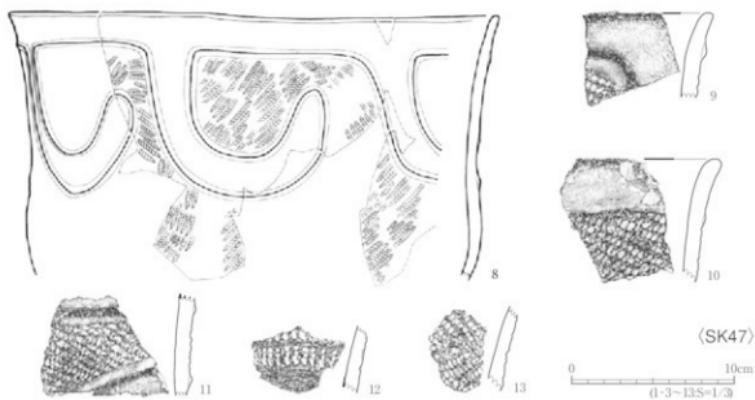
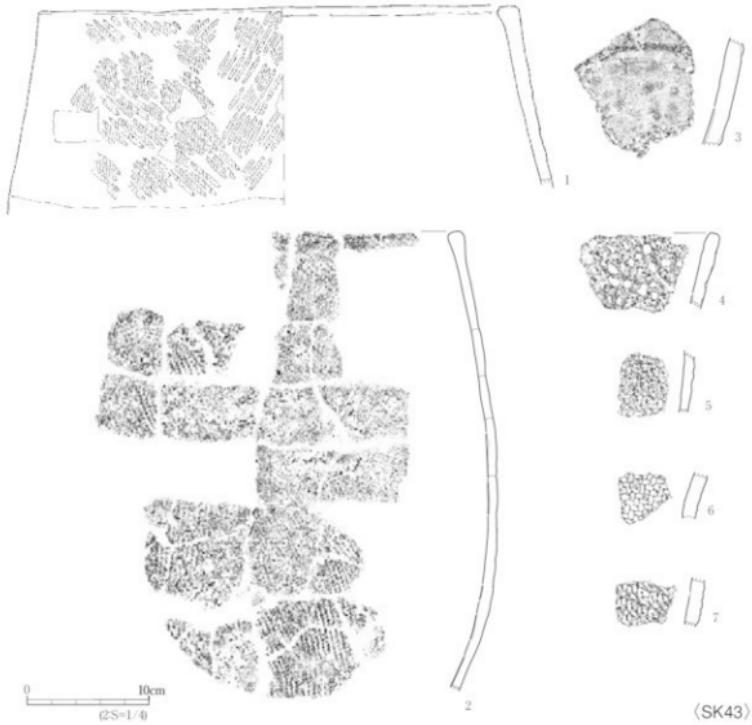


遺構名	附序	土色	土性	特徴	性格
SK25	1	暗褐色 (10YR3-4)	シルト	炭化物粒をごくわずかに含む	自然堆積
	2	暗褐色 (10YR3-4)	シルト	地山粒を含む	自然堆積
SK43	1	黒褐色 (75YR2-3)	粘土質シルト	土器片・炭化物を多く含む、焼土粒を含む	人為堆積
	2	暗褐色 (75YR3-3)	シルト	焼土ブロック・炭化物を非常に多く含む、上器片を含む	人為堆積
	3	暗褐色 (10YR3-3)	粘土質シルト	焼土ブロック・炭化物・地山小ブロックを含む	人為堆積
	4	褐色 (10YR4-4)	シルト質粘土	焼土ブロックを多く含む、炭化物を少し含む	人為堆積
SK47	1	暗褐色 (10YR3-4)	シルト	土器片・炭化物・焼土粒を多く含む	人為堆積
SK114	1	暗褐色 (10YR3-3)	シルト	土器片をわずかに含む	自然堆積
	2	暗褐色 (10YR3-4)	シルト	地山ブロックを含む	崩落土

第36図 SK25・SK43・SK47・SK114土坑ほか



第37図 SK25・SK39出土遺物



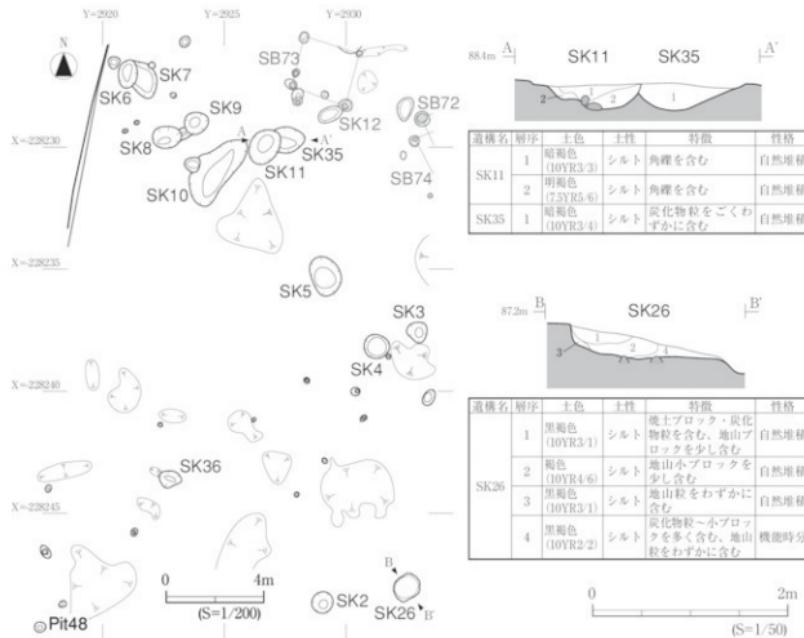
第38図 SK43・SK47土坑出土遺物

第37・38図 遺物觀察表

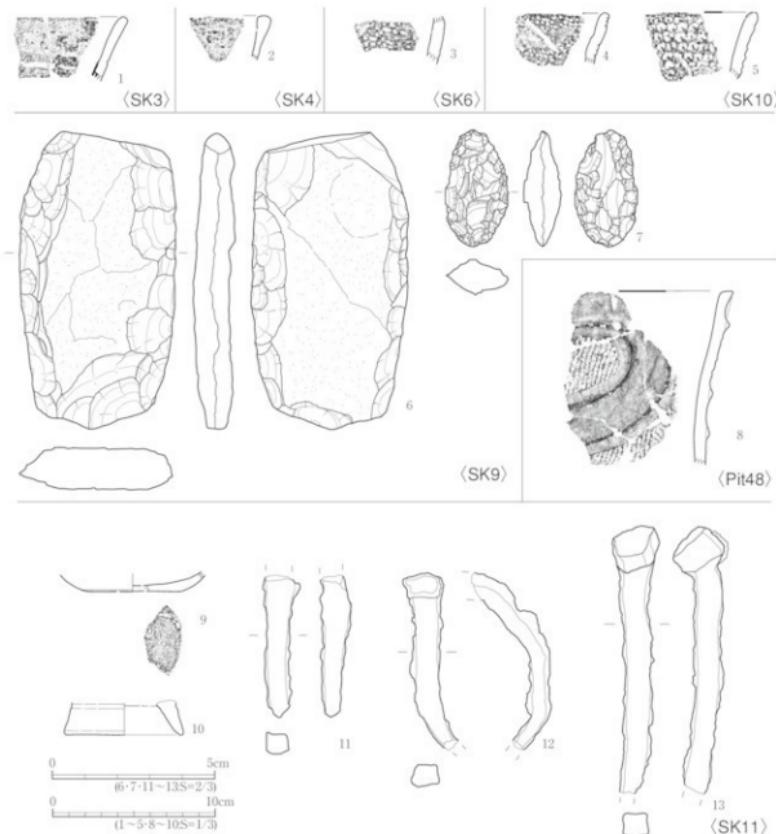
回収番号	直機・削	器種	特徴	写真	登録番号
37-1	SK25/ 削	深鉢	平縁、羽状織文 (L R × R L)、胎土に織維を含む	18-15	P633
37-2	SK25/ 削	块状耳鉢?	貝岩、長さ35.3mm、幅22.1mm、厚さ5.1mm、重量51g、割れ面に光沢、再調整か	18-16	S31
37-3	SK39/ 削	深鉢	織文 (RLR)、胎土に織維を含む	19-23	P673
37-4	SK39/ 削	深鉢	末端端付織文 (RL)、胎土に織維を含む	19-24	P674
37-5	SK39/ 2層	块状石器	泥岩、長さ23.4mm、幅43.9mm、厚さ21.2mm、重量106.3g	19-22	S31
38-1	SK43/ 削	深鉢	口径31.3cm、口縁部肥厚、織文 (RL, LR)	20-1	P684
38-2	SK43/ 削	深鉢	平縁、口縁部肥厚、織文 (RL)	20-7	P693
38-3	SK43/ 削	深鉢	隆帯	20-2	P690
38-4	SK43/ 削	深鉢	平縁、浅絞刺突文、胎土に織維を含む	20-3	P685
38-5	SK43/ 削	深鉢	末端端付織文 (RL) (複数)、胎土に織維を含む	20-4	P687
38-6	SK43/ 削	深鉢	細絞回転文、胎土に織維を含む	20-5	P686
38-7	SK43/ 削	深鉢	末端端付織文 (RL) (複数)、胎土に織維を含む	20-6	P688
38-8	SK47/ 削	深鉢	復元口径 (32) cm、平縁、隆帯によるJ字文、織文 (RL) → ミガキ	20-8	P693
38-9	SK47/ 削	深鉢	平縁、隆帯、織文 (LR)	20-9	P695
38-10	SK47/ 削	深鉢	平縁、隆帯、織文 (LR)	20-10	P695
38-11	SK47/ 削	深鉢	隆帯、織文 (LR)	20-11	P699
38-12	SK47/ 削	深鉢	34-1組の浅絞刺突文、胎土に織維を含む	20-12	P697
38-13	SK47/ 削	深鉢	羽状織文 (LR + RL)、胎土に織維を含む	20-13	P696

【SK26・SK27・SK28・SK29土坑】 (第39・41図)

調査区南寄りに分布し、底面もしくは壁面の一部に焼面のある土坑である。直径は60~140cm、深度は確認面から10~30cmで、断面形は皿状である。炭化物や焼土を含む土が堆積しており、底面付近の堆積は機能時の可能性がある。調査区北部に分布するSK82 (第45図)、SK88 (第44図)にも同様の特徴がみられる。出土遺物はないが、SK27より古いSK47土坑から土器片が出土している。

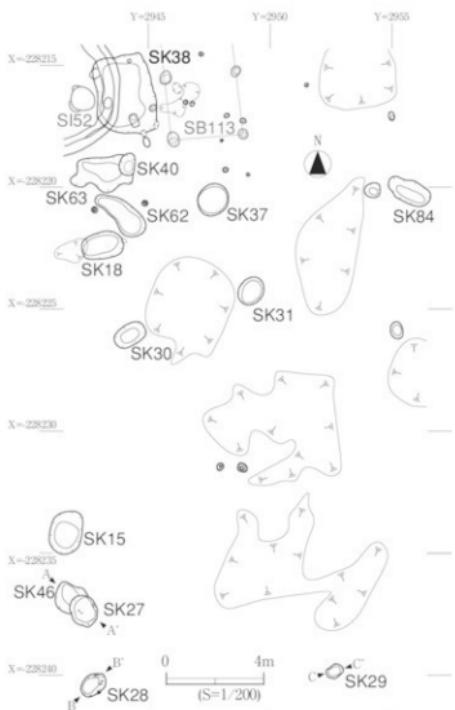


第39図 SK11・SK26土坑ほか



図番号	遺構/層	器種	特徴	写真	登録番号
40-1	SK3・堆	深鉢	平縁、沈縁文	17-1	Po1
40-2	SK4・堆	深鉢	平縁、口縁肥厚	17-2	Po2
40-3	SK6・堆	深鉢	根縁回転文、胎土に纖維を含む	17-3	Po3
40-4	SK10・1層	深鉢	平縁、3本一筋の溝状刺突文、胎土に纖維を含む	17-4	Po6
40-5	SK10・1層	深鉢	平縁、末端複合縫文(R L)、胎土に纖維を含む	17-5	Po7
40-6	SK9・2層	石器	片麻岩、長さ89.4mm、幅47.3mm、厚さ13.5mm、重量91.5mm	17-6	S67
40-7	SK9・堆認面	不定形石器	石材不明、長さ35.3mm、幅28.8mm、厚さ10.1mm、重量5.3g、尖頭器もしくは石礫未品か	17-7	S24
40-8	Pit48・理	深鉢	隆背、縫文(R L)、筋削	16-27	Po22
40-9	SK11・堆	ロクロ土器・环	復元直径(54.1)cm、底辺回転系切無透然、内面ミガキ→黒色処理	24-16	Po8
40-10	SK11・堆	土師器・台付瓶?	台底径7.0cm、内外面ともロクロナのみ	24-17	Po9
40-11	SK11・堆	鉤釘	長さ34mm、厚さ11mm、断面方形、基部欠損	24-18	Fe3
40-12	SK11・堆	鉤釘	長さ54mm、厚さ12mm、断面方形、基部・先端部欠損、大きく曲がる	24-19	Fe4
40-13	SK11・堆	鉤釘	長さ82mm、底部厚さ16mm、断面方形、先端部欠損	24-20	Fe2

第40図 SK3・SK4・SK6・SK9・SK10・SK11・Pit48出土遺物

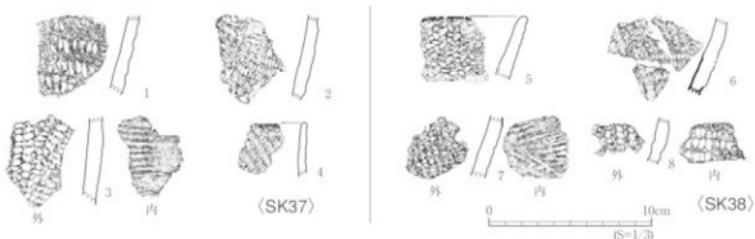


層名	層序	土色	土性	特徴	性格
SK27	1	赤褐色 (10YR4/2)	シルト		自然堆積
	2	褐色	シルト		自然堆積
	3	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	燒土・地山ブロックを含む	自然堆積
	4	黒褐色 (10YR2/3)	粘土質 シルト	炭化物粒・地山ブロックを含む	自然堆積
	5	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	炭化物を非常に多く含む、燒土を含む	機能時?

層名	層序	土色	土性	特徴	性格
SK28	1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	炭化物小ブロックを少し含む	自然堆積
	2	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	地山粒を多く含む、燒土・小ブロック・炭化物小ブロックを少し含む	自然堆積
	3	黒色 (10YR2/1)	シルト	地山粒をわずかに含む	自然堆積

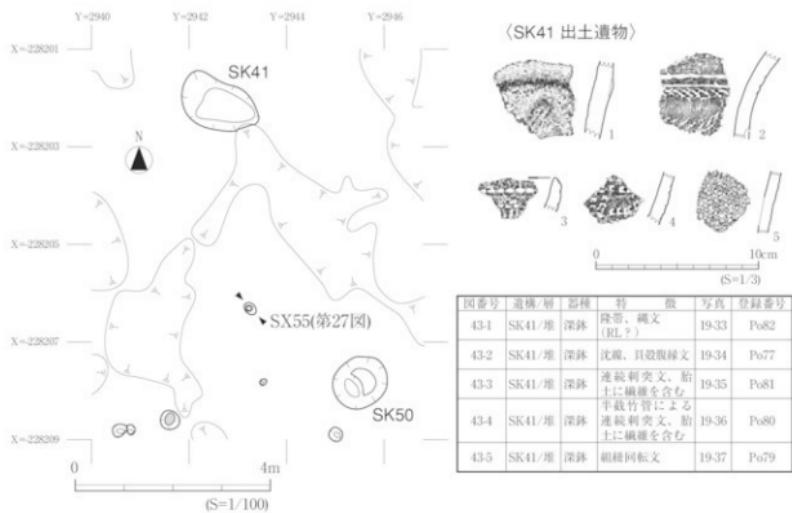
層名	層序	土色	土性	特徴	性格
SK29	1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	炭化物粒・地山粒を多く含む	機能時?

第41図 SK27・SK28・SK29土坑ほか

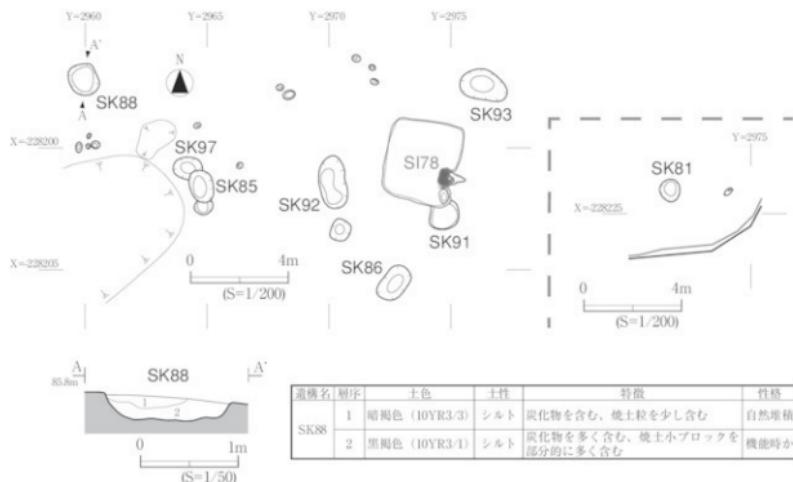


図番号	遺構/層	形種	特徴	写真	登録番号
42.1	SK37/層	深鉢	末端埋付繩文 (RL-0段多条)、胎土に纖維を含む	19.25	P664
42.2	SK37/層	深鉢	羽状繩文 (LR-0段多条×RL-0段多条)、胎土に纖維を含む	19.26	P663
42.3	SK37/層	深鉢	繩文 (RL)、内面に条痕、胎土に纖維を含む	19.27	P662
42.4	SK37/層	深鉢	平縁、繩文 (RL-0段多条)、胎土に纖維を含む	19.28	P665
42.5	SK38/井	深鉢	平縁、粗糲羽状繩文、胎土に纖維を含む	19.29	P670
42.6	SK38/井	深鉢	菱形羽状繩文 (LR-0段多条×RL-0段多条)、胎土に纖維を含む	19.30	P667
42.7	SK38/井	深鉢	繩文 (RL)、内面に条痕、胎土に纖維を含む	19.31	P666
42.8	SK38/井	深鉢	内外面繩文 (RL)	19.32	P668

第42図 SK37・SK38土坑出土遺物



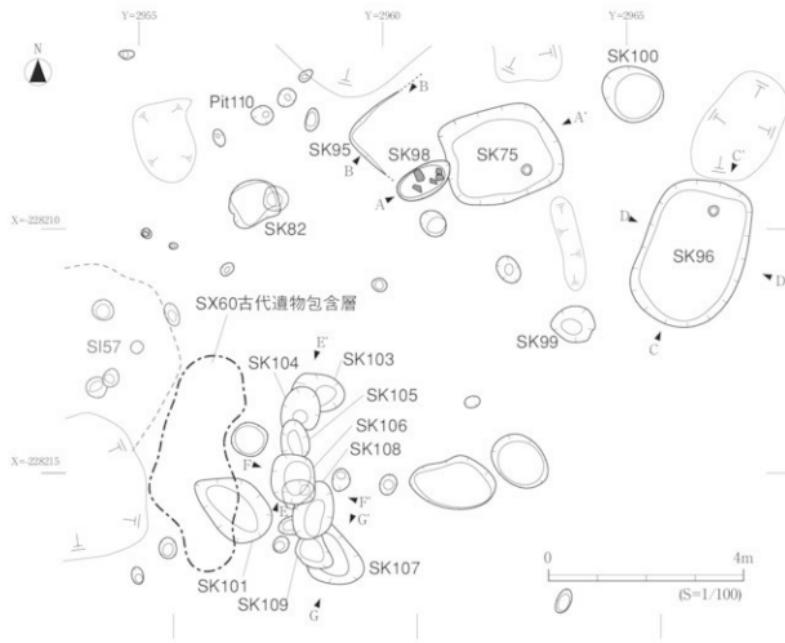
第43図 SK41土坑ほか



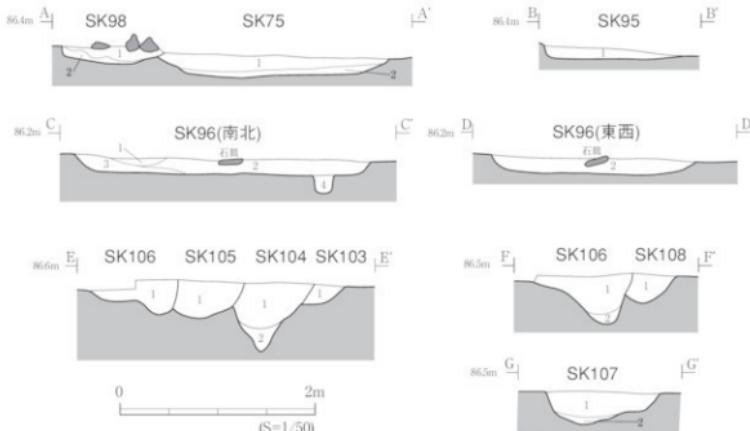
第44図 SK88土坑ほか

【SK75・95・96土坑】(第45・46図)

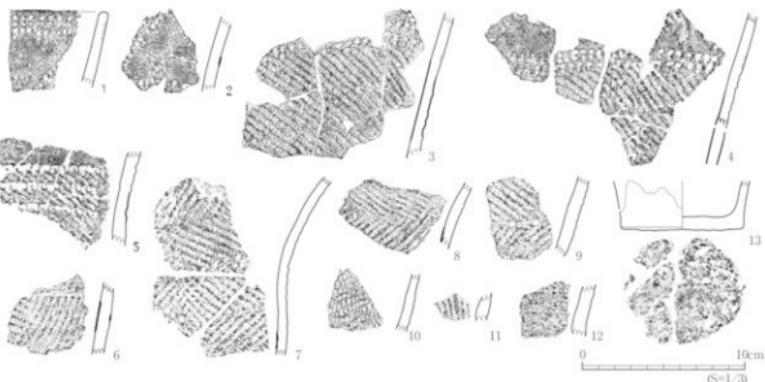
隅丸方形で、底面が平坦な土坑である。調査区北東部にまとまって分布する。SK75は長軸約2.3m×短軸約1.9m、SK96は長軸約3.1m×短軸約2.1mで、深さは確認面から約20cm、壁は緩やかに立ち上がる。基本的に自然堆積で埋まっているが、SK96では南壁際が焼土を多く含む層（3層）で埋め戻されていた。また、SK75・SK96では底面でそれぞれピット1個を検出した。堆積土からは胎土に織維を含む縄文土器や石器が出土した（第47・48図）。なお、遺構確認時にはSK75・95・98が区別できなかったため、一括で「SK75上層」として取り上げている。47-1～4は同一個体で、口縁部に横位と斜位の連続刺突文、体部に縄文を施す。その他に、末端環付縄文（47-5）、羽状縄文（47-6～9）、撚糸文（47-11、12）などの文様をもつ土器がある。石器は、SK75から縦長の石匙3点（48-1～3）や頁岩の石核（48-4）が出土している。SK96からは堆積土上部から石皿（48-7）が出土したほか、凹基の石錐（48-6）、大形の石錐（48-8）、籠状石器（48-9）がみられる。



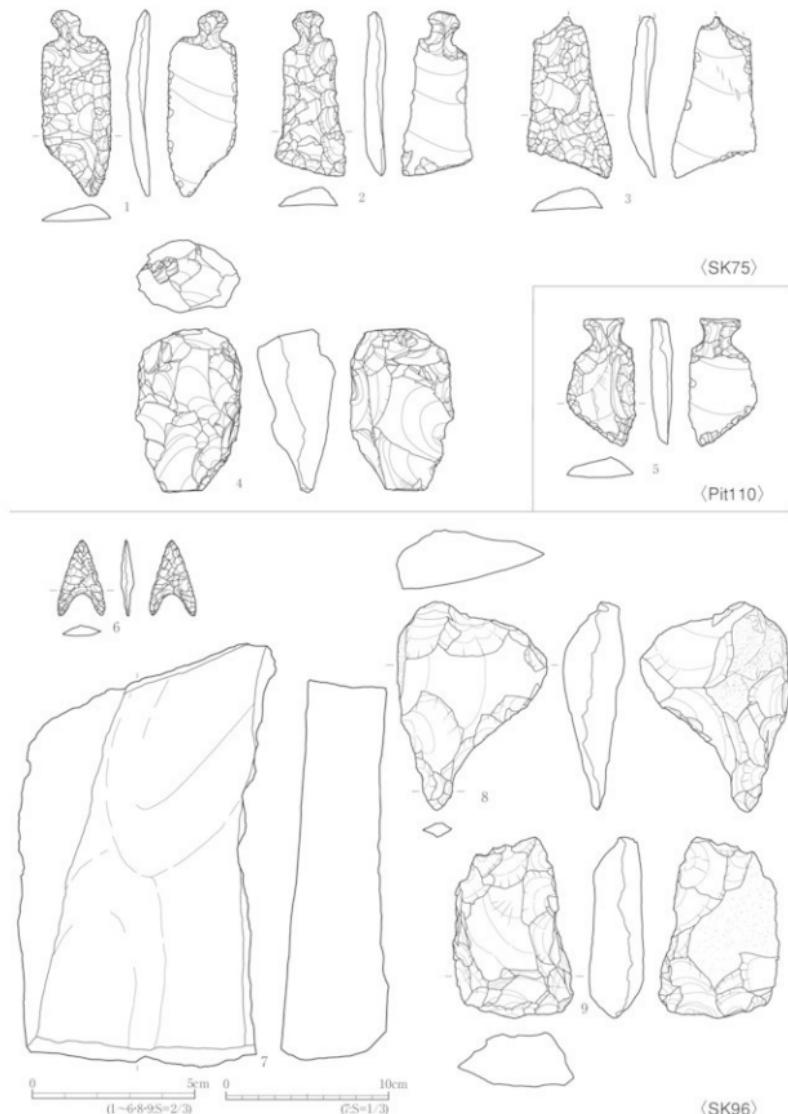
第45図 SK75・SK95・SK96・SK103～109土坑ほか平面図



第46図 SK75・SK95・SK96・SK103～108土坑断面図



第47図 SK75出土土器



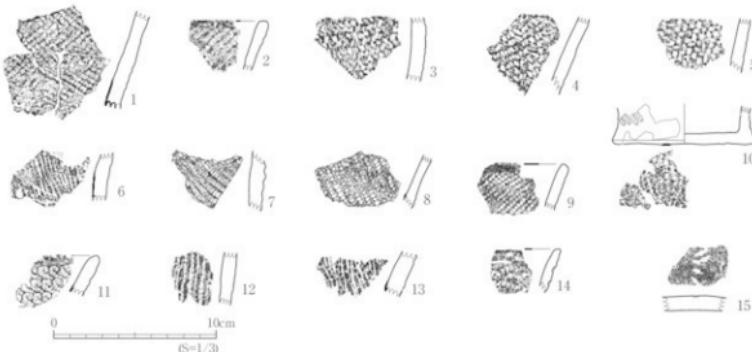
第48図 SK75・SK96・Pit110出土石器

第47・48図 遺物観察表

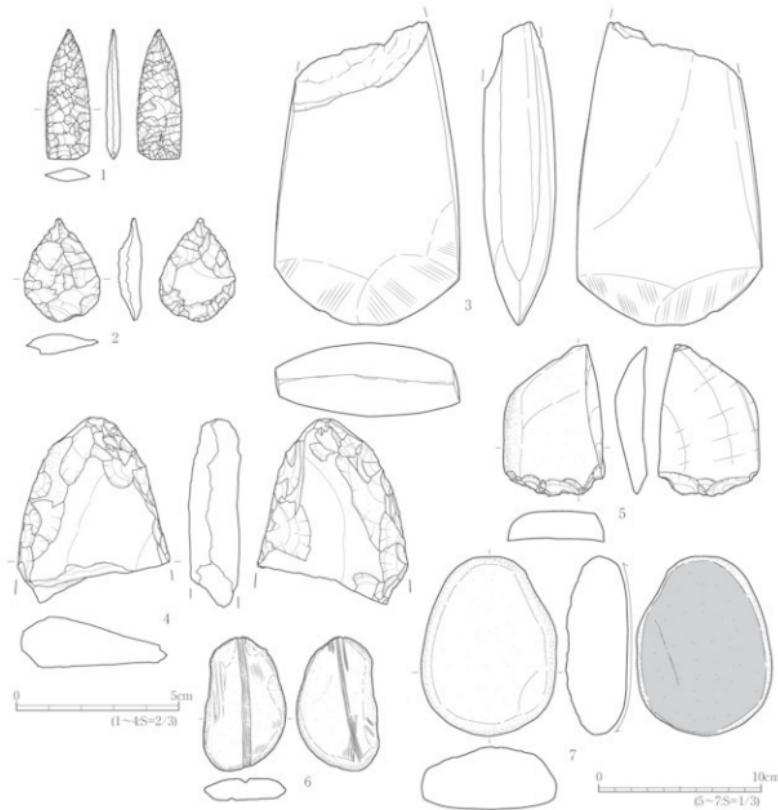
回収番号	直横・層	器種	特徴	写真	登録番号
47-1~4	SK75上層	深鉢	平縁、口縁部に半載竹筋による連続刺突文、外部繩文（RL-0段多条）、胎土に纖維を含む	21-1~4	Pb324
47-5	SK75上層	深鉢	末端環付繩文（RL-0段多条）、胎土に纖維を含む	21-6	Pb325
47-6	SK75上層	深鉢	菱形羽状繩文（LR-0段多条×RL-0段多条）、胎土に纖維を含む	21-5	Pb331
47-7	SK75上層	深鉢	菱形羽状繩文（LR-0段多条×RL-0段多条）、胎土に纖維を含む	21-7	Pb326
47-8	SK75上層	深鉢	羽状繩文（LR-0段多条×RL-0段多条）、胎土に纖維を含む	21-8	Pb328
47-9	SK75上層	深鉢	羽状繩文（LR-0段多条×RL-0段多条・他鉢）、胎土に纖維を含む	21-9	Pb332
47-10	SK75上層	深鉢	繩文（L.RL）、胎土に纖維を含む	21-10	Pb329
47-11	SK75上層	深鉢	撫糸文（R）、胎土に纖維を含む	21-11	Pb330
47-12	SK75上層	深鉢	撫糸文（L）、胎土に纖維を含む	21-12	Pb327
47-13	SK75上層	深鉢	底厚76cm、胎土に纖維を含む	21-13	Pb333
48-1	SK75上層	石皿	頁岩、長さ575mm、幅205mm、厚さ34mm、重量72g	21-15	S97
48-2	SK75上層	石皿	頁岩、長さ510mm、幅214mm、厚さ54mm、重量59g	21-16	S95
48-3	SK75上層	石皿	頁岩、長さ509mm、幅247mm、厚さ57mm、重量75g、つまみ部欠損	21-14	S96
48-4	SK75上層	石核	頁岩、長さ491mm、幅310mm、厚さ224mm、重量31.2g	21-17	S94
48-5	Pt110上層	石核	頁岩、長さ392mm、幅205mm、厚さ62mm、重量45g	16-29	S84
48-6	SK96 2層	石皿	頁岩、長さ523mm、幅144mm、厚さ36mm、重量0.2g	22-1	S98
48-7	SK96 2層	石皿	花崗岩、長さ361mm、幅144mm、厚さ36mm、重量4100g	22-4	S115
48-8	SK96 2層	石皿	砂岩、長さ563mm、幅462mm、厚さ36mm、重量3.8kg	22-3	S99
48-9	SK96 2層	箆状石器	片麻岩、長さ540mm、幅349mm、厚さ153mm、重量36.1g	22-2	S100

【SK103~109土坑】(第45・46図)

調査区中央に分布する不整形な土坑の集まりである。平面規模は60~180cmで、深さは確認面から20~70cmあり、断面形は基本的にU字状を呈する。堆積土はいずれも自然堆積で、下層ほど明るく粘性の強い土が堆積している。遺物は、胎土に纖維を含む繩文土器や石器が出土している（第49図）。土器の文様は羽状繩文（49-1、7）、斜繩文（49-2、8~10）、末端環付繩文（49-11）、撫糸文（49-12、13）、連続刺突文（49-14）がみられる。また、42-15は底部内面に繩の側面圧痕がある。石器には平基（50-1）および木の葉形（50-2）のものがある。50-3はSK104から出土した磨製石斧で、刃部は研ぎなおしや刃こぼれがみられる。50-6は有溝砥石で、表裏の中央（位置は対応していない）に幅2~5mmの溝があり、その他にも細い溝状の擦痕がある。50-4は箆状石器の基部、50-7は磨石、50-5は不定形石器で、原礫面を大きく残した石の一端を加工して刃部を作り出している。



第49図 SK103~109土坑出土土器



第50図 SK103~109土坑出土石器

国番号	遺構/層	形種	特徴	写真	登録番号
49-1	SK103~105	深鉢	菱形羽状網文 (LR.0/2多条×RL.0/2多条)。胎土に繊維を含む	21-18	Po348
49-2	SK106 堆	深鉢	平線、網文 (LR.0/2多条)。胎土に繊維を含む	21-19	Po338
49-3	SK106 堆	深鉢	粗縦同軸文、胎土に繊維を含む	21-20	Po339
49-4	SK106 堆	深鉢	粗縦同軸文、胎土に繊維を含む	21-21	Po341
49-5	SK106 下層	深鉢	粗縦同軸文、胎土に繊維を含む	21-22	Po346
49-6	SK106 堆	深鉢	撫希文、胎土に繊維を含む	21-23	Po340
49-7	SK107.1堆	深鉢	羽状網文 (LR.0/2多条×RL.0/2多条)。胎土に繊維を含む	21-24	Po334
49-8	SK107.1堆	深鉢	網文 (RL)。胎土に繊維を含む	21-25	Po335
49-9	SK107.1堆	深鉢	平線、網文 (RL)。胎土に繊維を含む	21-26	Po336
49-10	SK107.1堆	深鉢	体下部および底面に網文 (RL)。胎土に繊維を含む	21-27	Po337
49-11	SK107.1堆	深鉢	平線、末梢横付網文 (RL.0/2多条)。胎土に繊維を含む	21-28	Po347
49-12	SK109 堆	深鉢	撫希文 (L)。胎土に繊維を含む	21-29	Po342
49-13	SK110 堆	深鉢	撫希文。胎土に繊維を含む	21-30	Po343
49-14	SK111 堆	深鉢	平線、手執方管による押引文、沈線。胎土に繊維を含む	21-31	Po344
49-15	SK112 堆	深鉢	底面前の側面丸頭。胎土に繊維を含む	21-32	Po345
50-1	SK107 碓認面	石研	頁岩。長さ39.9mm、幅13.6mm、厚さ39mm、重量2.4g	21-33	S110
50-2	SK103~105	石研	泥岩?。長さ31.8mm、幅23.5mm、厚さ6.4mm、重量3.4g	21-34	S88
50-3	SK104.1堆	磨製石斧	泥岩?。長さ52.0mm、幅36.7mm、厚さ2.5mm、重量179g。基部欠損。刃部研磨なし。肩こぼれあり	21-36	S91
50-4	SK104.1堆	荒形石器	泥岩。長さ57.8mm、幅46.7mm、厚さ13.8mm、重量45.4g。刃部欠損	21-35	S92
50-5	SK109 堆	不定形石器	泥岩。長さ91.9mm、幅61.0mm、厚さ19.3mm、重量145.1g	21-37	S93
50-6	SK103~105	有溝石	砂岩。長さ84.2mm、幅88mm、厚さ12.5mm、重量66.6g。表面に8x2.5mmの溝。腹にも擦痕状の溝あり	21-38	S89
50-7	SK103~105	磨石	砂岩。長さ110mm、幅82mm、厚さ37mm、重量485.5g	21-39	S90

(5) 遺物包含層

【SX60遺物包含層】(第45図)

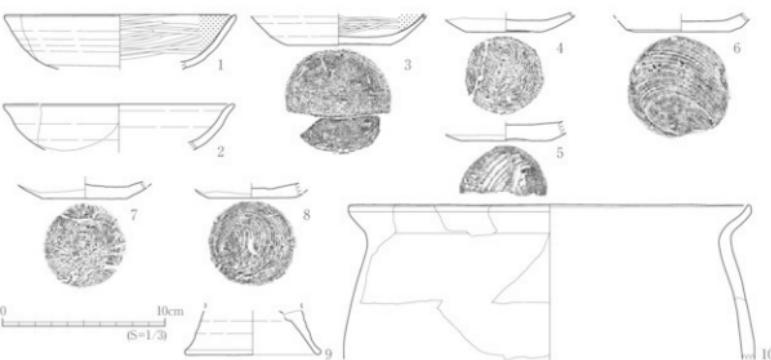
〔位置〕 調査区はほぼ中央に位置する。

〔重複関係〕 SK110土坑と重複し、これより新しい。

〔規模〕 南北約4.4m、東西約1.9mの範囲で、炭化物を多く含む暗褐色シルトが部分的に薄く堆積している。

〔出土遺物〕 ロクロ土師器の环 (51-1、3~5)、台 (51-9)、壺 (51-10)、赤焼土器の环 (51-2、6~8) が出土している。环の底部はいずれも回転糸切り無調整である。

〔備考〕 环・壺などの古代の遺物がまとまって出土している点、堆積土がSI78-1層に類似している点から、削平を受けた住居の一部が残存していた可能性がある。



団番号	遺物/層	器種	特徴	写真	登録番号
51-1	SX60/堆	ロクロ土師器・环	復元口径 (14) cm、内:ロクロナデ→ミガキ→黒色処理	24-23	Pb313
51-2	SX60/確認面	赤焼土器・环	復元口径 (14) cm、外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	24-24	Pb246
51-3	SX60/堆	ロクロ土師器・环	底径6.4cm、外:ロクロナデ 底:回転糸切り無調整 内:ロクロナデ→ミガキ→黒色処理	24-25	Pb312
51-4	SX60/確認面	ロクロ土師器・环	底径6.4cm、外:ロクロナデ 底:回転糸切り無調整 内:ロクロナデ→ミガキ→黒色処理	24-26	Pb239
51-5	SX60/確認面	ロクロ土師器・环	底径5.5cm、外:ロクロナデ 底:回転糸切り無調整 内:ロクロナデ→ミガキ→黒色処理	24-27	Pb236
51-6	SX60/堆	赤焼土器・环	底径5.0cm、外:ロクロナデ 底:回転糸切り無調整 内:ロクロナデ	24-28	Pb314
51-7	SX60/確認面	赤焼土器・环	底径5.3cm、外:ロクロナデ 底:回転糸切り無調整 内:ロクロナデ	24-29	Pb238
51-8	SX60/確認面	赤焼土器・环	底径5.4cm、外:ロクロナデ 底:回転糸切り無調整 内:ロクロナデ	24-30	Pb235
51-9	SX60/確認面	ロクロ土師器・壺?	台部のみ、有底径8.4cm、残存高32cm、外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	24-32	Pb237
51-10	SX60/確認面	ロクロ土師器・壺?	復元口径 (24) cm、内外面ともロクロナデ→口頭部強ナデ、全体的に剥落	24-31	Pb247

第51図 SX60遺物包含層出土遺物

(6) 炭窯跡

【SR66炭窯跡】(第52図)

〔位置〕 調査区南側斜面の標高77~78m付近に位置する。

〔規模・構造〕 全長約4.0m、幅約3.0mの半地下式の窯跡である。

〔方向〕 主軸方向は北で西に約60°偏している。

〔焼成室〕 直径約3.0mの円形で、壁はほぼ垂直に立ち上がり、右側壁で約80cm残存する。床面はほぼ平坦で、直上には天井崩落土が堆積している。焚口寄りでは床と壁が2時期確認された。壁は古い段階の天井が崩落した後に、内側に新たな壁を作っている。床下には排水溝と思われるごく浅い溝が検

出され、炭で埋まっていた。

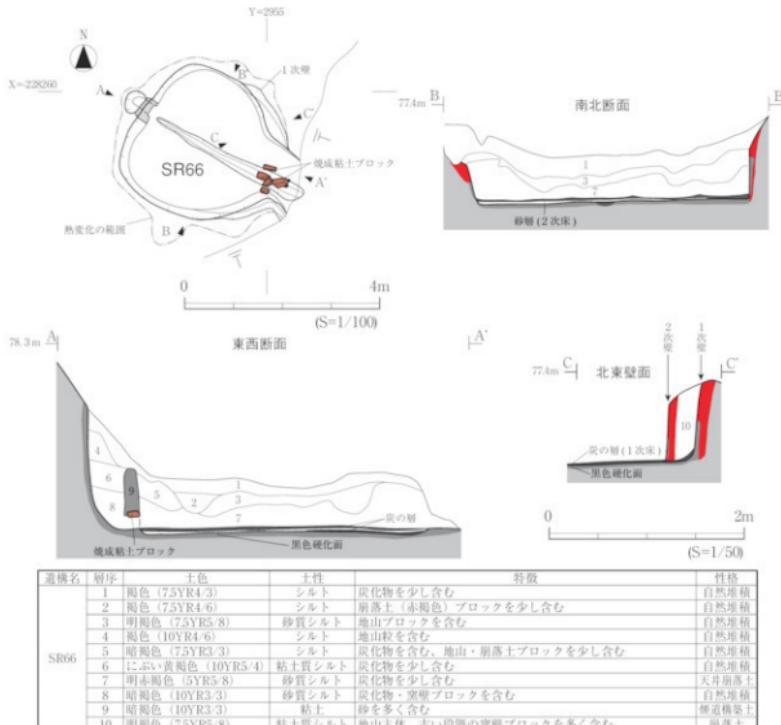
〔焚口〕長さ約60cm、幅約100cmあるが、右側壁が崩落で広くなっている。床面直上に直方体状に焼かれた粘土ブロックがあり、焚口の構造物だったと考えられる。

〔煙出し〕焼成室の主軸線状にあり、高さ約120cm残存する。焼成室奥壁を幅約50cm、長さ約40cm掘り込み、下部に排煙口を設け、焼成室との境に粘土を積み上げて封じている。排煙口には焚口と同様の粘土ブロックが使われている。

〔灰原〕窯跡南東側の斜面に分布する（第2図）。断面を観察したところ、炭の層が2層に分かれることが確認された（写真図版12-6）。

〔遺物〕流れ込んだ縄文土器・石器が出土したのみで、窯跡の時期を示す遺物は出土していない。

〔備考〕時期は不明だが、窯跡の形態から近世以降の可能性が高い。

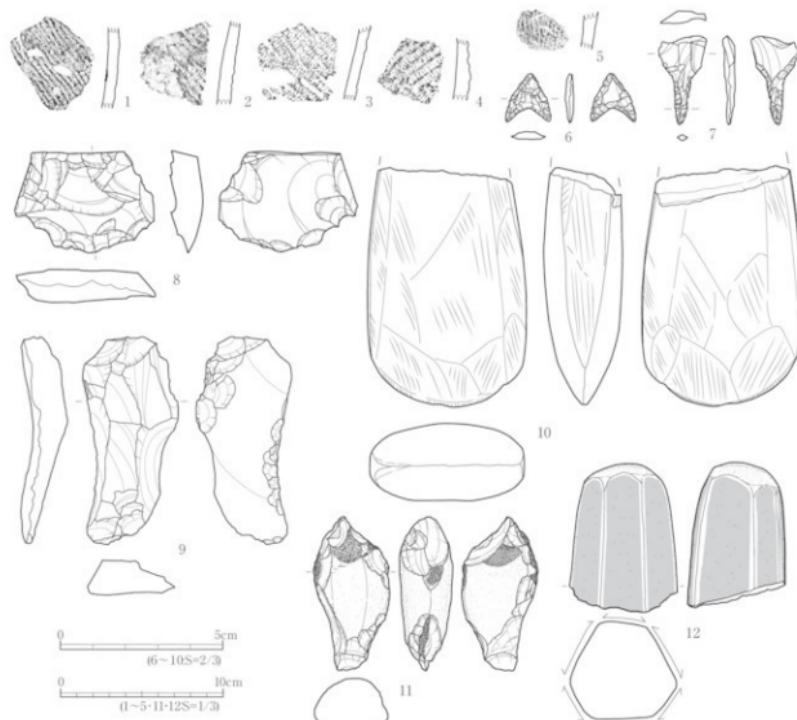


第52図 SR66炭窯跡

(7) 遺構外出土遺物（第53～55図）

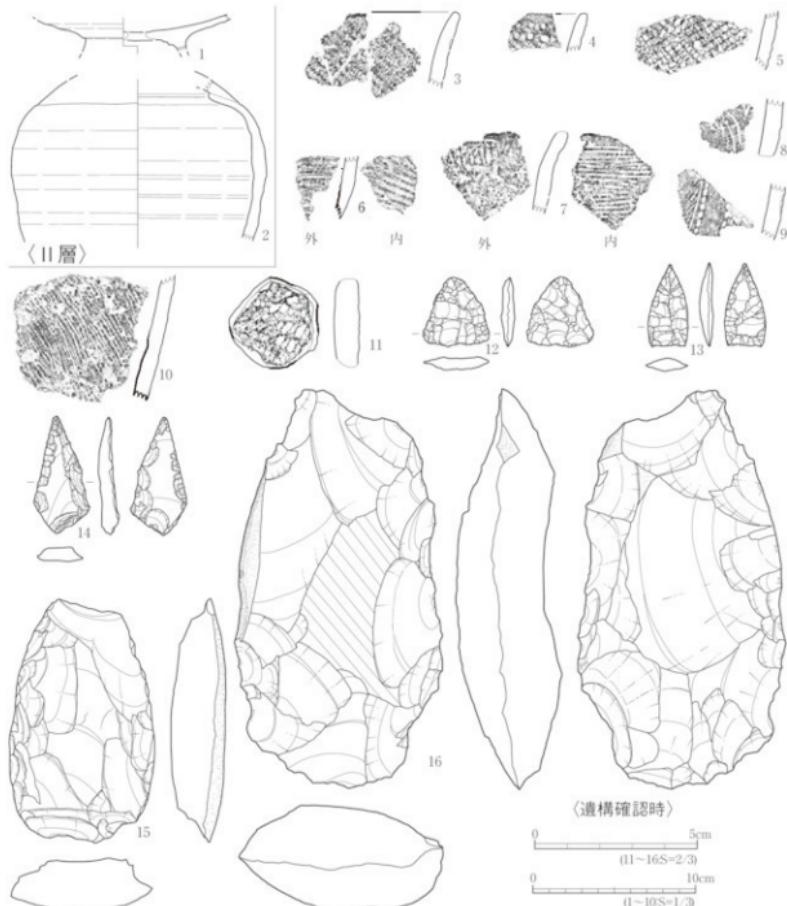
基本層Ⅲ層からは、胎土に纖維を含む繩文土器（53-1～5）や石器（53-6～12）などが出土している。54-1・2は、調査区北東壁際の表土直下（Ⅱ層上面）から出土した土器で、SI78堅穴住跡出土土器と接合した破片（19-7）もあるため、SI78が削平を受けた際に動かされた遺物の可能性がある。

その他に、丘陵上で遺構確認時に出土した遺物（54-3～16）、南斜面、風倒木痕など擾乱から出土した遺物、および表採遺物（55-1～15）について、代表的な遺物を掲載した。また、図は掲載していないが箇状石器が擾乱などから多く出土している（写真図版23-2・3・19～22）。



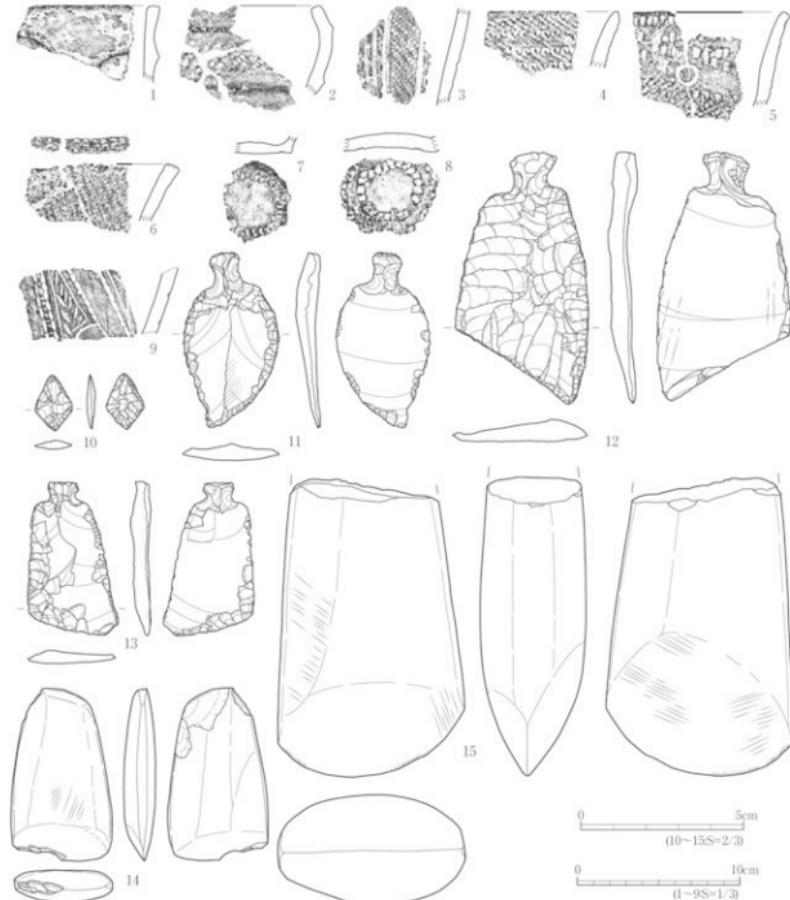
図版号	遺構/層	形種	特徴	写真	登録番号
53-1	Ⅲ層	深鉢	繩文（RL-0段多条）、胎土に纖維を含む	22.5	Pv350
53-2	Ⅲ層	深鉢	繩文（RL-0段多条）、胎土に纖維を含む	22.6	Pv351
53-3	Ⅲ層	深鉢	繩文（RL）、胎土に纖維を含む	22.7	Pv353
53-4	Ⅲ層	深鉢	菱形羽状繩文（RL-0段多条×RL-0段多条）、胎土に纖維を含む	22.8	Pv352
53-5	Ⅲ層	深鉢	撚糸文、胎土に纖維を含む	22.9	Pv349
53-6	Ⅲ層	石器	貝岩、長さ15.1mm、幅13.7mm、厚さ2.3mm、重量0.26g	22.10	S101
53-7	Ⅲ層	石器	貝岩、長さ26.3mm、幅13.9mm、厚さ3.4mm、重量0.2g	22.11	S102
53-8	Ⅲ層	楔形石器	貝岩、長さ31.1mm、幅2.2mm、厚さ8.9mm、重量15.2g	22.12	S104
53-9	Ⅲ層	不定形石器	貝岩、長さ62.8mm、幅27.9mm、厚さ10.9mm、重量19.9g	22.13	S105
53-10	Ⅲ層	磨製石斧	貝岩、長さ71.5mm、幅8.4mm、厚さ24.8mm、重量154.4g	22.14	S106
53-11	Ⅲ層	敲石	貝岩、長さ96mm、幅45mm、厚さ32.4mm、重量199.4g	22.15	S107
53-12	Ⅲ層	磨石	砂岩、長さ89mm、幅64mm、厚さ59.3mm、重量462.1g	22.16	S87

第53図 Ⅲ層出土遺物



図番号	遺構/層	器種	特徴	写真	登録番号
54-1	II層	高台付环	外面: ロクロナデ 底部穿孔	24-21	Pb310
54-2	II層	長頭瓶	外面: ロクロナデ 3段構成	24-22	Pb309
54-3	道構確認時	深鉢	平縁、縄文 (RL×0/2多条)、胎土に纖維を含む	22-17	Pb242
54-4	道構確認時	深鉢	平縁、内面環付 (RL×0/2多条)、胎土に纖維を含む	22-18	Pb240
54-5	道構確認時	深鉢	菱形羽状織文 (RL×LR)、胎土に纖維を含む	22-19	Pb245
54-6	道構確認時	深鉢	外面に条痕	22-20	Pb232
54-7	道構確認時	深鉢	外面齊滅、内面に貝殻条痕、胎土に纖維を含む	22-21	Pb241
54-8	道構確認時	深鉢	沈縫、貝殻模様文	22-22	Pb233
54-9	道構確認時	深鉢	沈縫、貝殻模様文、Po233と同一個体か	22-23	Pb231
54-10	道構確認時	深鉢	撚糸文、胎土に纖維を含む	22-24	Pb243
54-11	道構確認時	十翼円盤	最大径6cm、厚さ0.7cm、文様不明、周縁は磨いて整形	22-25	+2
54-12	道構確認時	石鏟	豆岩、長さ20.5mm、幅20.4mm、厚さ4.4mm、重量19g	22-26	S51
54-13	道構確認時	石鏟	豆岩、長さ25.3mm、幅12.6mm、厚さ38mm、重量19g	22-27	S52
54-14	道構確認時	石鏟?	泥岩?、長さ35.5mm、幅17.1mm、厚さ40mm、重量41g	22-28	S50
54-15	道構確認時	石箭	泥岩、長さ73.2mm、幅44.2mm、厚さ16.4mm、重量68.2g	22-29	S45
54-16	道構確認時	打製石斧	泥岩、長さ123.2mm、幅63.5mm、厚さ29.6mm、重量265.5g	23-1	S111

第54図 II層、構造確認時 (II ~ III層) 出土遺物



図番号	遺構/層	器種	特徴	写真 登録番号
55-1	南斜面	漂砾	平緩、降帶	23-4 Pb248
55-2	擾乱	漂砾	降帯、繩文 (LR) → ナデ	23-5 Pb263
55-3	擾乱	漂砾	繩文 (RL) → 沈締	23-6 Pb261
55-4	南斜面	漂砾	末端埋付繩文 (RL)、胎土に織維を含む	23-7 Pb253
55-5	南斜面	漂砾	平緩、半裁竹管による連続刺突、円形刺突、繩文 (LR)、胎土に織維を含む	23-9 Pb251
55-6	南斜面	漂砾	平緩、11件組 (2×1組)の連続刺突、繩文 (RL) (又多葉)、胎土に織維を含む	23-10 Pb250
55-7	南斜面	漂砾	半裁竹管による連続刺突	23-8 Pb252
55-8	南斜面	漂砾	底径6.0cm、連続刺突文 (繩の末端圧痕か)、胎土に織維を含む	23-11 Pb249
55-9	擾乱	漂砾	沈締、押引文、貝殻縫合線	23-12 Pb258
55-10	擾乱	石器	貝岩、長さ16.8mm、幅11.5mm、厚さ2.6mm、重量0.4g	23-13 S77
55-11	擾乱	石器	貝岩、長さ53.1mm、幅29.2mm、厚さ6.4mm、重量7.5g	23-16 S112
55-12	表様	石器	貝岩、長さ77.6mm、幅40.8mm、厚さ6.7mm、重量19.0g	23-14 S78
55-13	擾乱	石器	貝岩、長さ47mm、幅26mm、厚さ5.5mm、6.0g	23-15 S109
55-14	擾乱	磨製石斧	凝灰岩、長さ53.5mm、幅30.4mm、厚さ9.4mm、重量24.1g	23-17 S113
55-15	擾乱	磨製石斧	砂岩、長さ50.4mm、幅56.5mm、厚さ33.3mm、重量285.6g	23-18 S114

第55図 南斜面、擾乱出土および表面採集遺物

3. 総 括

西石山原遺跡の調査で発見した遺構・遺物は、主に縄文時代と古代のものがあり、ここではそれについて分類や時期の検討などを行う。

(1) 縄文時代

①縄文土器の分類

出土した縄文土器には早期中葉～前期前葉および中期後葉～末葉のものがある。

〔早期中葉〕

細い沈線文の脇に貝殻腹縁文や連続刺突文を伴う土器がある。胎土には纖維を含まない。43-2、55-9など、遺構内や搅乱から破片が少数出土するのみである。

〔早期後葉～前期初頭〕

胎土に纖維を含み、内外面に縄文もしくは条痕文を施す土器がある。42-3、7、8など破片が少数出土するのみである。また、31-31、32のように口唇部に刻みや押圧を施す土器は、北経塚遺跡SI25竪穴住居跡およびV層出土土器に類例があり、早期末～前期初頭に位置づけられている（山元町教委2010）。

〔前期前葉〕

胎土に纖維を含み、以下のような文様が見られる。

a、斜縄文=縄文は0段多条による2段撚りが多い（以下、b、cの縄文も同様）。

b、羽状縄文=結束（第1種）のものと非結束のものがある。非結束のものには、菱形羽状縄文も多く見られる。

c、末端環付縄文=いずれもRL縄文で、多段で密接に施文する。横位や斜位がみられる。

d、連続刺突文=棒状工具、半截竹管状工具によるもの、爪形のものなどがあり、横位や斜位に施文される。円形工具による単独の刺突（55-5）もみられる。

e、組紐回転文

f、撚糸文=R撚りとL撚りがある。縦位や斜位に施文する。

これらの文様の中でa～dが主体で、e・fは少数である。全体の器形と文様構成が分かる資料はないが、口縁部は直線的に開き、体部はわずかに丸みをおびるものが多い。47-1～4は、口縁部に横位・斜位の連続刺突文を、体部には縄文を施す。底部はいずれも平底で、縄文や連続刺突文、縄の圧痕（49-15）を施す例があり、上げ底（32-16）も見られる。

以上のような特徴をもつ土器群の類例としては、県内では川崎町前田遺跡A群土器（宮城県教委1987）、名取市宇賀崎貝塚B群土器（宮城県教委1980a）などがあり、福島県では南相馬市宮田貝塚第三群土器（小高町教委1975）をはじめとして多数の報告例がある。定まった型式名は用いられていないが、上川名II式から大木I式への間に位置する土器群として理解されることが多い（相原1990）。

〔中期後葉～末葉〕

隆帯による施文を主とする。基本的には器面全体に縄文を施した後、隆帯によって区画し縄文を磨

り消す。隆帯は細く、断面三角形状のものが多い。全体の器形や文様構成が推定できる資料としては、緩やかにS字状に湾曲する深鉢（6-2、35-1、38-8など）があり、無文帯でS字、J字、渦巻き文などを描く。頸部が「く」の字に屈曲する鉢形土器（11-3）も文様は類似しており、無文帯に赤彩を施すものが見られる。底部から口縁部まで直線的に開く器形のものは、口縁部を隆帯で横位区画するだけのものが多い。これらの土器群は、中期末葉の大木10式に位置づけられる。大木10式は2段階もしくは3段階に細分される（宮城県教委1988、丹羽1981など）。ここで主体となる土器は、縄文施文部分が広く、無文帯が文様モチーフの主体となっている点、無文帯同士の切り合いがほとんど見られず、モチーフが一連で繋がっている点などから、大木10式古段階の後半に位置づけられる。これよりも古い様相をもつ土器としては、隆帯の脇に幅広の沈線を伴うもの（14-8）、太く高い隆帯を施すもの（6-1）などがあり、破片資料のみだが、中期後葉大木9式までさかのほる可能性がある。

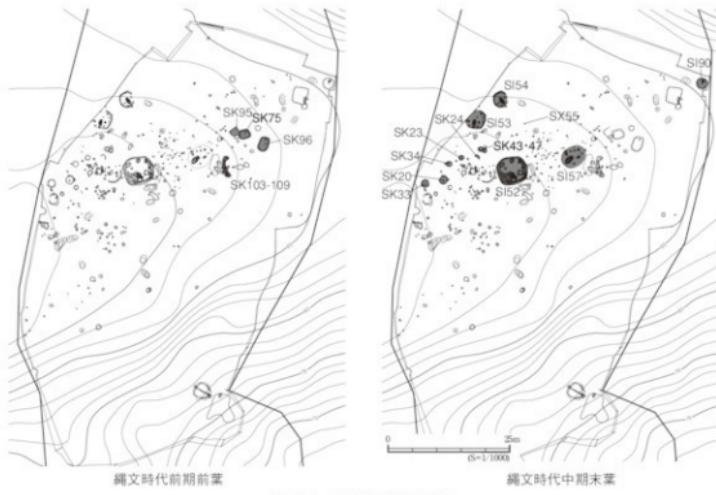
②各時期の遺構

土器の分類に基づいて、ここでは多く出土している前期前葉と中期末葉の遺構の時期や性格などを検討する（第56図）。

〔前期前葉〕

前期前葉の土器がまとまって出土している遺構としては、SK20、SK33、SK75、SK95、SK103~109土坑がある。このうちSK20とSK33には中期の土器も含まれるため、この時期の遺構としては扱えない。

SK75、SK95は一辺2~3mの隅丸方形状で、底面が平坦である。SK96も類似する形態をもつ。SK75とSK96の底面でそれぞれピット1個が検出された。これらの遺構の類例として、山元町内では北経塚跡で早期末葉～前期初頭の竪穴住居跡が見つかっている（山元町教委2010）。規模・形態は



第56図 時期別遺構分布1

ほぼ同じだが、北経塚例では2本の主柱穴と多数の壁柱穴を伴う点で異なる。

隣接する福島県浜通り地方では、相馬市猪倉B遺跡（福島県教委1996）、段ノ原B遺跡（福島県教委1995）、柄葉町大谷上ノ原遺跡（福島県教委2002）などで同様の遺構が多数あり、出土土器の特徴もほぼ同じである。炉の有無や柱穴の配置などさまざまなパターンがあるが、基本的に竪穴住居跡として報告されており、季節的な生業活動のために構築された作業小屋もしくは簡易な宿泊施設のような性格を持つものが想定されている。あくまで推測の域を出ないものであるが、本遺跡についても住居跡の可能性を指摘しておきたい。

SK103~109は不整形の土坑群の集まりで、堆積土から前期前葉の土器や石器が多く出土し、焼土が混ざるなど搅乱の堆積土とも異なる。SK75・95・96土坑などが近くに位置することからも、同時期の関連する遺構と考えられる。類例はあまり報告されていないが、調査区のなかでも粘性の強い地山が露出していることから、粘土採掘の場などが想定される。

以上のように、前期前葉の遺構は調査区の中央付近にまとまって分布するが、これ以外にもSI52竪穴住居跡堆積土や基本層Ⅲ層などから土器片が多く出土しており、遺跡全体を活動の場としていたことがうかがえる。

〔中期後葉～末葉〕

〈竪穴住居跡〉

6軒（SI52A、SI52B、SI53、SI54、SI57、SI90）が該当する。埋設土器や床面の土器からおおよそ大木10式古段階後半に位置づけられるが、先述したようにSI52A住居跡のみ、炉の出土土器はそれよりもやや古いと考えられる。

各住居跡の特徴を第2表にまとめた。住居のサイズは最大径2.3m~6.2m、主柱穴は2~5個（SI90は検出されず）と多様性に富むが、複式炉を跨ぐように主柱穴が2個ある点は共通する。

複式炉は基本的に前庭部-石組部-土器埋設部に分けられ、東北地方南部によくみられる「上原型複式炉」（丹羽1974）と呼ばれるタイプに属する。SI52~57住居跡は、住居南東～南西辺から中央に向けてつくられ、SI90住居跡では北辺から中央に向けてつくられる。前庭部壁際にピットをもつものは、SI52B・53・57住居跡で確認された。このうち52Bのピットは前庭部石壇の下にあって機能的には埋まっていたことが明らかである。

石壇や石敷に使用された礫は、ほとんどが地山（IV層）に混じっている花崗岩・砂岩などの角礫で、扁平な面を床や壁としている。SI52B住居跡の炉には90点余りの礫が用いられているが、花崗岩が約75%、砂岩が約25%を占める。砂岩は被熱した面の赤変が顕著である。

第2表 複式炉を伴う住居跡一覧表

住居跡	最大径	主柱穴	炉の方向	炉の規格		縦敷設			埋設土器	備考
				長軸（前：右：土）	短軸	前庭部	石組部	土器埋設部		
SI52B	6.2m	3	N-14°-W	2.1m (9.7:5)	1.2m	石壇	石敷+石壇	石敷+石壇	深鉢（上下欠く）	3期の変遷あり
SI52A	5~6m	3~5	N-40°-E	1.5m (6.9:0)	1.0m	無壁のみ?	石壇?	石敷?	?	無設土器件がない可能性あり
SI53	4.0m	4°	N-10°-E	1.8m (7.7:4)	0.7m	無壁のみ?	石壇	石壇	深鉢（下部欠く）	
SI54	3.0m	2	N-42°-W	1.3m (0.9:4)	0.7m	石壇	石壇	石壇	深鉢（下部欠く）	前庭部不明確
SI57	?	3	N-50°-E	1.9m (6.8:5)	1.0m	石壇	石壇	石敷+石壇?	深鉢（残存悪い）	
SI90	2.3m	なし	S-26°-W	1.1m (4.4:3)	0.4m	なし	なし	なし	鉢（底部穿孔）	礫を用いず織り込みのみ

埋設土器は主軸線上に1個体のみで、体下部～底部を欠くか底部穿孔を施しており、特に上半部の被熱が顕著である。SI53・54住居跡の埋設土器は、器壺の変色から通常の煮炊きに使用した後に転用されたと考えられる。

炉の形態は、SI52A住居跡以外は、「円形の土器埋設部+方形の石組部+方形の前庭部」の組み合わせが基本である。一方、52A住居跡の石組部は先端が窄まる形で、前庭部は壁際の周溝まで直線的に接続する点が異なる。県内南東部（亘理地方）においては比較できる調査例に乏しいが、南西部では蔵王町湯坂山B遺跡3A・3B号住居址（大木9式）→七ヶ宿町小梁川6号住居（大木10式前半）の例より、「ハ」字形に聞く前庭部から方形の前庭部へと変化することがうかがえる（相原2005）。また、福島県相馬地方でも飯館村上ノ台A遺跡などで同様の変化がみられる（井2005）。よって、52A住居跡は複式炉の形態からも古い様相をもつといえる。

以上のように、今回調査した住居群は比較的短期間に集約される特徴を示すが、最も規模の大きいSI52住居跡では4時期の変遷が確認され、炉の形態や出土土器からも、他の住居に比べて時間幅がある。また、最も規模の小さいSI90住居跡は、他の住居跡や土坑（次項参照）から離れて位置し、炉の方向も住居北壁に接続している点、石組を伴わない点などが異なり、今回調査した住居の中では特異な位置づけの住居といえる。

〈土坑〉

SI52堅穴住居跡の西側、SI53・54堅穴住居跡の南側にフランコ状の土坑群があり、形態から貯蔵穴と考えられる。SK23・24・34・43・47は出土土器の特徴から、住居跡と同じ大木10式古段階後半に位置づけられる。これより大型のSK20・33は前期の土器が多く出土しているが、堆積土上層から大木10式土器（31-3、32-1）が出土しており、下層にも中期と思われる土器（31-4、5）を含むことから、同じ時期と推定される。これらの土坑群は貯蔵穴として使用した後、廃棄場所として利用されたことがうかがえる。SK23・24・34・43・47は使用していた土器などが廃棄されたのに対し、SK20・33は前期の土器が多いことから土捨て場としての利用が考えられる。この他に、SK19・114もフランコ状の形態から貯蔵穴の可能性がある。いずれも分布は調査区の西部～北西部に偏在する。

〈その他の遺構〉

遺構の形態や堆積土の特徴から縄文時代と考えられる遺構に、SI58堅穴住居跡やSB71～74掘立柱建物跡があるが、遺物量が少ないとから詳細な時期は不明である。

縄文時代中期末葉の集落は、今回の調査区より西側にさらに展開していく可能性が高い。

③石器

今回の調査で出土した石器は、未報告の破片や搅乱出土、表採品を含めると、以下の通りである。

石鏃20点、尖頭器1点、石匙14点、石錐6点、楔形石器1点、不定形石器16点、範状石器14点、

打製石斧1点、磨製石斧5点、磨石・敲石・凹石13点、石皿1点、有溝砥石1点、石製装飾品1点

このうち、中期の遺構から出土した石器については、前期の土器も多く含んでいることから時期を限定するのは難しい。前期の遺構（SK75・95・96・103～109）から出土した石器は第48図および第

50図のものがある。

石匙は縦長の剥片を用い、正面は素材の面を残さないほど調整剥離が施されているのに対し、背面側は素材面を大きく残している。技法としては、剥片の背面右側邊に打面となる調整剥離を施し、その面を打点として正面に調整剥離を施す。このような石匙は縄文時代早期後葉～前期前葉の東日本に特徴的にみられ（秦1991）、今回の調査でも8-9、17-19、31-37、55-12など多数出土している。また、50-6のような有溝砥石は、福島市獅子内遺跡217号住居址（前期前葉、福島県教委1999）ほか、相馬地方の遺跡にも類例がみられる。32-22や50-5の不定形石器は、北経塚遺跡で多数報告されている「片刃礫器」に類似する（山元町教委2010）。北経塚遺跡では、籠状石器や打製石斧も多く出土しており、遺跡周辺で獲得可能な砂岩・泥岩が主に用いられている点など、本遺跡と共通する。一方で、北経塚遺跡では石匙・石鎌が少なく、時期差あるいは遺跡の性格の違いなどを反映していると考えられる。

（2）平安時代

①SI78出土土器の分類

SI78住居跡ではカマドおよび貯蔵穴埋土、堆積土中から土師器坏、甕が出土している。底部の切り離し技法が確認できる土師器坏は全て回転糸切り無調整であるとともに、組成のうち赤焼土器の占める割合が高い。これに類似した土器は、仙台市安久東遺跡第2号住居跡（宮城県教委1980b）などで出土している。また、仙台市中田畠中遺跡第2次調査1号・2号住居跡出土土器群（仙台市教委1985）は、ロクロを使用しない甕が伴う点で類似している。中田畠中遺跡第1号・2号住居跡は、堆積土中から10世紀前葉に降下した灰白色火山灰が検出されている（仙台市教委1985：p.51）。また安久東遺跡第2号住居跡では、10世紀前半～中頃と考えられる灰釉陶器（前川1989a・b）が堆積土から出土しており、この遺構では堆積土出土土器群と床面出土土器群の間には型式学的差異が認められないことから、土器群の上限年代は10世紀前半～中頃にあるものとみなされている。以上の事例より、SI78出土土器の年代は灰白色火山灰の降下に前後する10世紀前半に属するものと捉えておく。

②遺構の年代

SI78住居跡では、床面に構築された貯蔵穴の埋土およびカマド煙道から先述のような特徴を示す土器群が出土していることから、遺構の廃絶年代を10世紀前半とみることができる。調査範囲内からは他にSK11土坑、SX1埋設土器、SX60遺物包含層から同様の特



第57図 時期別遺構分布2

徴を示す土器群が出土しているほか、細かな破片のため図化できなかったものの、SB113建物跡からも複数個体の土師器壺が出土している。SX60は、堆積土がSI78住居跡1層と類似していることから、削平を受けた堅穴住居跡であった可能性がある。これらを全て同時期のものと仮定した場合、本遺跡の調査区内には10世紀前半に堅穴住居2軒、掘立柱建物1棟が同時に存在した可能性が考えられる。

③その他の遺物

SI78住居跡カマド堆積土から、薄手で粘土紐輪積み痕と成型時の指頭圧痕を明瞭に残す土師器が2点出土している。口縁部は薄く、やや内湾する。底部は大きく欠損しているものの、体部への立ち上がりがいすれの個体も鋭角をなしている点に特徴がある。こうした土器の類例は、七ヶ浜町水浜遺跡（七ヶ浜町教委1992）、山元町狐塚遺跡第2号木炭窯跡（山元町教委1995）で出土しており、製塩土器とみなされている。

（3）古代以降

時期は明らかでないが、焼成土坑6基（SK26～29・82・88）および炭窯跡1基がある。このうち炭窯跡は形態から近世以降と推定される。焼成土坑は、SK27より古い土坑から土師器片が出ていることから古代もしくはそれより新しいものと考えられる。用途としては簡易的な炭焼き穴が想定され、SX60付近から鉄滓が出土していることから、古代に丘陵上で鍛冶が行われた可能性がある。

（4）まとめ

- ・西石山原遺跡では、丘陵上で主に縄文時代前期、中期および平安時代の遺構・遺物が確認された。
- ・縄文時代前期の土器は特徴から前期前葉に位置づけられ、石器にも前期の特徴が認められた。遺構は土坑10基が確認され、一部の土坑は住居跡の可能性がある。
- ・縄文時代中期には堅穴住居跡5軒、土坑（貯藏穴）7基などが確認され、出土遺物から主に中期末葉大木10式に位置づけられる。住居跡は複式炉を伴い、規模に多様性がみられる。最も大きいSI52住居跡では4期の変遷が確認された。
- ・平安時代のSI78堅穴住居跡は、出土土器の特徴から10世紀前半に位置づけられ、その他にも住居跡や掘立柱建物跡の同時存在が推定される。遺物は、土師器壺、赤焼土器壺、台付皿のほか、製塩土器とみられる特殊な形態の土器が出土した。
- ・各時期の遺構とも大きな時期幅が見られないため、比較的短期間の集落の様相をよく表している。特に縄文時代中期の集落は、宮城県沿岸南部（亘理地方）ではほとんど調査例がなく貴重である。
- ・今回の調査で複式炉から出土した炭化物の年代測定は、今後の常磐道関連遺跡の報告書に掲載する予定である。



1. 遺跡遠景（北から）



2. 調査区全景（右が北）

写真図版 1 西石山原遺跡全景



1. SI52B 積穴住居跡床面検出状況（南から）



2. SI52B 複式炉（南から）



3. SI52B 複式炉 埋設土器内堆積状況（東から）



4. SI52B 複式炉 土器埋設部底面（南から）

写真図版2 SI52 積穴住居跡 (1)



1. SI52B 複式炉 堆積状況（東から）



2. SI52B 複式炉 断ち割り（東から）



3. SI52B P1 断面（東から）



4. SI52B P2 断面（北から）



5. SI52B P3 断面（西から）



6. SI52B P7 断面（東から）



7. SI52B 1～3 期周溝断面（西から）

写真図版3 SI52 穴穴住居跡(2)



1. SI52B P5 断面（北から）



2. SI52B 3期北辺周溝断面（西から）



3. SI52B 3期完掘状況（南から）



4. SI52A 炉断面（東から）



5. SI52A P4 断面（北から）



6. SI52A P11 断面（北から）



7. SI52A 完掘（南から）

写真図版 4 SI52 竪穴住居跡 (3)



1. S153 穫穴住居跡 床面検出状況 (南から)



2. S153 複式炉 南北断ち割り (東から)



3. S153 複式炉 土器埋設部 (西から)



4. S153 P1断面 (東から)



5. S153 P3断面 (北から)

写真図版 5 S153 穫穴住居跡



1. SI54 竪穴住居跡 床面検出状況（東から）



2. SI54 複式炉 東西断ち割り（北から）



3. SI54 P1断面（南から）



4. SI54 P2断面（東から）



5. SI54 竪穴住居跡 実掘（東から）

写真図版 6 SI54 竪穴住居跡



1. SI57 積穴住居跡（南から）



2. SI57 P3 周面（南から）



3. SI57 炉前底部ピット（西から）



4. SI57 複式炉 残出状況（南から）



5. SI90 積穴住居跡 完掘（北から）



6. SI90 複式炉 堆積状況（西から）

写真図版 7 SI57・SI90 積穴住居跡



1. SI78 窓穴住居跡（西から）



2. SI78 カマド 遺物出土状況（西から）



3. 掘立柱建物跡および窓穴住居跡の配置（上が北）

写真図版 8 SI78 窓穴住居跡、掘立柱建物跡の配置



写真図版9 振立柱建物跡 柱穴 断面



1. SK20 土坑断面（北西から）



2. SK20 土坑完掘（南から）



3. SK23 土坑断面（南西から）



4. SK24 土坑断面（東から）



5. SK33 土坑断面（南から）



6. SK33 土坑完掘（南西から）



7. SK34 土坑断面（西から）



8. SK43 土坑断面（南から）

写真図版 10 土坑(1)



1. SK26 土坑断面（南から）



2. SK27 土坑断面（北東から）



3. SK28 土坑断面（北西から）



4. SK29 土坑断面（南から）



5. SK75 土坑断面（北東から）



6. SK96 土坑焼土層検出状況（西から）



7. SK104 土坑磨製石斧出土状況（北東から）



8. SK103 ~ 108 土坑完掘（東から）

写真図版 11 土坑 (2)



1. SX1 土器埋設遺構（南から）



2. SX55 土器埋設遺構断面（南から）



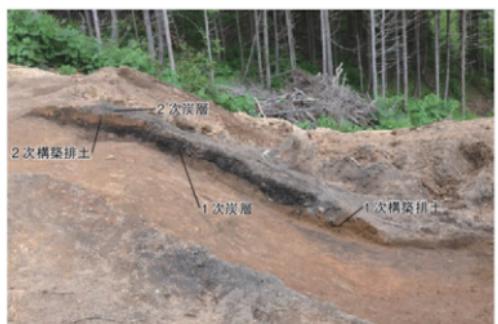
3. SR66 炭窯跡完掘（東から）



4. SR66 壁面（南東から）



5. SR66 煙道断ち割り（東から）



6. SR66 灰原断面（西から）

写真図版 12 SX1・SX55 土器埋設遺構、SR66 炭窯跡



写真図版 13 SI52 壁穴住居跡出土遺物 (1)



写真図版 14 SI52 穫穴住居跡出土遺物 (2)

(1 ~ 20・37・38 : S=1/3)
(21 ~ 36 : S=2/3)

(SI53 壺穴住居跡)



(SI54 壺穴住居跡)



8



9



10



11



7

(6 : S=2/3)
(1 ~ 5・7 ~ 15 : S=1/3)



11



12



13



15

写真図版 15 SI53・SI54 壺穴住居跡出土遺物

〈SI54 壁穴住居跡〉



1



2



3



〈SI57 壁穴住居跡〉



4



5



6



7



8



9



11



12



13



14



15



16



17



18



19



20



21



22

〈SI90 壁穴住居跡〉



23



24



25



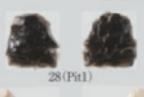
26(SB71-P5)



27(Pit48)



29(Pit110)



28(Pit1)



30(SB71-P2)



31(SB113-P8)
図掲載なし

(1・2・4～20・23・25～27:S=1/3)
(3・21・22・24～28～31:S=2/3)

写真図版 16 SI54・SI57・SI90 壁穴住居跡・Pit 出土遺物



写真図版 17 SK3・SK4・SK6・SK9・SK10・SK16・SK20 出土遺物



写真図版 18 SK21-SK23-SK24-SK25-SK34 出土遺物

(SK33)



(SK39)



写真図版 19 SK33・SK37・SK38・SK39・SK41・SK42 出土遺物

(SK37)



(SK38)



(SK41)



(SK42)



(1 ~ 19・23 ~ 38 : S=1/3)

(20 ~ 22 : S=2/3)

(SK43)



1



2



3



4



5



6



7

(SK47)



8



9



10



11



12



13

(SK45)



14



15



16

(SK61)



19

(1 ~ 7 : S=1/4)

(2 ~ 6 ~ 8 ~ 15 ~ 17 ~ 19 : S=1/3)

(16 ~ 18 : S=2/3)

(SX55)



17



18

写真図版 20 SK43-SK45-SK47-SX55-SK61 出土遺物

(SK75)



(SK103 ~ 109)



(14 ~ 17・33・34 : S=2/3)

(35 ~ 38 : S=1/2)

(1 ~ 13・18 ~ 32・39 : S=1/3)

写真図版 21 SK75・SK103～109 出土遺物

(SK96)



(4 ~ 9 + 16 ~ 24 : S=1/3)

(14 ~ 15 : S=1/2)

(1 ~ 3 + 10 ~ 13 + 25 ~ 29 : S=2/3)

III層



G構確認時



写真図版 22 SK96・Ⅲ層・遺構確認時出土遺物



写真図版 23 遺構確認時・南斜面・擾乱出土および表面採集遺物

*は図掲載なし



写真図版 24 古代の出土遺物

さん のう い せき
山 王 B 遺 跡

調査要項

遺跡名：山王B遺跡（宮城県遺跡地名表記載番号：14082）

所在地：宮城県亘理郡山元町浅生原字山王

調査原因：常磐自動車道建設事業

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

平成22年度 = 千葉直樹、山口 淳、大沼真人

平成23年度 = 初鹿野博之、大沼真人、大坂 拓

調査期間：平成22年5月10日から6月21日、11月25日

平成24年2月8日から2月9日

調査対象面積：約4,500m²

調査面積：約2,100m²（隣接地を含む）

調査協力：東日本高速道路株式会社東北支社、山元町教育委員会

1. 調査の概要

山王B遺跡は、山寺川右岸に形成された標高45m前後の緩斜面に立地し、東側に標高50～55mの南北に長い小丘陵があるが、遺跡と丘陵の間は湿地で隔てられている。平成22年度は、遺跡範囲東半部の計画路線内に調査区を設定したほか、周辺にトレンチ7箇所を設定して調査を実施した（第1図）。

調査の結果、調査区内では北東部を中心に掘立柱建物跡10棟、溝跡1条、土坑8基、性格不明遺構1基、ピットを検出した（第2図）。また、遺物は縄文土器、磁器、金属製品、古銭がそれぞれ少量出土した（第4図、写真図版4）。調査区の南西部は表土を除去した段階で、近代以降の切土・盛土による搅乱の影響で地形が改変されていることが明らかになり、遺構・遺物はまったく検出されなかつた。

調査区南北に設定したトレンチのうち、南側の1、2トレンチでは表土を除去中に大量の碎石が現れ、碎石を除去するとただちに地山が検出されることから、大規模な地形の改変を被っていることが判明した。北東側に設定した3～5トレンチでは、表土・盛土直下から礫を多く含む粘土層の地山が現れた。6、7トレンチでは、宅地造成時に厚く盛土されており、本来は北側へ向かって急に下がる地形であることが分かった。1～7トレンチのいずれからも、遺構・遺物は検出されなかったため、図面の作成、写真による記録、埋め戻し作業を行い、調査を終了した。

平成23年度には、遺跡の南端部分に8～11トレンチを設定して調査を行ったが、遺構・遺物は検出されず、盛土の下は湿地性の堆積層が東側に向けて厚くなっていることが確認された。



第1図 遺跡の範囲と調査区の位置

2. 発見した遺構と遺物

(1) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡を建て替えも含め10棟検出した。SB8は南北棟、それ以外は東西棟である。

【SB8掘立柱建物跡】(第3図)

〔位置〕調査区のほぼ中央、SB9建物跡の東隣に位置する。

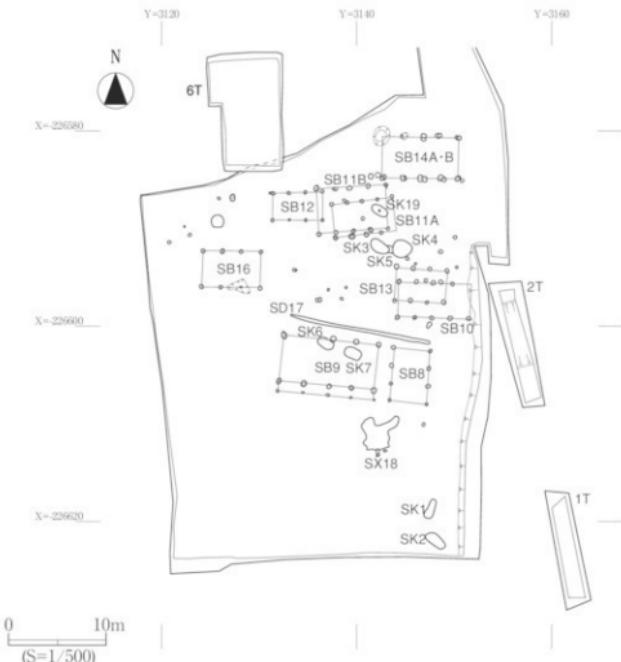
〔重複〕なし。

〔規模・構造〕南北3間・東西1間の南北棟である。平面規模は、桁行が西側柱列で総長約5.4m、柱間寸法は北から1.8m等間である。梁行は北妻で総長約3.6mである。

〔方向〕西側柱列で測ると北でN 5° -Eである。

〔柱穴〕8個検出し、そのうち7個で柱痕跡を確認した。長径32~52cm、短径30~40cmの梢円形もしくは円形を呈し、残存する深さは10~59cmで、柱痕跡は直径13~21cmである。また、そのうちP6で柱抜取穴を確認した。

〔遺物〕出土していない。



第2図 遺構配置図

【SB9掘立柱建物跡】(第3図)

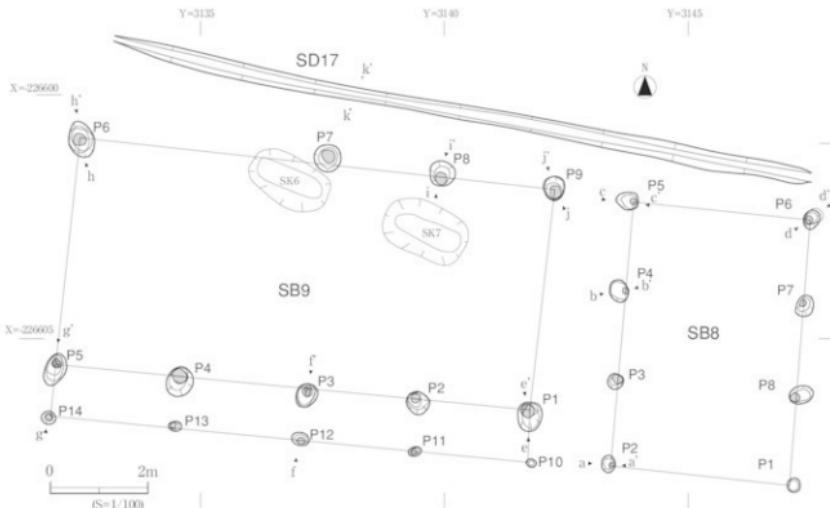
〔位置〕 調査区のほぼ中央に位置する。

〔重複〕 SK6、SK7土坑と位置的に重複するが、新旧関係は不明である。

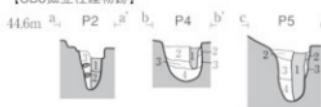
〔規模・構造〕 東西4間・南北1間の身舎で、南面に東西4間の庇が付く東西棟である。平面規模は桁行が南側柱列で総長約9.8m、柱間寸法は西から2.6m・2.6m・2.2m・2.4mである。梁行は西妻で総長約5.7m、柱間寸法は約4.6mで、身舎と庇との距離は約1.1mである。

〔方向〕 西側柱列で測ると、北でN 5° ・Eである。

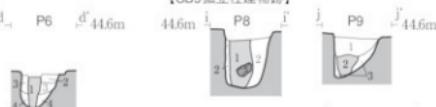
〔柱穴〕 身舎では南側で5個、北側で4個の計9個検出し、そのすべてで柱痕跡を確認した。長径49~78cm、短径44~58cmの梢円形もしくは円形を呈し、残存する深さは47~78cmである。柱痕跡は



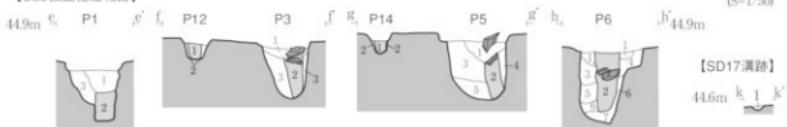
【SB8掘立柱建物跡】



【SB9掘立柱建物跡】

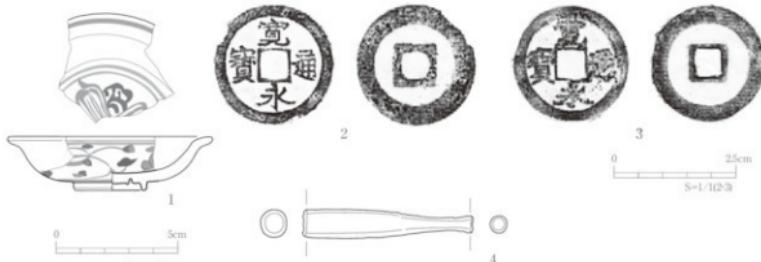


【SB9掘立柱建物跡】



第3図 SB8・SB9掘立柱建物跡、SD17溝跡

遺構名	解序	土色	土性	特徴	性格
SB8	1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒～地山ブロックをわずかに含む	柱痕跡
	2	黒褐色 (10YR3/1)	シルト		柱痕跡
	3	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山ブロックを含む	柱穴埋土
P4	1	黒褐色 (10YR3/1)	シルト		柱痕跡
	2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山ブロック、礫を含む	柱穴埋土
	3	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	地山ブロックを少し含む	柱穴埋土
	4	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山ブロックを含む	柱穴埋土
P5	1	黒褐色 (10YR3/1)	シルト		柱痕跡
	2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山ブロックを含む、小礫をわずかに含む	柱穴埋土
	3	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	地山ブロックを少し含む	柱穴埋土
	4	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山ブロックを含む	柱穴埋土
P6	1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト		柱痕跡
	2	褐色 (10YR4/6)	粘質シルト	地山ブロック主体	柱切取穴
	3	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	地山小ブロックを少し含む	柱穴埋土
	4	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山小ブロックを含む	柱穴埋土
P1	1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒～地山ブロックを多く含む	柱抜取穴
	2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒を少し含む	柱痕跡
	3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒～地山大ブロックを含む	柱穴埋土
P3	1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山ブロック主体	柱抜取穴
	2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山小ブロック～地山ブロックを含む	柱痕跡
	3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山ブロックを含む	柱穴埋土
	4	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山ブロック主体	柱抜取穴
	5	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山小ブロックを含む	柱痕跡
	6	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山小ブロックを含む	柱穴埋土
P5	1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山ブロック～地山大ブロックを含む	柱抜取穴
	2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山小ブロック～地山大ブロックを多く含む	柱痕跡
	3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山小ブロック～地山大ブロックを多く含む	柱穴埋土
	4	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山小ブロックを少し含む	柱穴埋土
	5	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山ブロック主体	柱穴埋土
	6	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山小ブロックを含む	柱痕跡
P6	1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山ブロック～地山大ブロックを非常に多く含む	柱抜取穴
	2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山ブロックを糸状に含む	柱痕跡
	3	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	地山ブロック主体	柱穴埋土
P8	4	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山小ブロックを少し含む	柱穴埋土
	5	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	地山粒をわずかに含む	柱穴埋土
	6	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒を多く含む	柱穴埋土
	7	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒を非常に多く含む	柱穴埋土
	8	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒～地山小ブロックを少し含む	柱痕跡
	9	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山ブロック～地山大ブロックを多く含む	柱穴埋土
P9	1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒をわずかに含む	柱抜取穴
	2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒～地山小ブロックを含む	柱痕跡
	3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒～地山小ブロックを非常に多く含む	柱穴埋土
P12	1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒を含む	柱痕跡
	2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山小ブロックを少し含む	柱穴埋土
P14	1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山小ブロックを含む	柱痕跡
	2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒～地山小ブロックを含む	柱穴埋土
SD17	1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト		自然堆积



図番号	遺構・期	器種	特徴	写真	登録番号
4-1	SB9-P3(柱痕跡)	磁器・碗	[口径]8.0cm、[底径]2.8cm、[厚さ]2.2cm、蓋付(花文様)、中国産(明か)	4-9	Pol
4-2	SB12-P6(柱穴埋土)	古銭	寛永通寶(古銭水)、外径25mm、重量1.9g	4-11	Fe1
4-3	SB12-P6(柱穴埋土)	古銭	寛永通寶(古銭水)、外径24mm、重量2.4g	4-12	Fe2
4-4	表土	鍍金・吸口	全長70mm、鍍金口径10mm、吸口径5mm	4-13	Fe3

第4図 出土遺物

直径19~33cmである。うち7カ所で柱抜取穴を確認した。なお、北西隅柱の東側1.2~1.3m付近を精査したが、柱穴は確認できなかった。庇とみられる柱穴は5個検出し、そのうち4個で柱痕跡を確認した。長径23~39cm、短径19~29cmの梢円形もしくは円形を呈し、残存する深さは6~24cmである。柱痕跡は直径12~16cmである。

〔遺物〕 柱穴（P3）の柱痕跡より、磁器（碗）が1点出土した。（第4図1）

【SB10掘立柱建物跡】（第5図）

〔位置〕 調査区東側中央、SB8建物跡の北側に位置する。

〔重複〕 SB13建物跡と位置的に重複するが、新旧関係は不明である。

〔規模・構造〕 東西4間・南北1間の東西棟である。平面規模は桁行が南側柱列で総長約7.4m、柱間寸法は西から1.8m・1.7m・1.9m・2.0mである。梁行は西妻で総長約3.5mである。

〔方向〕 西側柱列で測ると、北でN 2° ・Eである。

〔柱穴〕 9個検出し、そのうち8個で柱痕跡を確認した。北東隅柱は擾乱により確認できない。長径32~50cm、短径28~44cmの梢円形を呈するものが多く、残存する深さは24~62cmである。柱痕跡は直径13~26cmである。また、そのうち3カ所で柱抜取穴を確認した。

〔遺物〕 出土していない。

【SB11A掘立柱建物跡】（第6図）

〔位置〕 調査区北側中央よりやや東寄り、SB12建物跡の東側に位置する。

〔重複〕 SB11B建物跡と位置的に重複するが、新旧関係は不明である。

〔規模・構造〕 東西4間・南北1間の東西棟である。平面規模は桁行が北側柱列で総長約6.4m、柱間寸法は西から1.7m・1.5m・1.6m・1.6mである。梁行は西妻で総長約3.4mである。

〔方向〕 西側柱列で測ると、北でN 7° ・Wである。

〔柱穴〕 9個検出し、そのすべてで柱痕跡を確認した。長径35~53cm、短径31~45cmの隅丸長方形もしくは梢円形を呈し、残存する深さは28~47cmである。柱痕跡は直径16~22cmである。また、そのうち3カ所で柱抜取穴を確認した。

〔遺物〕 出土していない。

【SB11B掘立柱建物跡】（第6図）

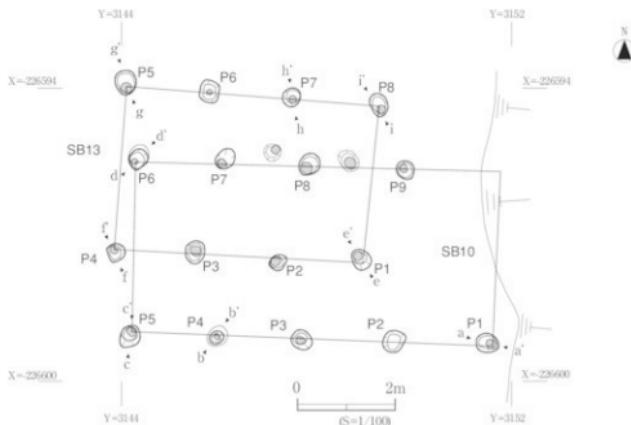
〔位置〕 調査区北側中央よりやや東寄り、SB12建物跡の東側に位置する。

〔重複〕 SB11A、SB12建物跡と位置的に重複するが、新旧関係は不明である。

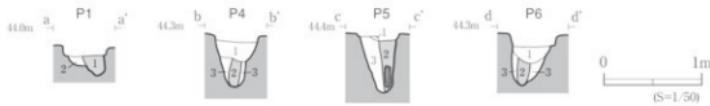
〔規模・構造〕 東西4間・南北1間の東西棟である。平面規模は桁行が南側柱列で総長約7.2m、柱間寸法は1.8m等間である。梁行は西妻で総長約4.5mである。

〔方向〕 西側柱列で測ると、北でN 5° ・Wである。

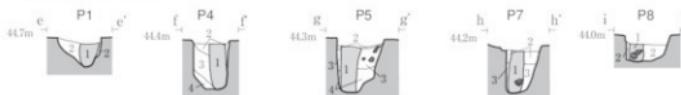
〔柱穴〕 10個検出し、そのうち9個で柱痕跡を確認した。長径36~63cm、短径31~52cmの梢円形も



【SB10掘立柱建物跡】



【SB13掘立柱建物跡】



遺構名	層序	土色	土性	特徴	性格	
SB10	1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒を少し含む	柱痕跡	
	2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山小プロック～地山プロックを多く含む	柱穴埋土	
	3	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒をプロック～地山小プロックを少し含む	柱抜取穴	
P4	1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒を少し含む	柱痕跡	
	2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒を少しある	柱穴埋土	
	3	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山プロックを部分的に含む	柱穴埋土	
P5	1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒～地山大プロックを多く含む	柱抜取穴	
	2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒を少し含む	柱痕跡	
	3	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒～地山小プロックを含む	柱穴埋土	
P6	1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒を少しある	柱抜取穴	
	2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒を少し含む	柱痕跡	
	3	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒～地山プロックを含む	柱穴埋土	
SB13	P1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒～地山プロックを含む	柱痕跡	
	2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒をわずかに含む	柱穴埋土	
	P4	1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒～地山小プロックを含む	柱痕跡
	2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒～地山小プロックを多く含む	柱穴埋土	
	3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒をわずかに含む	柱穴埋土	
	4	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒～地山小プロックを含む	柱痕跡	
	P5	1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒～地山小プロックを含む	柱穴埋土
	2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒～地山小プロックを少し含む	柱穴埋土	
P7	3	褐色 (10YR4/4)	粘質シルト	地山粒を含む	柱痕跡	
	4	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒を多く含む	柱穴埋土	
	1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒～地山小プロックを含む	柱痕跡	
	2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒～地山プロックを非常に多く含む	柱穴埋土	
P8	3	褐色 (10YR4/4)	粘質シルト	地山粒を含む	柱痕跡	
	1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒～地山小プロックを少し含む	柱穴埋土	
	2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山小プロック～地山大プロックを多く含む	柱穴埋土	

第5図 SB10、SB13建物跡平面図・断面図

しくは隅丸長方形を呈し、残存する深さは25~60cmである。柱痕跡は直径13~28cmである。また、そのうち4カ所で柱抜取穴を確認した。

〔遺物〕出土していない。

【SB12掘立柱建物跡】（第6図）

〔位置〕I区北側中央やや西寄り、SB11建物跡の西側に位置する。

〔重複〕SB11B建物跡と位置的に重複するが、新旧関係は不明である。

〔規模・構造〕東西3間・南北1間の東西棟である。平面規模は桁行が南側柱列で総長約5.1m、柱間寸法は西から1.7m等間、梁行は西妻で総長約2.7mである。

〔方向〕ほぼ東西方向である。

〔柱穴〕8個確認し、そのうち4個で柱痕跡を確認した。削平により全体的に残存状況はよくない。長径28~41cm、短径21~35cmの楕円形を呈し、残存する深さは約10~22cmである。柱痕跡は12~17cmで、堆積土は地山粒をわずかに含む黒褐色シルトである。

〔遺物〕柱穴（P6）の柱穴埋土から寛永通寶が2点（第4図2・3）出土した。

【SB13掘立柱建物跡】（第5図）

〔位置〕I区東側中央やや北寄り、SB8建物跡の西側に位置する。

〔重複〕SB10建物跡と位置的に重複するが、新旧関係は不明である。

〔規模・構造〕東西3間・南北1間の東西棟である。平面規模は桁行が南側柱列で総長約5.1m、柱間寸法は1.7m等間である。梁行は西妻で総長約3.3mである。

〔方向〕西側柱列で測ると、北でN4°・Eである。

〔柱穴〕8個検出し、そのすべてで柱痕跡を確認した。長径37~52cm、短径32~45cmの楕円形や隅丸形を呈するものが多く、残存する深さは24~72cmである。柱痕跡は直径13~24cmである。

〔遺物〕出土していない。

【SB14A・14B掘立柱建物跡】（第7図）

〔位置〕調査区北側東寄りに位置する。

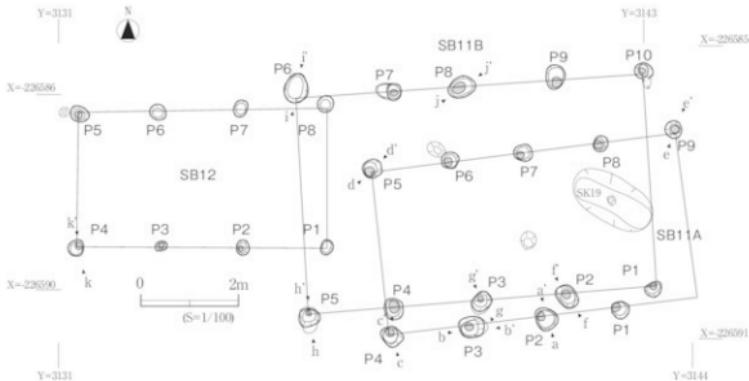
〔重複〕ほぼ同位置での建て替えが認められる。

〔規模・構造〕東西4間・南北1間の東西棟である。平面規模は桁行が南側柱列で総長約7.8m、柱間寸法は西から2.1m・1.9m・2.1m・1.7m、梁行は東妻で総長約4.1mである。

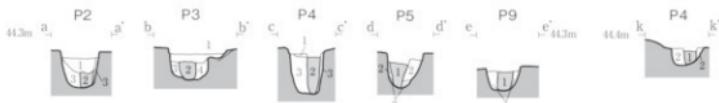
〔方向〕ほぼ東西方向である。

〔柱穴〕8個検出し、そのうち7個で柱痕跡を確認した。長径47~72cm、短径44~55cmの楕円形もしくは隅丸長方形を呈し、残存する深さは26~60cmである。柱痕跡は直径17~29cmである。

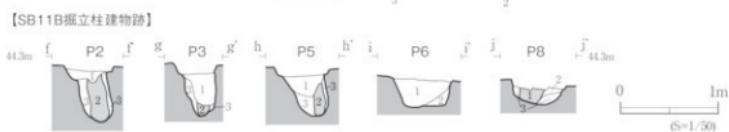
〔遺物〕出土していない。



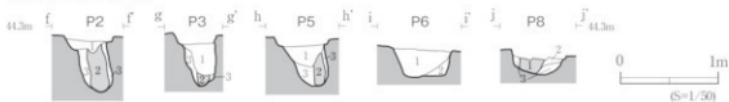
【SB11A掘立柱建物跡】



【SB12掘立柱建物跡】

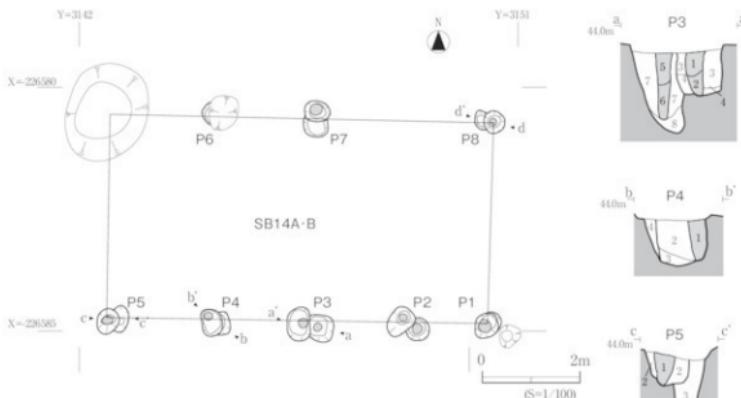


【SB11B掘立柱建物跡】

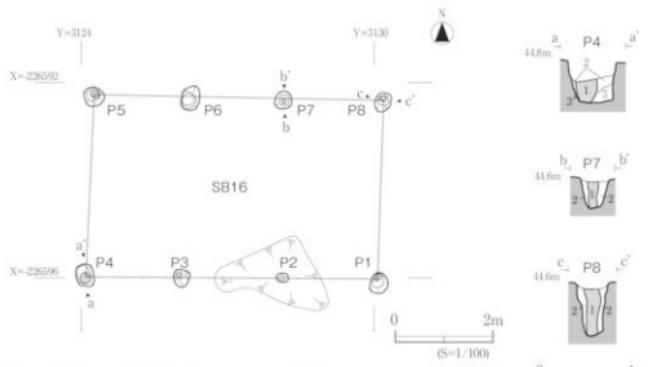


遺構名	列序	土色	土性	特徴	性格
SB11A	1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	地山較～地山ブロックを含む	柱抜取穴
	2	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山較～地山ブロックを多く含む	柱痕跡
	3	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	地山大ブロックを非常に多く含む	柱穴埋土
SB11B	1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	地山較～地山ブロックを含む	柱抜取穴
	2	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	地山大ブロックを非常に多く含む	柱痕跡
	3	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	地山較～地山ブロックを含む	柱穴埋土
SB11B	1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	地山較～地山ブロックを含む	柱抜取穴
	2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	地山較～地山ブロックを含む	柱痕跡
	3	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	地山較～地山ブロックを含む	柱穴埋土
SB11B	1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	地山較～地山大ブロックを非常に多く含む	柱抜取穴
	2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	地山較～地山小ブロックをわずかに含む	柱痕跡
	3	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	地山較～地山大ブロックを部分的に含む	柱穴埋土
SB11B	1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	地山大ブロックを多く含む	柱抜取穴
	2	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	地山大ブロックを少し含む	柱痕跡
	3	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	地山較～地山大ブロックを多く含む	柱穴埋土
SB12	1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	地山大ブロックを含む	柱痕跡
	2	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	地山較～地山ブロックを含む	柱穴埋土

第6図 SB11・SB12掘立柱建物跡



遺構名	層序	土色	土性	特徴	性格
P3	1	暗褐色 (10YR3-3)	シルト	地山ブロックを部分的に含む	柱状路
	2	暗褐色 (10YR3-3)	シルト	地山斜～地山小ブロックを少し含む	柱状路
	3	暗褐色 (10YR3-4)	シルト	地山小ブロック～地山大ブロック主体	柱穴理土
	4	暗褐色 (10YR3-3)	シルト	地山斜を少し含む	柱穴理土
	5	暗褐色 (10YR3-3)	シルト	地山小ブロックを少し含む	古い柱状路
	6	暗褐色 (10YR3-3)	シルト	地山斜をわずかに含む	古い柱状路
	7	黒褐色 (10YR2-3)	シルト	地山小ブロック～地山大ブロックを含む	古い柱穴理土
	8	黒褐色 (10YR2-3)	シルト	地山斜を少し含む	古い柱穴理土
SB14	1	黒褐色 (10YR2-3)	シルト	地山斜を少し含む	柱状路
	2	暗褐色 (10YR3-3)	シルト	地山斜～地山ブロックを屢々に多く含む	柱穴理土
	3	黒褐色 (10YR2-3)	シルト	地山斜～地山小ブロック主体	柱穴理土
	4	黒褐色 (10YR2-3)	シルト	地山斜～地山小ブロックを少し含む	柱状路
P4	1	暗褐色 (10YR3-3)	シルト	地山斜～地山小ブロックを少し含む	柱穴理土
	2	暗褐色 (10YR3-3)	シルト	地山斜を少し含む	柱穴理土
	3	黒褐色 (10YR2-3)	シルト	地山斜～地山小ブロックを少し含む	柱状路
P5	1	暗褐色 (10YR3-3)	シルト	地山斜を少し含む	柱穴理土
	2	暗褐色 (10YR3-3)	シルト	地山斜～地山小ブロックを少し含む	柱穴理土
P8	1	黒褐色 (10YR2-3)	シルト	地山斜を少し含む	柱状路
	2	暗褐色 (10YR3-3)	シルト	地山小ブロック～地山ブロックを含む	柱穴理土



遺構名	層序	土色	土性	特徴	性格
P4	1	黒褐色 (10YR2-2)	シルト	地山斜をわずかに含む	柱状路
	2	黒褐色 (10YR2-3)	シルト	地山斜～地山ブロックを非常に多く含む	柱穴理土
P7	1	黒褐色 (10YR2-3)	シルト	地山斜～地山ブロックを多く含む	柱状路
	2	黒褐色 (10YR2-3)	シルト	地山斜～地山小ブロックを含む	柱穴理土
P8	1	暗褐色 (10YR3-3)	シルト	地山ブロック～地山大ブロックを多く含む	柱状路
	2	暗褐色 (10YR3-3)	シルト	地山小ブロック～地山ブロックを含む	柱穴理土

第7図 SB14・SB16掘立柱建物跡

【SB16掘立柱建物跡】（第7図）

〔位置〕 I 区北西部に位置する。

〔重複〕 なし。

〔規模・構造〕 東西3間・南北1間の東西棟である。平面規模は桁行が北側柱列で総長約6.0m、柱間寸法は2.0m等間である。梁行は西妻で総長約3.7mである。

〔方向〕 ほぼ東西方向である。

〔柱穴〕 8個検出し、そのうち6個で柱痕跡を確認した。長径27~55cm、短径34~41cmの楕円形を呈し、残存する深さは30~58cmである。柱痕跡は直径11~23cmである。また、そのうちP6で柱抜取穴を確認した。

〔遺物〕 出土していない。

(2) 溝跡

【SD17溝跡】（第3図）

〔位置〕 調査区中央、SB8建物跡、SB9建物跡の北側に位置する。

〔重複〕 なし。

〔規模・断面形〕 検出長約15.0m、上幅22~32cm、下幅7~24cm、残存する深さ8cmで断面形は皿状。

〔方向〕 東西方向でみるとW-11°-Nである。

〔堆積土〕 暗褐色シルトが自然堆積している。

〔遺物〕 出土していない。

(3) 土坑

8基検出した。断面形が箱形で深いものと皿状で浅いものがある。以下主なものについて説明する。

【SK2土坑】（第8図）

〔位置〕 I 区南東隅、SK1土坑の南東に位置する。

〔重複〕 なし。

〔規模・形状〕 平面規模は長径235cm、短径110cmの不整な楕円形を呈し、検出面からの深さは39cmである。

〔壁・底面〕 底面は凹凸がある。底面から壁が緩やかに立ち上がり、断面形は皿状である。

〔遺物〕 2層より縄文土器片1点（写真図版4-8）が出土した。

【SK6土坑】（第8図）

〔位置〕 I 区中央やや北寄り、SD17溝跡の南、SK7土坑の西に位置する。

〔重複〕 SB9建物跡と位置が重複する。切り合いがなく新旧関係は不明である。

〔規模・形状〕 平面規模は長径169cm、短径100cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは86cmである。

〔壁・底面〕底面はほぼ平坦である。底面から壁が急に立ち上がり、断面形は箱形である。

〔遺物〕出土していない。

【SK7土坑】(第8図)

〔位置〕調査区中央やや北寄り、SD17溝跡の南、SK6土坑の東に位置する。

〔重複〕SB9建物跡と位置が重複する。切り合いがなく新旧関係は不明である。

〔規模・形状〕平面規模は長軸178cm、短軸109cmの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは61cmである。

〔壁・底面〕底面はほぼ平坦である。底面から壁が急に立ち上がり、断面形は箱形である。

〔堆積土〕4層に細分され、壁沿いに崩落土とみられる褐色粘土質シルトが堆積する。

〔遺物〕出土していない。

【SK19土坑】(第8図)

〔位置〕調査区北東、SK3土坑の北、SB14建物跡の南に位置する。

〔重複〕SB11A建物跡、SB11B建物跡と位置が重複する。切り合いがなく新旧関係は不明である。

〔規模・形状〕平面規模は長軸181cm、短軸91cmの隅丸長方形を呈し、深さは61cmである。

〔壁・底面〕底面はほぼ平坦であり、中央に直径18cm、深さ24cmの小柱穴がある。底面から壁が急に立ち上がり、断面形は箱形である。

〔堆積土〕褐色粘土質シルトを主体とする。小柱穴部分は褐色砂質シルトである。

〔遺物〕出土していない。

(4) その他の遺構

【SX18性格不明遺構】(第8図)

〔位置〕調査区南東、SK8土坑、SK9土坑の南に位置する。

〔重複〕なし。

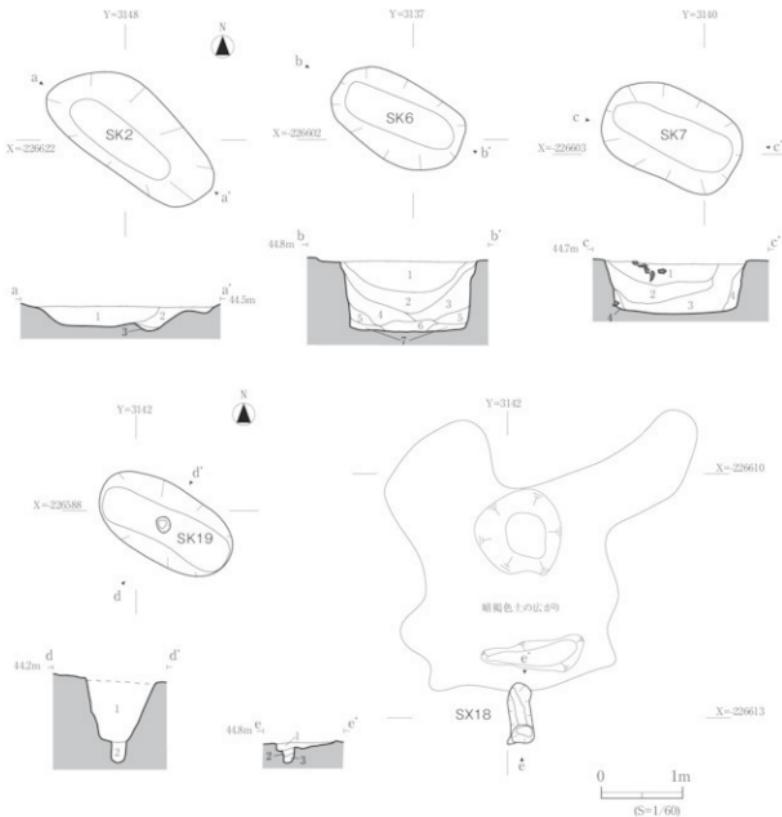
〔規模・形状〕ほぼ南北方向へ延びる溝状の遺構である。平面規模は長径75cm、短径27cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは最深部で24cmである。

〔壁・底面〕底面はやや凸凹があり、南側底面に直径13cm、深さ10cmの小穴がある。小穴の壁には比熱を受けた焼面がみられる。底面から壁が緩やかに立ち上がり、断面形は皿状である。

〔遺物〕出土していない。

(5) 遺構外出土遺物

搅乱層から縄文土器1点(写真図版4-7)、表土より煙管(吸口)(第4図4、写真図版4-13)と磁器1点(写真図版4-10)が出土した。



遺構名	剖序	土色	土性	特徴	性格
SK2	1	褐色 (10YR4-4)	シルト	地山粒・小礫を少し含む	自然堆積
	2	褐色 (10YR4-6)	シルト	地山粒をわずかに含む	
	3	褐色 (10YR4-4)	粘土質シルト	地山粒を含む	
SK6	1	黒褐色 (10YR2-3)	シルト	地山粒・小礫を少し含む	自然堆積
	2	暗褐色 (10YR3-3)	シルト	地山粒を含む	
	3	暗褐色 (10YR3-4)	シルト	地山粒を含む	
	4	暗褐色 (10YR3-3)	シルト	地山小ブロックを部分的に含む	
	5	暗褐色 (10YR3-4)	砂質シルト	地山ブロックを含む、壁崩落土	
	6	暗褐色 (10YR3-4)	シルト	地山粒を少し含む	
	7	暗褐色 (10YR3-4)	シルト	地山粒を含む、壁崩落土	
SK7	1	黒褐色 (10YR2-3)	シルト	地山粒を含む、炭化粒を少し含む	自然堆積
	2	暗褐色 (10YR3-3)	シルト	地山粒を多く含む。地山ブロックを部分的に含む	
	3	暗褐色 (10YR3-4)	シルト		
	4	褐色 (10YR4-4)	粘土質シルト	壁崩落土	
SK19	1	褐色 (10YR4-6)	粘土質シルト		自然堆積
	2	褐色 (10YR4-4)	砂質シルト		
SX18	1	暗褐色 (10YR3-3)	シルト	炭化粒・ブロックを含む、地山粒・地山小ブロックを少しある	自然堆積
	2	[±] 黄褐色 (10YR4-3)	シルト	地山粒・小ブロックを少しある	
	3	[±] 黄褐色 (10YR4-3)	シルト	地山粒を少しある	

第8図 SK2・SK6・SK7・SK19土坑、SX18性格不明遺構

3.まとめ

- ・掘立柱建物跡と溝跡、性格不明遺構を検出した。建物跡から出土した遺物は磁器と銭貨で、いずれも近世以降のものである。磁器は明の染付、銭貨は字の特徴から寛永13年（1636）から万治2年（1659）の間に鋳造された「古寛永」と推定される。
- ・明確に古代と断定できる遺構や遺物は検出されなかったものの、SX18性格不明遺構は溝状の平面形で端部に焼け面のある小穴がつき、堆積土に炭化物や焼土が含まれることから、カマドをもつ竪穴住居跡の煙道と推定される。また、北側に広がるシルト層の広がりは、竪穴住居跡の掘方埋土の可能性がある。
- ・SK6、SK7、SK19土坑についてはその形状から古代以前の陥し穴と推定される。



1. 調査区全景（東から）



2. 掘立柱建物群（東から）

写真図版 1 山王 B 遺跡全景



1. SB8・SB9 挖立柱建物跡、SD17 溝跡（南から）



2. SB9 P1断面（東から）



3. SB9 P3断面（東から）



4. SB9 P5断面（東から）



5. SB9 P6断面（東から）

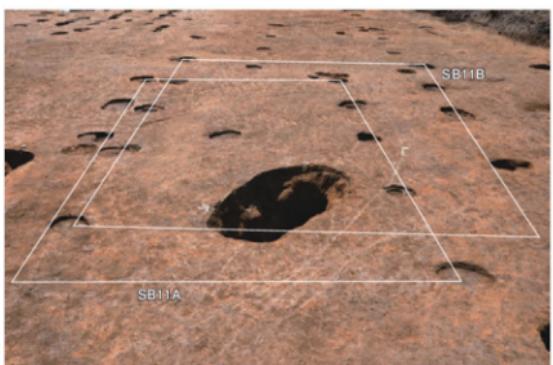


6. SB9 P8断面（東から）



7. SB9 P9断面（東から）

写真図版2 SB8・SB9 挖立柱建物跡



写真図版 3 SB10・SB11・SB12・SB13 挖立柱建物跡



1. SK2 土坑（北東から）



2. SK3・SK4・SK5 土坑（南から）



3. SK6 土坑（南から）



4. SK7 土坑（南から）



5. SK19 土坑（北から）



6. SX18 性格不明遺構（東から）



7 : 混乱 / 瓦文土器
8 : SK2 土坑 / 瓦文土器
9 : SB9 桁立柱建物跡 / 瓷器
10 : 表土 / 瓷器
11・12 : SB12 桁立柱建物跡 / 銀貨
13 : 表土 / 鐵管
(半縮尺はすべて 2/3)

写真図版 4 土坑および出土遺物

あそ う はら い せき
浅 生 原 遺 跡

かみ みや まえ い せき
上 宮 前 遺 跡

きた やま かみ い せき
北 山 神 遺 跡

みなみ やま かみ い せき
南山神 B 遺跡

浅生原遺跡（宮城県遺跡地名表記載番号：14013）

【調査要項】

所 在 地：宮城県亘理郡山元町浅生原字内平

調査原因：常磐自動車道建設事業

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育府文化財保護課

平成22年度＝千葉直樹、山口 淳、大沼真人

調査期間：平成22年5月27日から7月13日

調査対象面積：約14,000m²

調査面積：約2,200m²（隣接地を含む）

調査協力：東日本高速道路株式会社東北支社、山元町教育委員会

1. 調査の概要

調査は、調査対象地を横断する町道・浅生原線を境に南側をI区、北側をII区と分け、それぞれの区ごとに任意のトレンチを設定して行った（第1図）。I区の調査は平成22年5月27日から6月18日を行った。調査は南側から開始し、重機による表土除去後に遺構確認と精査を行った。任意のトレンチを13本設定し調査した結果、12トレンチから近世以降の土坑2基を検出し、精査した。

II区の調査は平成22年6月21日から7月13日を行った。任意のトレンチを12本設定して調査した結果、2トレンチから6トレンチの範囲で溝跡を2条検出した。このうち2トレンチと5トレンチについて拡張し、溝跡の精査を行った。また、遺跡の広がりを確認するため、大沢川の右岸に南北方向のトレンチを3本（9～11トレンチ）設定し調査したが、いずれのトレンチでも表土直下から地山礫層が現れ、遺構・遺物は検出できなかった。

遺物はI区とII区から、石器、土器、陶磁器、金属製品等が出土している。その後、図面および写真撮影による記録、重機による埋め戻し作業を行い、7月13日に調査を終了した。

2. 発見した遺構と遺物

発見した遺構はI区より土坑2基、II区より溝跡2条で、遺物は剥片石器、土器片、陶磁器、金属製品等がある。以下、主な遺構と遺物について記す。

(1) 溝跡

【SD3溝跡】（第2図）

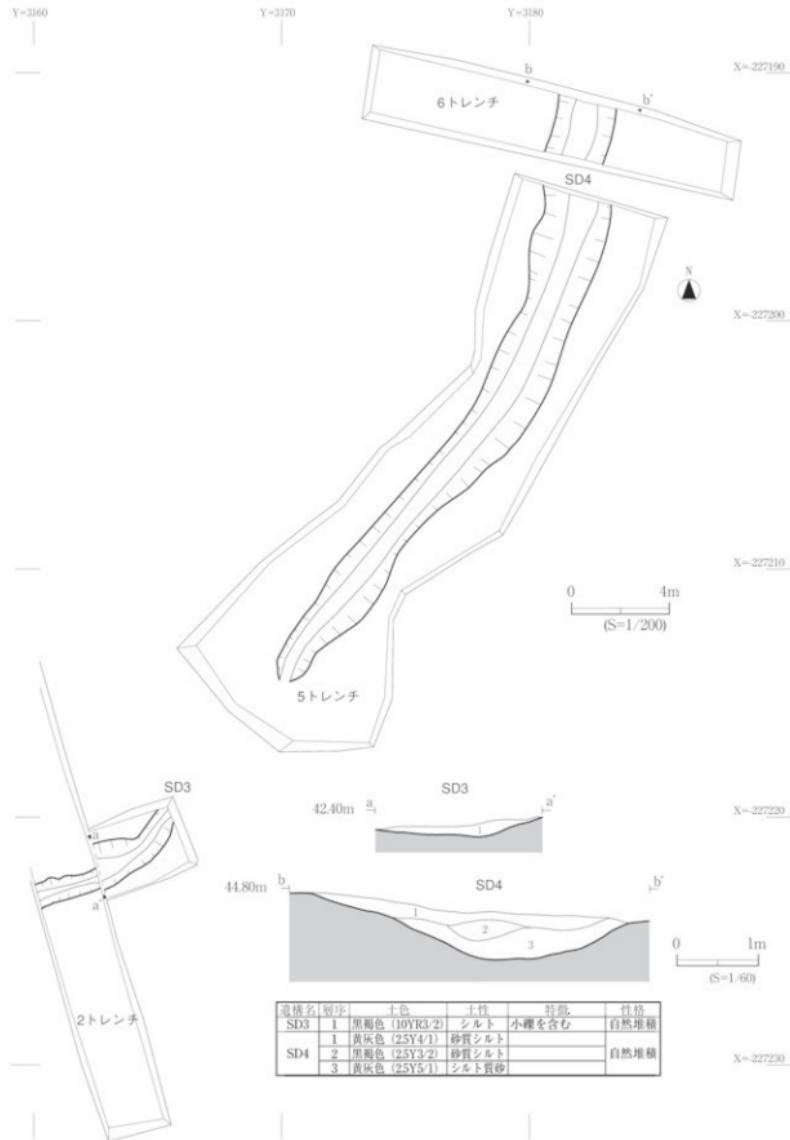
【位置】II区2トレンチの中央やや南に位置する、東西方向の溝跡である。

【重複】なし。

【規模・断面形】検出長約6.6m、上幅約78cm～191cm、下幅約15cm～92cm、残存する深さ約17cmである。



第1図 浅生原遺跡の範囲と調査区の位置



第2図 浅生原遺跡 SD3・SD4溝跡

〔堆積土〕 堆積土は1層で、礫粒～小礫を少し含む黒褐色シルトが自然堆積している。

〔遺物〕 堆積土より、中世陶器3点（第3図1、写真図版2-8-10）の他、近世以降の陶磁器4点、時期不明の土器片1点、石器（剝片）1点が出土した。

【SD4溝跡】（第2図）

〔位置〕 II区5トレンチから6トレンチに位置し、南西から北に向かい弧状に延びる。

〔重複〕 なし。

〔規模・断面形〕 5トレンチでは検出長約23.9m、上幅約146cm～292cm、下幅約59cm～122cmである。

6トレンチでは検出長約2.5m、上幅約240cm～247cm、下幅約90cm～110cm、残存する深さ約57cmである。断面形はともに皿状である。

〔堆積土〕 堆積土は3層に分かれる。

〔遺物〕 堆積土より中世陶器が1点出土した（第3図2）。

(2) 土坑

【SK1土坑】（第4図）

〔位置〕 I区12トレンチ中央やや西側に位置する。

〔重複〕 SK2と重複し、これより新しい。

〔規模・形状〕 平面規模は長径約170cm、短径約70cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは約35cmである。

〔壁・底面〕 底面はほぼ平坦である。底面から壁がやや急に立ち上がり、断面形は逆台形である。

〔堆積土〕 2層に分かれ、いずれも人為的に埋め戻されている。

〔遺物〕 1層から煙管（雁首）が1点出土した（第4図）。

【SK2土坑】（第4図）

〔位置〕 I区12トレンチの中央やや西側に位置する。

〔重複〕 SK1と重複し、これより古い。

〔規模・形状〕 平面規模は長軸約422cm、短軸約185cmの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは約40cmである。

〔壁・底面〕 底面はほぼ平坦であり、壁は底面からやや急に立ち上がる。断面形は逆台形である。

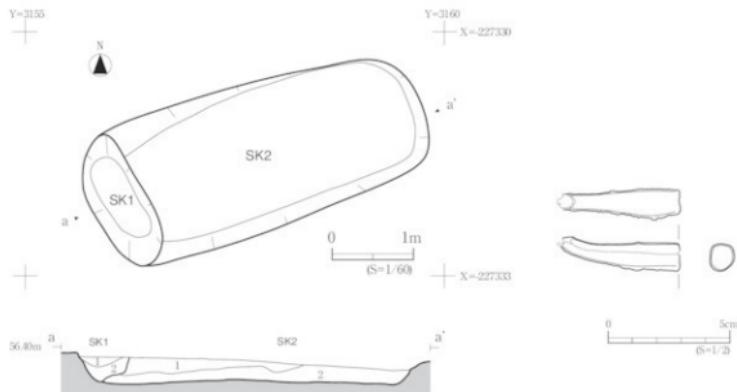
〔堆積土〕 2層に分かれ、いずれも自然堆積である。

〔遺物〕 1層から棒状の金属製品、2層からロクロ土師器片1点が出土した。



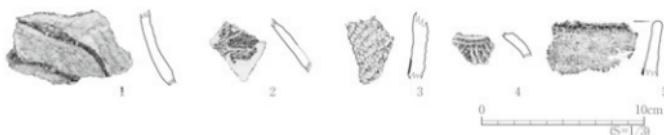
図番号	遺構・層	器種	产地	特徴	写真図版	登録
3-1	SD3溝跡/堆積土	中世陶器	窓地	体部破片、赤褐色	2-9	Po3
3-2	SD4溝跡/堆積土	中世陶器	窓地	体部破片、明赤褐色	2-11	Po4

第3図 浅生原遺跡 SD3・SD4溝跡出土遺物



遺構名	層序	土色	土性	特徴	性格	SK1	遺構・層	種別	全長	幅(口径)	写真図版	登録		
SK1	1	黄褐色 (10YR3.3)	砂質シルト	礫を含む	人為堆積		SK1-1層	匣管	堆高	51mm	11mm	2-12	Fe1	
	2	黒褐色 (10YR2.2)	シルト	炭・巣状ブロックを含む	人為堆積									
SK2	1	灰褐色 (10YR4.2)	シルト	礫を多く含む	自然堆積		SK2	1層	匣管	堆高	55mm	11mm	2-13	Fe1
	2	灰青褐色 (10YR4.2)	シルト	礫を非常に多く含む	自然堆積									

第4図 浅生原遺跡 SK1・SK2土坑および出土遺物



図番号	出土地点	特徴	写真図版	登録
5-1	12トレンチ	埴輪土器。胎土に砂粒を含む。中腹大木9~10式か	2-3	Po5
5-2	1区・表土	沈縫あり。埴文=弥生か	2-4	Po7
5-3	1区・表土	埴輪土器。胎土に砂粒を多く含む	2-5	Po8
5-4	12トレンチ	沈縫あり。埴文後期=弥生か	2-6	Po9
5-5	12トレンチ	口縁部。胎土に砂粒を含む。古代以前	2-7	Po1

第5図 浅生原遺跡 遺構外出土遺物

(5) 遺構外出土遺物

I 区 2 トレンチから縄文時代中期後葉～末葉の土器 1 点（第5図1）、I 区12 トレンチと表土から縄文時代から弥生時代の土器 5 点（第5図2～5）が出土した。

3.まとめ

平成22年度の調査では、近世以降の溝跡 2 条、土坑 2 基を検出した。SD3・SD4 溝跡は残りが悪く別遺構として検出したが、堆積土の特徴や方向が一致することから本来同一の遺構と推定され、自然流路と考えられる。

出土遺物は縄文土器、石器、土師器、陶磁器、煙管などがある。陶磁器には中世に属すると考えられるものが 4 点あった。胎土や焼成の特徴から 2 点が白石産、他は在地産と思われる。白石産については、概ね 13～14世紀のものと考えられる（宮城県教委1996）。

浅生原遺跡は縄文中・後期の散布地として登録されているが、今回の調査ではこの時期に相当する遺構は検出されなかった。溝跡から中世陶器片が、土坑から土師器片が出土したことから、周辺に古代や中世の遺構が存在する可能性がある。

上宮前遺跡（宮城県遺跡地名表記載番号：14071）

【調査要項】

所 在 地：宮城県亘理郡山元町浅生原字上宮前

調査原因：常磐自動車道建設事業

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

平成22年度＝千葉直樹、山口 淳、大沼真人

平成23年度＝初鹿野博之、大沼真人、三浦秋司、大坂 拓

調査期間：平成22年7月9日から7月23日

平成23年8月11日

調査対象面積：約3,600m²

調査面積：約800m²（隣接地を含む）

調査協力：東日本高速道路株式会社東北支社、山元町教育委員会

調査の概要

任意のトレンチを計29カ所に設定したが（第6図）、遺構は検出されず遺物も出土しなかった。全てのトレンチで、開田造成に伴う盛土が確認された。遺跡分布調査時に中世陶器と考えられる破片が採集されたのは遺跡東半部だが、この地点でもトレンチ内では厚い盛土が認められていることから、採集された遺物は本来、これら水田造成に係る客土中に含まれていたものである可能性が高い。



第6図 上宮前遺跡の範囲と調査区の位置

北山神遺跡（宮城県遺跡地名表記載番号：14072）

【調査要項】

所 在 地：宮城県亘理郡山元町高瀬字北山神

調査原因：常磐自動車道建設事業

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育府文化財保護課

平成22年度＝千葉直樹、山口 淳、大沼真人

平成23年度＝初鹿野博之、大沼真人、三浦秋司、大坂 拓

調査期間：平成22年7月28日から8月18日、11月22日、11月24日

平成23年9月5日から9月7日

調査対象面積：約4,200m²

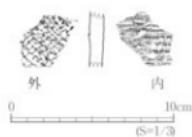
調査面積：約2,000m²（隣接地を含む）

調査協力：東日本高速道路株式会社東北支社、山元町教育委員会

調査の概要

平成22年度には遺跡の北半部を調査した。

その結果、時期不明の土坑が2基検出されたが、堆積土にしまりがなく、新しいものと判断した。中世以前の遺構は検出されず、遺物も出土しなかった。その結果を受けて、平成23年度には遺跡の南半部でトレンチ調査を実施したが、遺構は確認されなかった。遺物は耕作土から土器片が数点出土しており、うち1点は胎土に纖維を含み、外面に縄文、内面に条痕が確認できる（下図）。その他は胎土の特徴から縄文土器とみられるが、摩耗が激しく詳細は不明である。



第7図 北山神遺跡の範囲と調査区の位置および出土遺物

南山神B遺跡（宮城県遺跡地名表記載番号：14089）

【調査要項】

所 在 地：宮城県亘理郡山元町高瀬字南山神

調査原因：常磐自動車道建設事業

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育府文化財保護課

平成22年度＝千葉直樹、山口 淳、大沼真人、菊地逸夫、村上裕次

調査期間：平成23年2月28日から3月3日

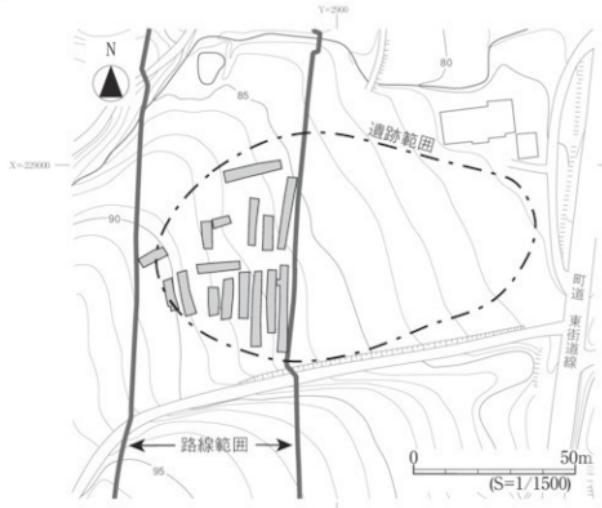
調査対象面積：約2,400m²

調査面積：約700m²（隣接地を含む）

調査協力：東日本高速道路株式会社東北支社、山元町教育委員会

調査の概要

任意のトレンチを計16カ所に設定して遺跡の内容と範囲について調査を行ったが（第8図）、今回の調査では、遺構は検出されなかった。遺跡南側では表土直下に礫を多く含む地山が検出され、北側では、沢跡を盛り土して埋め立てるなど地形を大きく改変して畑地を造成していることが明らかになった。遺物は遺構確認時に縄文土器が数点出土したのみだが、分布調査時には縄文土器、石器、土師器、中世陶器が採集されている。このことから、今回の調査地点の近辺に遺跡の中心部がある可能性がある。



第8図 南山神B遺跡の範囲と調査区の位置



1. 浅生原遺跡 調査地点（南東から）



2. 浅生原遺跡 I 区（東から）



3. 上宮前遺跡 調査地点（南西から）



4. 上宮前遺跡 トレンチ（西から）



5. 北山神遺跡 北側調査区（北から）



6. 北山神遺跡 トレンチ（北から）



7. 南山神 B 遺跡 調査地点（北から）



8. 南山神 B 遺跡 トレンチ（南から）

写真図版 1 浅生原遺跡・上宮前遺跡・北山神遺跡・南山神 B 遺跡



1. 浅生原遺跡 SK1・SK2 土坑断面（南から）



2. 浅生原遺跡 SD4 溝跡（南西から）



- 3: I区2トレンチ / 織文土器
4: 表土 / 土器（縄文～弥生か）
5: 表土 / 織文土器
6: I区12トレンチ / 土器（縄文～弥生）
7: I区12トレンチ / 土器（縄文～弥生）
8: S D3溝跡 / 中世陶器
9: S D3溝跡 / 中世陶器
10: S D3溝跡 / 中世陶器
11: S D4溝跡 / 中世陶器
12: S K1上瓦 / 錐管
(※縮尺はすべて1/2)

写真図版2 浅生原遺跡 遺構と出土遺物

引用・参考文献

- 相原淳一 1990 「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年」『考古学雑誌』第76巻第1号
- 相原淳一 2005 「宮城県における板式炉と集落の様相」日本考古学協会2005年度福島大会実行委員会「日本考古学協会2005年度福島大会シンポジウム資料集」
- 井 慶治 2005 「真野川上流域における縄文中期後葉から後期初頭の遺跡群」日本考古学協会2005年度福島大会実行委員会「日本考古学協会2005年度福島大会シンポジウム資料集」
- 小高町教育委員会 1987 「宮田貝塚」
- 佐々久・志間泰治・氏家和典 1971 「一戸戸沢横穴古墳群発掘調査報告書」『山元町誌』
- 七ヶ浜町教育委員会 1992 「水浜遺跡」七ヶ浜町文化財調査報告書第8集
- 紫桃正隆 1974 「史料 仙台領内古城・館」第四卷
- 志間泰治 1956 「宮城縣亘理郡における考古学上の遺跡」「宮城縣の地理と歴史」1
- 仙台市教育委員会 1985 「中田畠内遺跡—第2次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第78集
- 築館町教育委員会 2005 「般津遺跡」築館町文化財調査報告書第18集
- 日本考古学協会2005年度福島大会実行委員会 2005 「シンポジウム I「板式炉と縄文文化」」「日本考古学協会2005年度福島大会シンポジウム資料集」
- 丹羽 茂 1974 「福島県における縄文時代中期の住居・集落研究の現状と問題点」『福島考古』第15号
- 丹羽 茂 1981 「大木式土器」「縄文文化の研究 4」雄山閣
- 秦 昭繁 1990 「特殊な剥離技法をもつ東日本の石器」『考古学雑誌』第76巻第4号
- 福島県教育委員会 1984 「上ノ台A遺跡(第1次)」「真野ダム関連遺跡発掘調査報告V」福島県文化財調査報告書第128集
- 福島県教育委員会 1988 「羽白D遺跡(第2次)」「真野ダム関連遺跡発掘調査報告XI」福島県文化財調査報告書第193集
- 福島県教育委員会 1990 「上ノ台A遺跡(第2次)」「真野ダム関連遺跡発掘調査報告XIV」福島県文化財調査報告書第230集
- 福島県教育委員会 1995 「第2編 段ノ原B遺跡」「相馬開発関連遺跡調査報告III」福島県文化財調査報告書第312集
- 福島県教育委員会 1996 「第1編 猪倉B遺跡」「相馬開発関連遺跡調査報告IV」福島県文化財調査報告書第326集
- 福島県教育委員会 1999 「獅子内遺跡(第4次調査)」「小屋館遺跡(含小屋館跡)」福島県文化財調査報告第351集
- 福島県教育委員会 2002 「常磐自動車道遺跡調査報告31」福島県文化財調査報告第390集
- 宮城県教育委員会 1980a 「宇賀崎貝塚」「金剛寺貝塚 宇賀崎貝塚 1号埴他」宮城県文化財調査報告書第67集
- 宮城県教育委員会 1980b 「安久東遺跡」「東北新幹線関係調査報告書IV」宮城県文化財調査報告書第72集
- 宮城県教育委員会 1983 「宮前遺跡」「朽木橋横穴古墳群・宮前遺跡」宮城県文化財調査報告書第96集
- 宮城県教育委員会 1985 「中峯遺跡発掘調査報告書」宮城県文化財調査報告書第108集
- 宮城県教育委員会 1986 「今熊野遺跡II 縄文・弥生時代編」宮城県文化財調査報告書第114集
- 宮城県教育委員会 1987 「前田遺跡」「中ノ内A遺跡・本屋敷遺跡他—東北横断自動車道遺跡調査報告書II—」宮城県文化財調査報告書第121集
- 宮城県教育委員会 1988 「大槻川・小槻川遺跡 七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告集IV」宮城県文化財調査報告書第126集
- 宮城県教育委員会 1991 「合戦原遺跡」「合戦原遺跡ほか」宮城県文化財調査報告書第140集
- 宮城県教育委員会 1993 「狐塚遺跡」「狐塚遺跡ほか」宮城県文化財調査報告書第157集
- 宮城県教育委員会 1994 「藤田新田遺跡」宮城県文化財調査報告書第163集
- 宮城県教育委員会 1996 「一本杉窓跡群」宮城県文化財調査報告書第172集
- 宮城県教育委員会 2002 「館の内遺跡」「名生館遺跡ほか」宮城県文化財調査報告書第188集
- 前川 要 1989a 「平安時代における日本出土施釉陶磁器研究の現状と課題」「歴史時代土器研究」第5・6号
- 前川 要 1989b 「平安時代における日本出土施釉陶磁器の様式論的研究(上・下)」「古代文化」第41巻8・10号
- 村田晃一 1995 「宮城郡における10世紀前後の土器」『福島考古』第36号
- 山元町教育委員会 1994 「山元町ふるさと地名考」
- 山元町教育委員会 1995 「狐塚遺跡」山元町文化財調査報告書
- 山元町教育委員会 2004 「北経塚遺跡」山元町文化財調査報告書第3集

山元町教育委員会 2010 「北経塚遺跡」山元町文化財調査報告書第4集

山元町史編纂委員会 1971 「山元町誌」

山元町史編纂委員会 1986 「中島貝塚」「山元町誌 二巻」

報 告 書 抄 錄

ふりがな	にしいしやまはらいせきほか						
書名	西石山原遺跡ほか						
副書名	常磐自動車道建設関連遺跡調査報告書						
卷次	I						
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書						
シリーズ番号	第230集						
編著者名	初鹿野博之・山口淳・千葉直樹・大坂拓						
編集機関	宮城県教育委員会						
所在地	〒980-8423 宮城県仙台市青葉区本町3-8-1 TEL 022-211-3684						
発行年月日	西暦2012年3月26日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	世界測地系 北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因	
にしいしやまはらいせき 西石山原遺跡	亘理郡山元町 高瀬字西石山原	043621	14084 37度 56分 38秒	140度 52分 00秒	2010.07.28~12.09 2011.03.04~03.11 2011.06.13~09.27	5,200m ² (9,000m ²)	常磐自動車道建設事業
さんうのう いせき 山王B遺跡	亘理郡山元町 浅生原字山王	同上	14082 37度 57分 31秒	140度 52分 09秒	2010.05.10~06.21 2010.11.25 2012.02.08~02.09	2,100m ² (4,500m ²)	同上
あさうねじせき 浅生原遺跡	亘理郡山元町 浅生原字内平	同上	14013 37度 57分 07秒	140度 52分 09秒	2010.05.27~07.13	2,200m ² (14,000m ²)	同上
かみみやまえいせき 上宮前遺跡	亘理郡山元町 浅生原字上宮前	同上	14071 37度 56分 46秒	140度 52分 03秒	2010.07.09~07.23 2011.08.11	800m ² (3,600m ²)	同上
きたかみやまえいせき 北山神遺跡	亘理郡山元町 高瀬字北山神	同上	14072 37度 56分 25秒	140度 51分 59秒	2010.07.28~08.18 2011.09.05~09.07	2,000m ² (4,200m ²)	同上
みなみやまかまくら 南山神B遺跡	亘理郡山元町 高瀬字南山神	同上	14089 37度 56分 13秒	140度 51分 59秒	2011.02.28~03.03	700m ² (2,400m ²)	同上
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
西石山原遺跡	集落跡	縄文・平安	堅穴住居跡・ 掘立柱建物跡・土坑	縄文土器・石器・土 師器・須恵器	縄文時代中期の複式炉を もつ堅穴住居跡が5軒検出された。		
山王B遺跡	集落跡	近世	掘立柱建物跡・ 溝跡・土坑	磁器・古銭(寛永通 寶)			
浅生原遺跡	散布地	縄文・中世	溝跡・土坑				
上宮前遺跡	散布地	平安・中世					
北山神遺跡	散布地	縄文					
南山神B遺跡	散布地	縄文・古代					
要約					西石山原遺跡では、主に縄文時代前期・中期、平安時代の遺構・遺物が出土した。縄文時代前期前業の土器および石器がまとまって出土する土坑が10基あり、一部は住居跡の可能性がある。縄文時代中期末業には、堅穴住居跡5軒、貯藏穴状土坑7基などが見つかっている。住居は複式炉を伴い、最も大型のSIE2堅穴住居跡では4時期の変遷が確認された。宮城県沿岸南部ではこの時期の集落の調査事例は少なく、良好な資料といえる。10世紀前半とみられるSII78堅穴住居跡からは、土師器・灰焼土器・台付皿ほか、製塼土器とみられる特殊な土師器が出土した。		
					山王B遺跡では掘立柱建物跡10棟、溝跡1条、土坑8基が検出され、磁器や寛永通寶が出土していることから、主に近世以降とみられる。		
					浅生原遺跡では、自然流路とみられる溝や時期不明の土坑が検出された。北山神遺跡・上宮前遺跡・南山神B遺跡では、耕作土中から遺物の出土がみられたものの遺構は検出されなかった。		

宮城県文化財調査報告書第230集

西石山原遺跡 ほか

常磐自動車道建設関連遺跡調査報告書 I

平成24年3月21日印刷

平成24年3月26日発行

発行 宮城県教育委員会
仙台市青葉区本町三丁目8番1号
